74
249

陸軍少將男爵生田毅著

英皇戴冠式參列

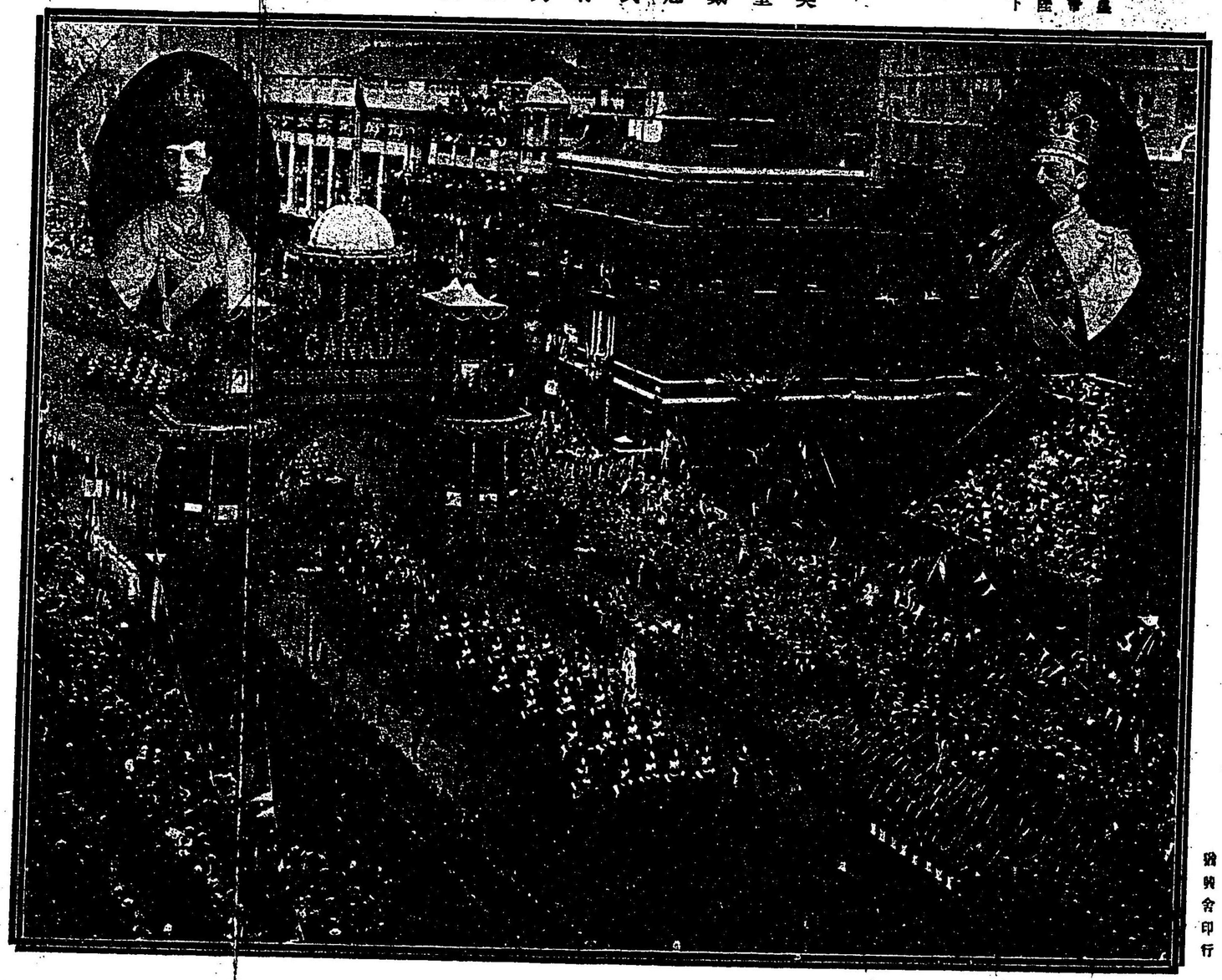
渡英日錄

東京　軍事教育會藏版

皇后陛下

英皇戴冠式行列之圖

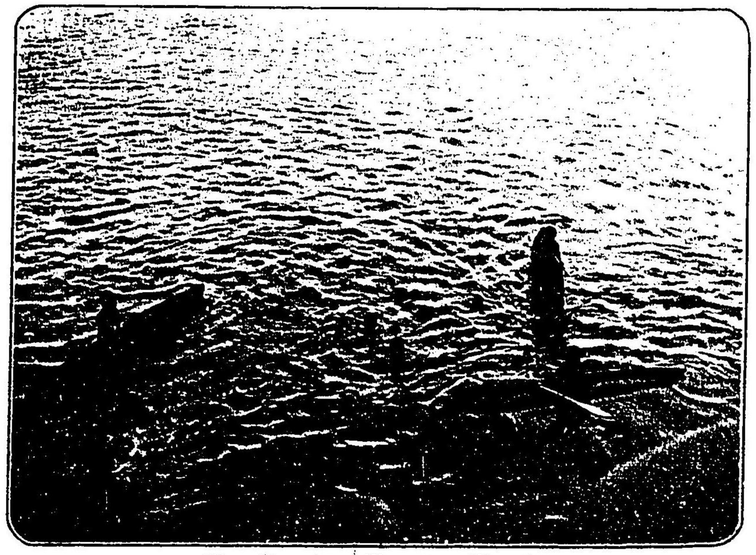
皇帝陛下



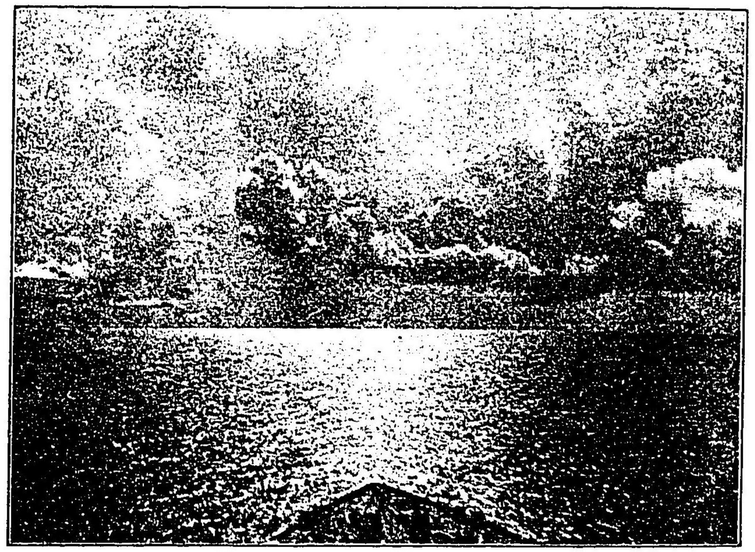
發興舍印行

第一ーリトクキグ 繋乗ンンルキ

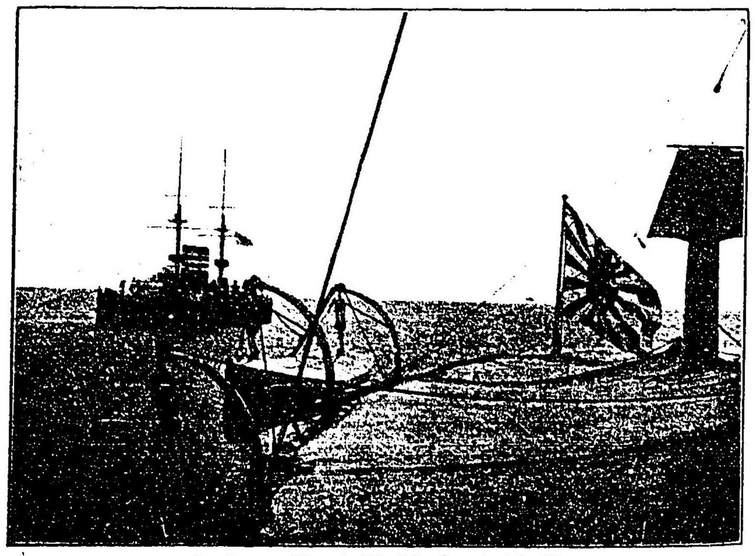
樂　奏　內　艦



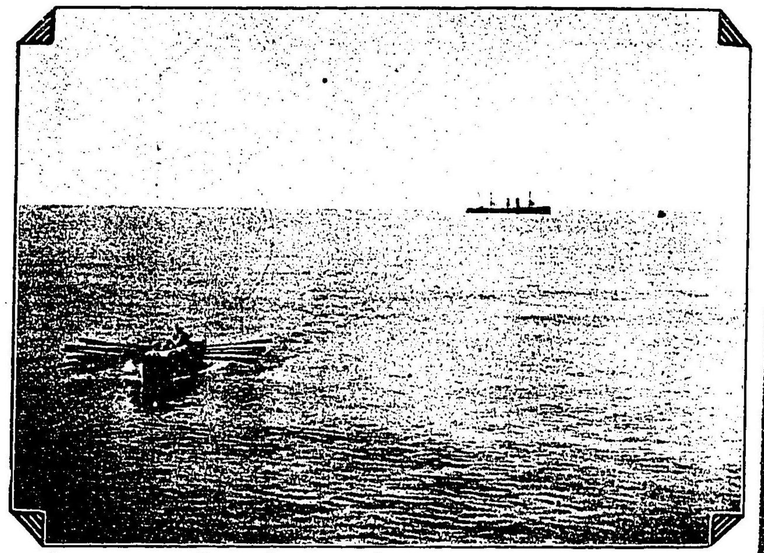
遊　舟　兒　蟹　坡　嘉　新



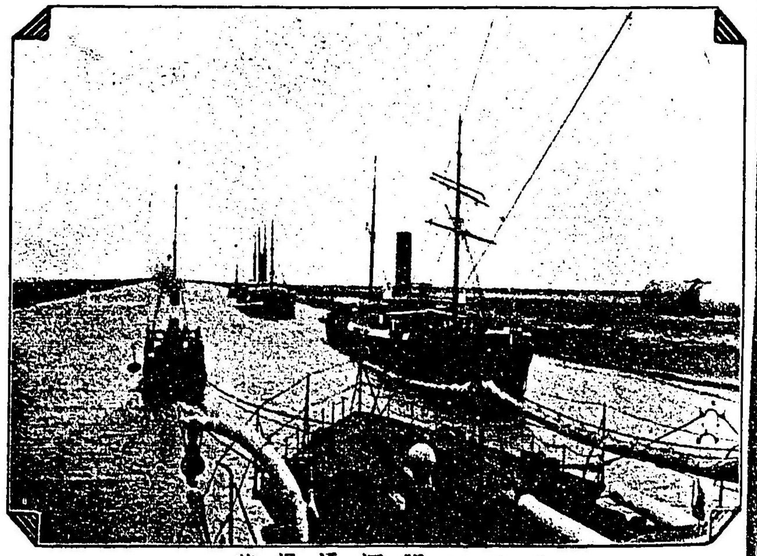
印度洋の夕陽



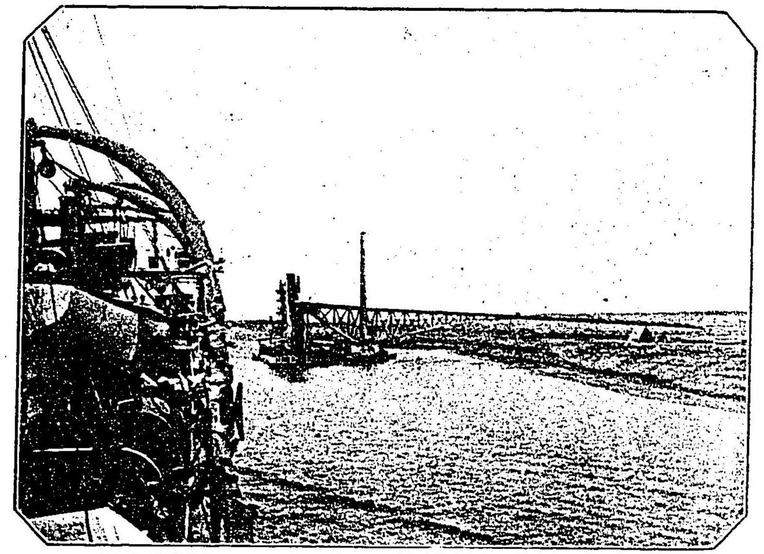
印度洋中軍艦三笠に會合



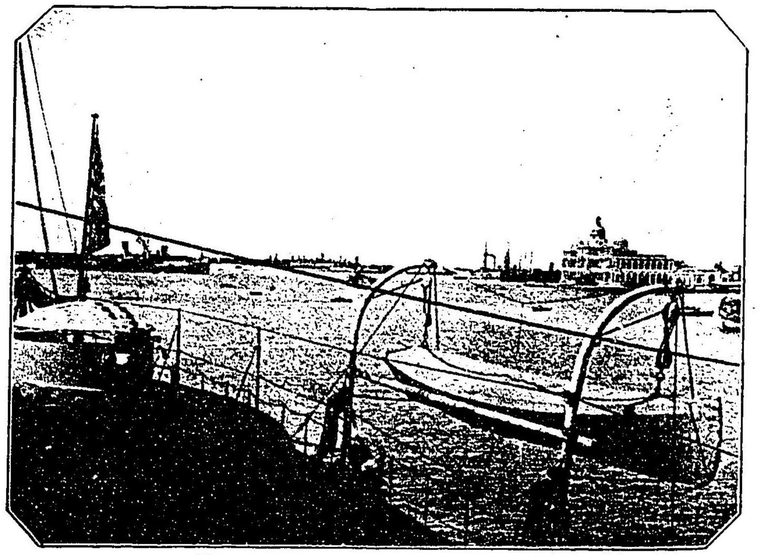
アラビヤ海中の端舟競漕



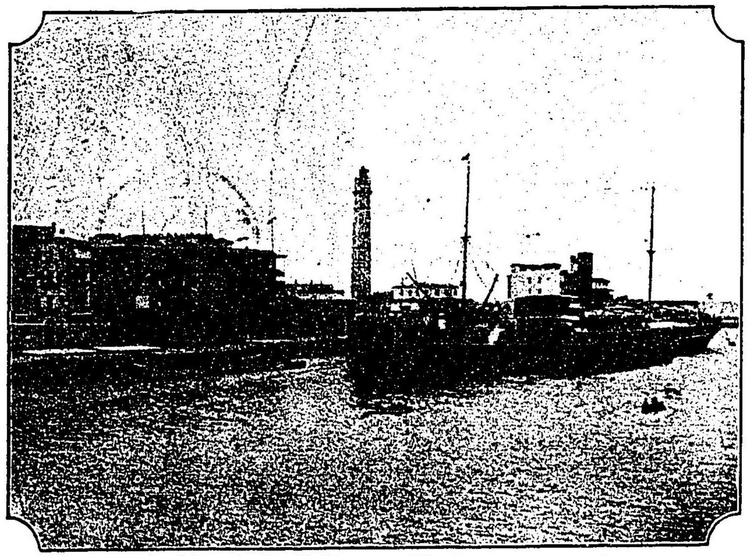
スエス運河通過其一



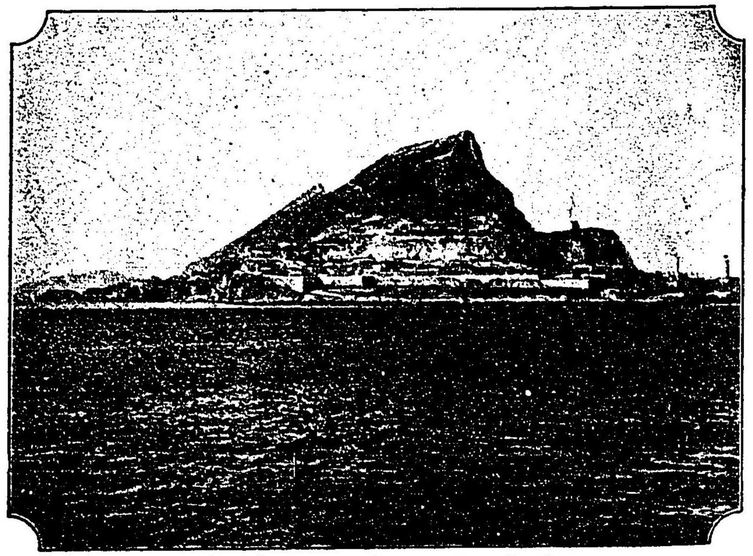
スエス運河通過其二（遠に見ゆるは浚渫船なり）



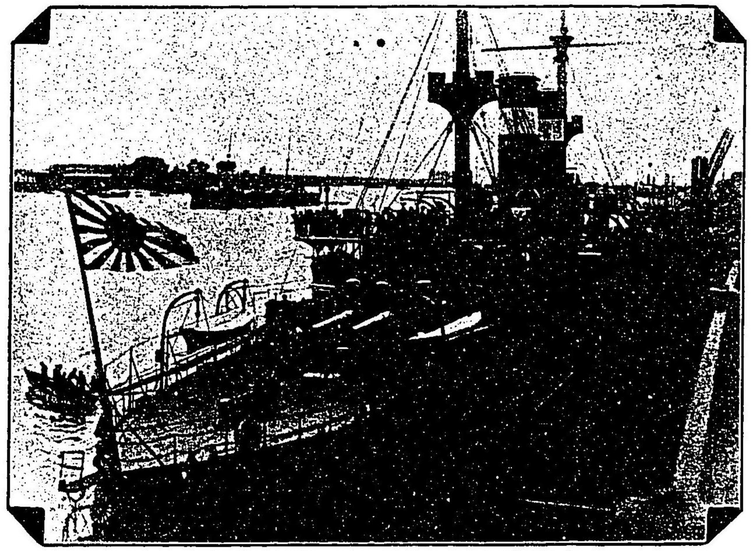
埃及ポートセッド港



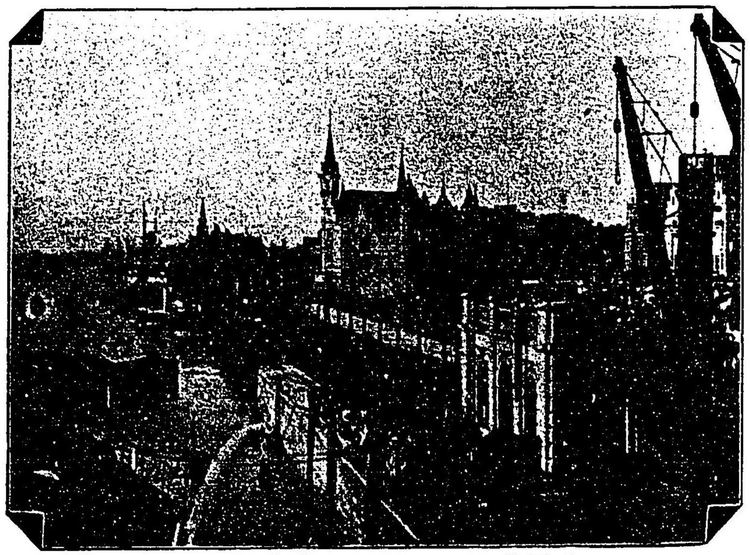
ポートセッド港より我備後丸に會合



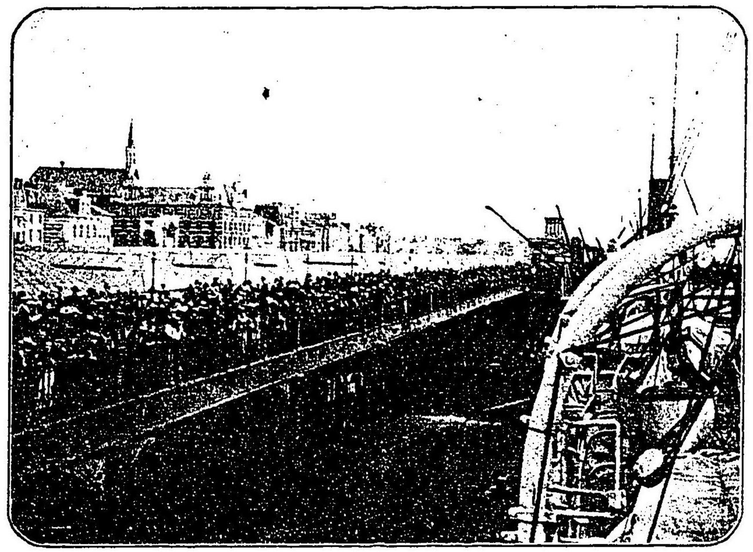
ジブラルタルの要害



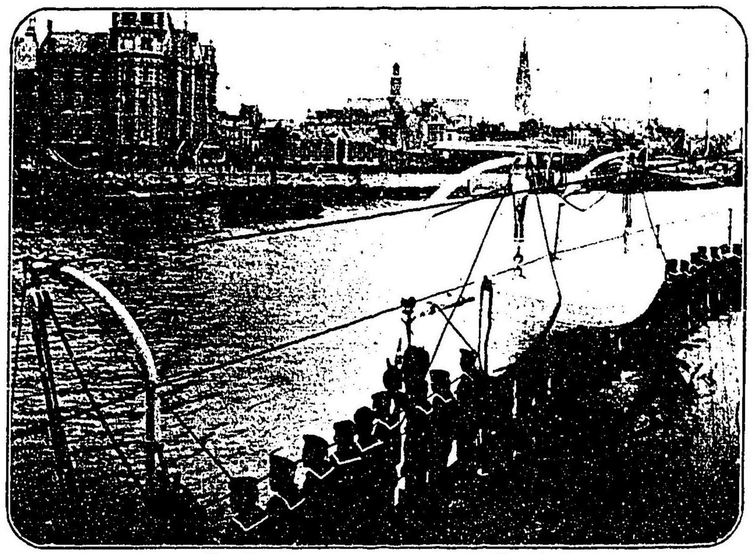
白耳義アントワルプ港碇泊其一



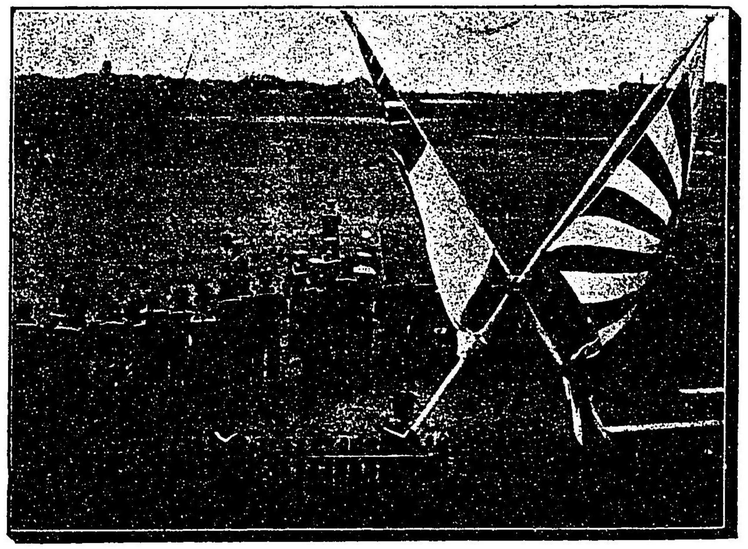
白耳義アントワルプ港碇泊其二



白耳義アントワルプ港碇泊中市民群集

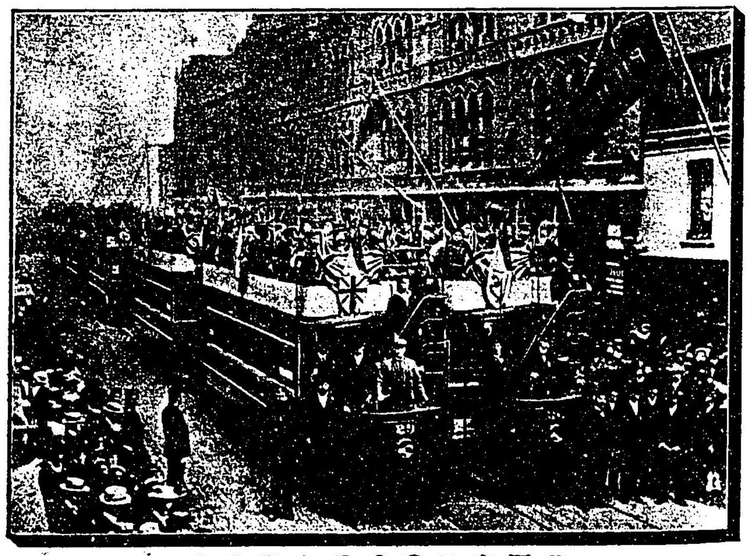


白耳義アントワルプ港告別

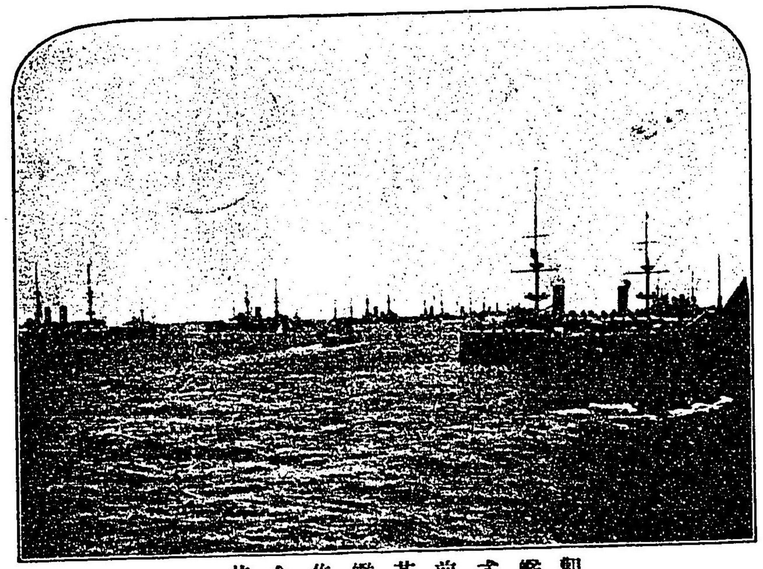


（紅朝は我水兵白朝は英國水兵なり）

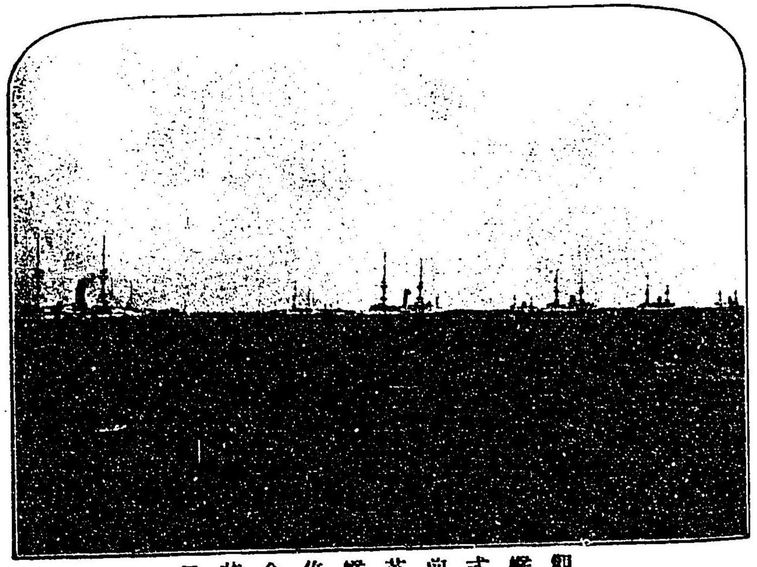
日英兩國水兵運動會（英國レヤチス陸上に於て擧行）



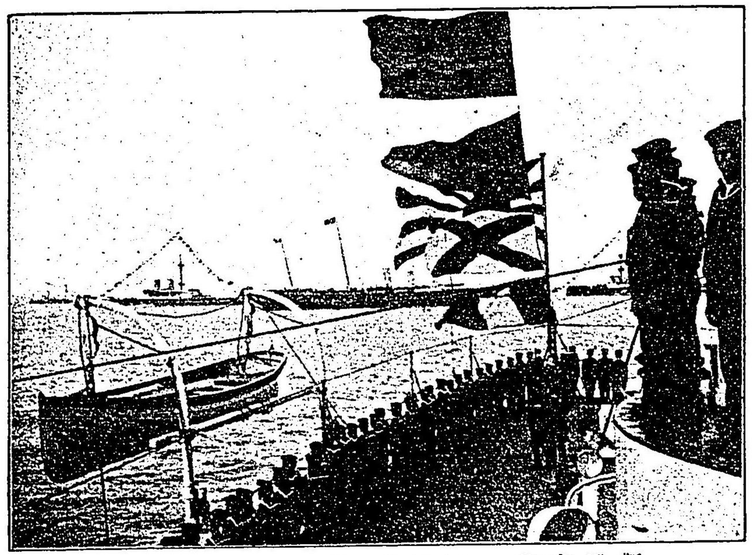
英國市民我兵員を歡迎す



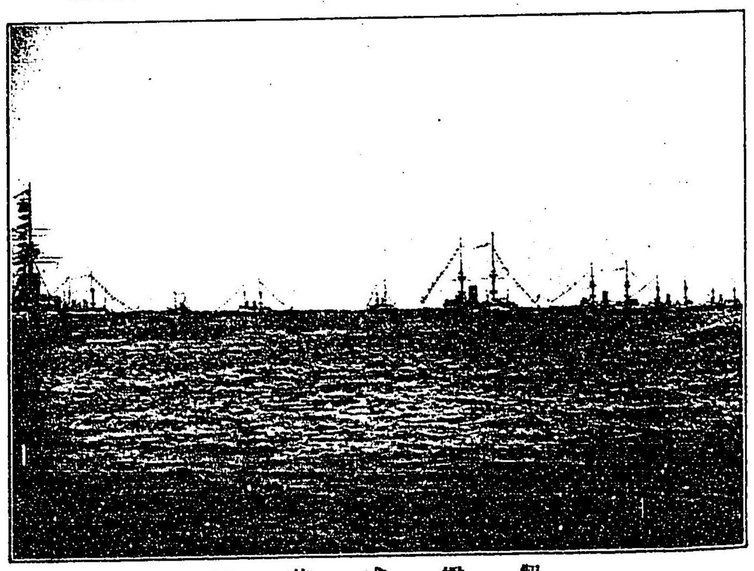
一其合集艦英前式艦觀



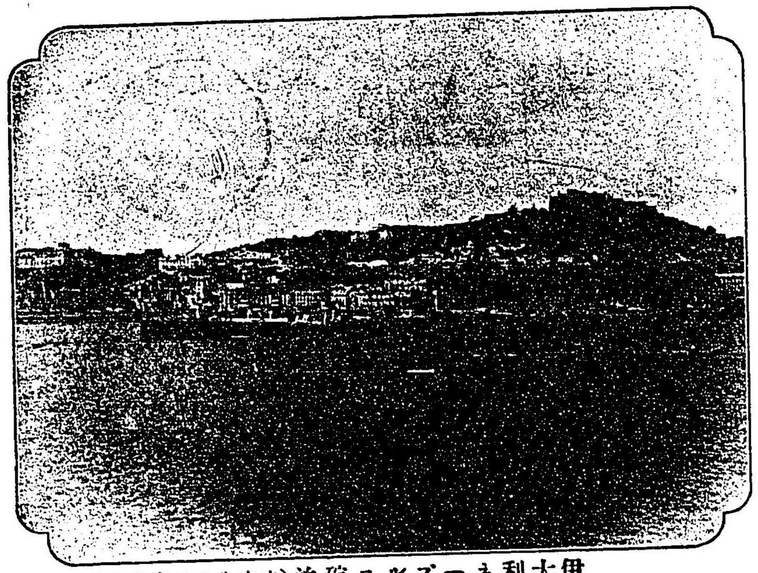
二其合集艦英前式艦觀



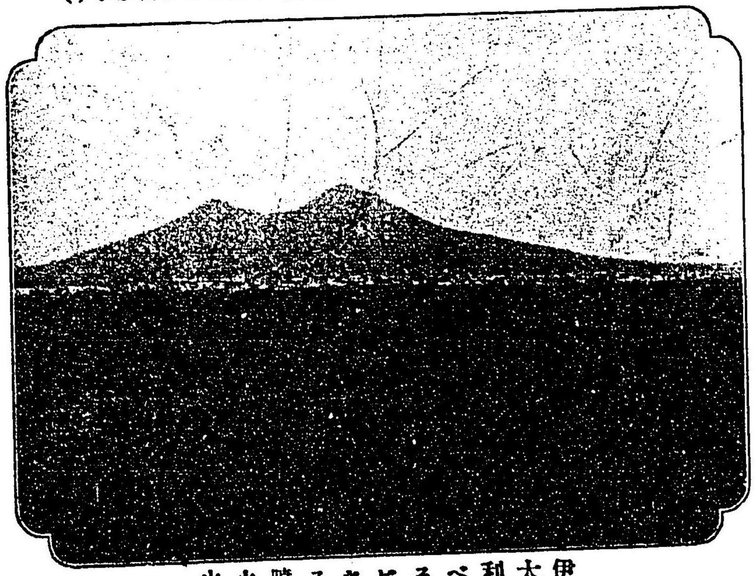
觀艦式典一（中央にあるる三檣二煙突を有するもの御召艦なり）



觀艦式典二



伊太利ネーブルス碇泊（中央ふるはる高砂ふり）



伊太利ベスビヤス噴火山

例言

一本書は予が日記中より抜萃せるものにして其目的は專ら少年子弟の海事思想涵成に益する所あらしめんとするに在り故に煩を避け冗を削り且文學趣味を加へて讀者の厭かざらんことを務めたるを以て勢ひ淺薄に流れ固より識者の一顧を値ひするものにあらず若し夫れ專門的研究を爲さんと欲するものは去つて昨年六月以後の水交社記事を繙け其紙上に掲載せられたる伊集院司令官の報告は遣英艦隊の動作に關し細大洩すこと無かるべきなり

一本書は歸航の途中艦内に於て始めて起草せるものにして紅海印度洋等の酷熱と毎日施行の諸操練とは予の遲筆をして更に遲滯せしめ辛ふして稿を了へたるを以て文章字句共に宜きを得ず然れども歸朝後公務愈〻多忙にして訂正するの暇なく其儘速に上梓するに至れるは深く讀者に謝する所なり

一片假名を以て記する外國の官名は右傍に｜を官職名は左傍に｜を地名は右傍に‖を物名艦船は上下に「」を施し以て本文を混亂するの憂なからしむ例へばネルソン、サーゾブラルタル、旗艦「ヴィクトリー」號等の如し

一本書挿入の寫眞中戴冠式行列と「ヴイクトリト」號とを除けば他は盡く淺間機關長海軍機關中監關重忠氏の撮影せるものにして特に掲載を許容せらたるは予の感謝に堪へざる所なり

明治三十六年三月

著者識

英皇戴冠式參列

渡英日錄（目次）

其一、横濱より新嘉坡に到る　一
其二、新嘉坡碇泊中に古倫母に到る　二三
其三、古倫母よりポートセッドに到る　三五
其四、ポートセッドよりモルタ嶋に到る　五五
其五、モルタより英國プリマスに到る　六〇
其六、英國滯在の一　六九
其七、英國滯在の二　七四
其八、英國滯在の三　七九
其九、英國滯在の四　八五
其十、アントワープ碇泊　九四

其十一、ヴヰクトリー號觀覽　一〇七
其十二、戴冠式　一一六
其十三、大觀艦式並英國出發　一二三
其十四、歸航の一　一三四
其十五、歸航の二　一四六

戴冠式參列

渡英日錄

子爵　小笠原長生著

其一　横濱より新嘉坡に至る

明治三十五年四月一日。帝國軍艦淺間及高砂の二隻は。常備艦隊司令官伊集院海軍少將の指揮の下に英國渡航の命令を受けたり。蓋し帝國軍艦が艦隊を編成して歐洲に回航する如きは。實に空前の盛事にして。我海軍史上の一大光彩たらずんばあらず。此行の目的や。言ふ迄もなく英國新皇帝の戴冠式に參列の爲めなりと雖も。之が動機は。近く成立したる日英同盟に在るを以て。予は渡航記事に入るに先だち。茲に彼我通交の歴史を繰返し。以て該盟約の由來が一朝一夕の故にあらざることを證明せんとす。

往昔。德川家康の政權を掌握するや。豊太閤の朝鮮に於ける失敗に鑑み。努めて外國

と武力上の關係を避け、只管通商のみを奬勵して國富を增進せんと謀り、慶長年間（慶長元年は西暦千五百九十六年に當る）太泥（麻剌加半島に在り）安南、暹羅、東埔寨（暹羅の南に在り）呂宋（當時既に西班牙領たり）等の諸國に書面を贈りて、熾に通商を開始せしが、其際偶〻英人ウヰリアム、アダムスなる者あり、航海を業として遠く東洋に來り、海上颱に遭ふて我九州に漂着し、疑はれて一旦獄に投ぜられしも、幾もなく免されて家康に謁し、大に其の信用を受け、後ち終に帝國臣民たるに至れり、是れ歐人歸化の嚆矢にして、家康特に采地を相州逸見村に與へ、又奉行某の女を娶りて妻たらしむ、アダムス深く其恩に感ず、外交に關して獻策する所少なからず、已にして家康彼れに命ずるに英式の大船を製造すべきを以てす、アダムス元と船匠にあらざるも、勢ひ辭すること能はず、苦心經營の末、終に相州沿岸に於て河口に沿へる砂上に船體を組立て、漸く成るに及ひて、船下の砂土を掘り斯の如くすること數回にして、一個の船渠を造出し、而して後ち河口を塞ぎ、水を湛へて船體を浮泛せしめ、首尾能く排水量百二十噸許の一船を製造したり、是れ實に歐式造船の權與にして、海國民たるもの〻決して閑却すべからざる事實なりとす、尋で彼れは蘭船に託して一書を爪哇島に在る同胞に送り、以て日本と

の通商を勸告したり、其大意に曰く、日本人は性質善良にして、一朝事あれば勇敢死を畏れず、法を守ること公平なり、又國內到る處金銀多く、一般に歐人との貿易を希望し居るが故に、英人は宜しく來て通商を試むべしと、是に於て英國政府は慶長十七年（西暦千六百十二年）三隻の船を我邦に派し、懇篤なる書翰を家康に贈りて互市を乞ふ、家康之に答へて曰く、自今、我邦正に貴國と隣誼を修め、互に商船を通せん、萬里の雲濤を隔つと雖も、須らく咫尺の封疆の如くすべしと、乃ち七個條の約款を結び通商を開始したり、其の約文は左の如し、

一、イギリスより日本へ今度始めて渡海の船方商賣方の儀無相違可仕候、渡海仕付ては諸般可令免許事、

一、船中の荷物義は、用次第に目錄にて可召寄事、

一、日本の中何の港へ成共着岸不可有相違、若難風に逢、帆楫を絶、何の浦へ寄候共、異儀有之間敷事、

一、江戸に於て望の所に屋敷可遣の間、家を建致居住商賣可仕候、歸國の儀は何時にてもイギリス人可任心中、立置候家はイギリス人可爲儘事、

一、日本の内にてイギリス人病死など仕候はゞ其者の荷物無相違可遣事。

一、荷物オランカイ狼籍仕間敷事。

一、イギリス人の内徒者於有之者依罰輕重イギリス大將次第可申付事。

斯の如くにして兩國始めて握手し家康は十分なる好意を以て帝國居留の英人を保護したり今其一例を擧ぐれば當時英蘭兩國人互に相嫉視し其極蘭人は我平戸に於て英人を襲擊するに至りしが其際我邦人は英人を援けて蘭人を懲し且つ蘭人の爲めに捕はれたる英人を疵護し斷然之が引渡しの請求を拒絶せし事あり斯の如く日英の關係は漸次親密の度を進め遂に江戸京都大阪等の各地に英人居留地設置の議出でたる程なりしに東洋に於ける英人の商權未だ遠く蘭人に及ばざりし爲め終に英人は彼れの壓倒する所と爲りて全然通商を廢止するの已を得ざるに至りぬ加之德川政府も亦幾もなくして絶對的鎖國政策を採りしを以て兩國民の交際一旦中絶の悲運に會せしも爾後英國の海軍活躍して漸次威を海上に振ひ東洋方向に尨大なる殖民地を獲得せし結果更に我國民の狀況を視察せんと欲し其艦船の我近海に出沒せしこと前後十四回に及べり就中文化五年(西暦千八百

八年トラフアルガー海戰後三年なり)英船の長崎に來泊せる際の如き奉行松平康英國防の職責を全うする能はざるを慨き自刃して死し又警衛の任に當れる佐賀藩士の屠腹せるもの七人に達したり此一事端なくも海上權力なき陸上防禦の空も頼むに足らざることを事實の上に證明したるを以て卓見の士は爭ふて大船製造水軍整備の急務なるとを道破し國民も亦鎖國の迷夢より醒め來り茲に海軍思想勃然として復興し隨て歐式海軍設立の氣運を促すに至れり尋で寛政八年(西暦千七百九十六年)には一英船我蝦夷海岸に來りて幕吏に面接し露人頻りに南下して日本の北部屬島を押領せんとす貴國宜しく之に備ふる所なかるべからずと注意せり既にして帝國は鎖國政策を捨て諸外國と條約を訂結するに際し英佛聯合して露國と開戰せることあり當時英國軍艦我長崎に入港し日本の諸港に碇泊するの許可を請求して曰く露國歐洲を押領するの野心あるを以て弊邦は各國と力を合せて露國を征討し露軍策盡きて自國の港灣に蟄伏せり此に於て各國露人の船砦を破壞せんと決議す抑も露國の漸次其境域を擴めて樺太より北蝦夷及千島に及ぼし延て貴國にも志あるは明亮なり我艦隊は大英國女皇の命を奉じ露國軍艦

若くは商船を捕獲せんが爲め貴國の港に入泊することあるべし是れ同盟各國の希望せる所なるを以て冀くは免許せられんことを尋で安政五年(西暦千八百五十八年)には同國使節ロルトエルギン軍艦四隻を率ゐて品海に來り條約を訂せんことを請へり又我邦に於て歐式海軍設立の擧あるを聞き同國女皇陛下は特に汽船一隻を寄贈したり觀光艦と稱するもの即ち是れなり然るに當時我邦の諸侯中開國に對して懷焉の念を抱くもの尠なからず機の乘ずべきあらば威武を外人に示さんと欲し頗る强硬の態度を固執したる結果遂に鹿兒島及馬關の砲戰を惹起するに至れり此の攻擊たる前回は七隻の英艦を以てし次回は英佛蘭米四個國の聯合艦隊十七隻を以て行ひたりと雖も其の主動力たりしものは亦實に英國艦隊に外ならざりしなり抑馬關は附近の海路極めて危險なるのみならず陸上には十四個所の砲台を布置し之を守るに三千の勇兵を以てす夫れ斯の如く頗る形勝の位置を占めたるにも拘らず一戰忽ち彼れの占領する所となり縱ひ一時にもせよ外國々旗を帝國の海岸に樹立せしめたるは實に終天の恨事と謂はざるべからず然れども我國民は之が爲め海軍擴張の忽諸に附すべからざることを自覺せるが故

に一面に於て此の打擊は吾人に對する好箇の敎訓として彼れに感謝する所なくんばあらざるなり爾後明治の聖代に至り海軍の基礎確立せらるゝや英人は終始之が指導者と爲り以て我青年士官を敎育薫陶し彼我の交情愈親密の度を加へたり既にして二十七八年の戰役起るや我海陸軍は破竹の勢を以て敵軍を擊破し未だ幾年ならず清國政府をして終に和を請ふに至らしめしが馬關條約の後東洋の天地益多事なるに從ひ日英兩國の親交は愈層積して殆ど離るべからざるの關係を生ずるに至りぬ無言の同盟は業に已に此時に於て默契せられたりと謂ふべし果せる哉本年一月三十日二十世紀外交史上の一異彩たる日英同盟條約は英京倫敦に於て外務大臣ランスダウン卿と我特命全權公使林男爵との間に記名調印を了し公然世界に發表せられたり嗚呼一は西洋に於て最も名譽の歴史に富める最舊の海軍國にして他は東洋に於ける新進氣鋭の海軍國也其の相結合する元より偶然にあらずと雖も彼れが從來執り來れる孤立政策を捨てて異人種異宗敎なる我帝國と同盟するに至りしは即ち我日本の武名彼れをして其の信賴するに足るべきことを確認せしめたるの結果に外ならざるべし是れ豈に國家の一大快事に

あらすや。此際是時。英國新皇帝、皇后兩陛下は。本年六月下旬を期し。戴冠の大儀式を擧行せられんとす。帝國たるもの。義當に新同盟國に對して十分の敬意を表する所なかるべからず。皇艦淺間。高砂の二艦に遣英の命下れるは元より其所なりと謂ふべし。

予は明治二十八年より陸上勤務と爲り海軍々令部に出仕して日清海戰史の編纂に從事すること殆ど七星霜。徒らに歲月のみを空費して。未だ一介の功だもあらざりしに。料らざりき斯の最も名譽なる渡英の行に與からんとは。殊に兩艦の少佐以上には破格を以て御陪食被仰付。惶くも　龍體に咫尺し奉ることを得しは。抑も何の光榮ぞ。唯　聖恩の優渥なるに感泣するあるのみ。加之兩艦の士官及相當官以下には　思召を以て特に御酒肴料を下賜せられ。又　威仁親王殿下よりは。兩艦乘組一同へ　令旨及御酒肴料を賜はり。山本海軍大臣も亦左の別辭及清酒を兩艦長に寄贈せられたり。

拜啓陳者。今般大不列顛國皇帝皇后兩陛下戴冠式へ參列の爲め軍艦淺間及高砂の派遣せらるゝは。國家の爲め欣喜に堪へざる所にして。帝國海軍史上に一大光

彩を添加すべき時機たるを念ひ。本大臣の最も光榮とする所に候。茲に聊か發途を祝する爲め。別紙目錄の通り。乘員一同へ相贈度候間。可然御分配有之度。希くは乘員一同。爲邦家自愛して。其職責を盡し。以て帝國の光輝を發揚せられんと。本大臣の切に望む所に候。右祝意を表し度如斯候敬具。

目錄

軍艦淺間に清酒三樽

軍艦高砂に清酒二樽

遠洋航海の準備は既に整ひぬ。横須賀軍港より横濱に回航せる兩艦は愈一萬二千海里の鵬程を航破して。遙かに赫々たる旭旗を英海峽に翻へさんとす。時は明治三十五年四月七日。朝來濛々たる强雨を衝て海軍大臣先づ本艦淺間に來り。遣英一行の責任眞に重且大なれば。決して榮譽に醉ふて其の本分を忘るゝ勿れと懇諭せられ。續ひて　威仁親王殿下御附武官を始め。總理大臣以下數名の大臣及總務長官幷に英國公使等來艦。司令官室に於て祝杯を擧げ。　天皇陛下及英國皇帝陛下の萬歲を奉祝し。午後一時。一同艦を辭して汽艇に移りぬ。是時。軍樂隊は嘹喨として一急一

綏極めて勇壯なる音樂を奏し錨鎖は漸々に捲揚げられたり左方には十五號三十號及四十五號の三水雷艇宛も長鯨の如く波間に出沒して我れを東京灣口に見送らんとす雨は更に猛威を加へて斜に飛び山大の巨艦二雙相前後して黑煙を吐き怒濤を蹴りつゝ進航するの狀眞に偉觀を極めたり我淺間の乘組は左の如し

常備艦隊司令官　海軍少將　伊集院五郎
參謀　海軍少佐　財部彪
同　海軍大尉　中島資朋
通譯官　山川端夫
海軍主理　宮下道三郎
艦長　海軍大佐　中尾雄
副長　海軍中佐　宮地貞長
航海長　海軍少佐　上村經吉
水雷長兼分隊長　海軍少佐　大澤喜七郎
砲術長　海軍少佐　高木七太郎
分隊長　海軍少佐子爵　小笠原長生
分隊長　海軍大尉　石川長恒
分隊長　海軍大尉　佐野常羽
分隊長　海軍大尉　田尻唯二
乘組　海軍中尉　鈴木乙兎
乘組　海軍中尉　黑澤鴻藏
乘組　海軍少尉　川副正治
乘組　海軍少尉　古川四郎
乘組　海軍少尉　三浦容夫
乘組　海軍少尉子爵　田村丕顯
乘組　海軍少尉　長野修身
乘組　海軍少尉　安東昌喬
乘組　海軍少尉　永谷耕喜
機關長　海軍機關中監　關重忠

分隊長	海軍大機關士	松本能吉
分隊長心得	海軍中機關士	田中龍男
分隊長心得	海軍中機關士	岩崎重明
乘組	海軍少機關士	竹崎友吉
乘組	海軍少機關士	大石親德
乘組	海軍少機關士	森本正
軍醫長	海軍軍醫中監	戸祭文造
乘組	海軍大軍醫	黑田龍太
乘組	海軍中軍醫	齋藤恭三
主計長	海軍主計中監	末森鹿之助
乘組	海軍大主計	福島清
乘組	海軍中主計	太田耕一郎
准士官		十五名
下士		百二十九名

卒		四百九十四名
備員		十三名
增加員下士		三名
增加員卒		四名
增加員備員		四名
便乘者	海軍大佐	中溝德太郎
便乘者	陸軍砲兵大尉	東乙彦
便乘者	東京朝日新聞社員	村井啓太郎
		鑛請業 高須精一
合計		七百〇二名

高砂の乘組は左の如し

艦長	海軍大佐	吉松茂太郎
副長	海軍中佐	上泉德彌
航海長	海軍少佐	廣瀨弘毅

水雷長	海軍少佐	森　越太郎
砲術長	海軍大尉	中川繁丑
分隊長	海軍大尉	渡邊眞吾
分隊長	海軍大尉	高崎元彦
分隊長	海軍大尉	飯田延太郎
分隊長心得	海軍中尉	山本英輔
乘組	海軍中尉	吉武貞輔
乘組	海軍中尉	豐島二郎
乘組	海軍中尉	猪野利猛
乘組	海軍中尉	加賀山幾
乘組	海軍少尉	副島敬四郎
乘組	海軍少尉	坂元貞二
乘組	海軍少尉	波多野貞夫
機關長	海軍機關中監	岡本鷹雄

分隊長	海軍大機關士	村尾履吉
分隊長	海軍大機關士	清水得一
分隊長	海軍大機關士	關　重光
乘組	海軍中機關士	荒尾文雄
軍醫長	海軍軍醫少監	淺井勝之助
乘組	海軍大軍醫	百瀨一二
主計長	海軍大主計	加木甚三郎
乘組	海軍中主計	收　三良
准士官		九名
下士		九十五名
卒		三百〇五名
便乘者	陸軍步兵少佐	西川虎次郎
便乘者	陸軍砲兵大尉	土方久路
便乘者	陸軍砲兵大尉	松原積之助

便乘組　代議士　西原清東
便乘者　中央新聞社員　玉木懋夫
合計　四百三十九名

海上の生活なる一語のうちには、既に幾多の趣味を含有せり。就中遠洋航海の如きを然りとなす。試みに我水兵等に就て觀察せよ。彼等は非常の繁務を負ふのみならず、或は險惡なる天候と戰ひ、或は劇變する氣候と闘ふ。艦の戰闘力を完全ならしめんが爲めには、絶にず大砲、小銃、水雷等の操練を爲さゞるべからず。艦を安全に保たんが爲めには、火災、衝突等の防禦に熟練せざるべからず。艦内を整備せんが爲めには、綱を綯ひ、塗料を扱ひ、金屬具を磨き、甲板を洗ひ、更に一身の清潔を保たんが爲めには、毎に衣服を洗濯し、破綻を彌縫し、終日孜々として一人の手を空うするものあることなし。然れとも卒直無邪氣なる彼等の胸裏には、一點の汚念なく、自から安心立命を得て、精神常に愉々快々たり。薄暮日課を終りて後、日曜、木曜等の休日には、適宜の遊戯を許されあるを以て、一團一群處々に集合し、談笑するもの安眠するもの、小說を繙くもの、横笛を吹くもの、幻燈を弄するもの、講談を聽くもの、碁を圍むもの、將棋を圍はすもの、滿艦悉く和氣靄然として、復た人世名利に齷齪たるの徒あるを知らざる如し。泰西の詩人が、之を借りて以て良心の呵責に苦む無道の君主を嘆せしめしも亦宜ならずや。

艦は東京灣を出でゝより針路を右轉し、先づ日向國有明灣に向ふ。是れ同處に於て伊東海軍大將の特命檢閲を受けつゝある諸艦に會合告別せんことを欲したればなり。予は午前二時始めて當直と爲り、前艦橋に立ち、羅針盤を前に控へて四方を展望するに、天地闇澹として黑雲低く、暴風檣上に吼へて艦上の諸物盡く反響あり、激浪沸くが如く艦首を呑まんとし、砲塔に遮ぎられ碎けて濛霧と爲り、飛散數丈、一種青白の光を放ちて悽慘言ふべからず。海は名に負ふ遠州灘の險處なり、艦體さながら揉まるゝ如く前後左右に動搖し、便乘者の如きは、終夜室内に蟄伏呻吟するのみ。眉間八字の皺を刻みて殆ど生色なし。

九日午後二時の頃、艦は有明灣附近に到着せしも、遂に艦隊に會すること能はず、乃ち遙に望樓と信號を交換して、斷然南下するに決せり。而して臺灣海峽を通過するの豫定なりしも、吹き荒む西北の風は、愈〻波濤を飜弄して艦の傾斜十七度に及び、高

砂の如きは實に三十度に達したるを以て安全を計るが爲め更に針路を變ト沖繩群島を風上に置きて以て其力を減殺せんと試み十日に至り先づ鬼界ケ島を左に奄美大島を右に望み翌十一日には沖繩を右にして航進し宮古八重山の群島より臺灣の東南を經て十三日漸く其の最南端と知られたる南岬附近に到着したり時に天候暫く霽れて南岬燈臺陸岸に屹立し其背後には連峯峨々として聳へ陰雲漂々山腰に流れて乍ち濃く乍ち淡く正に一幅の墨畫に髣髴たり予は此風景に對して感慨禁ずる能はざるものあり想ふ昔時豐太閤の天下を平定するや彼れが勃々たる雄心は單に是れのみを以て滿足する能はず進みて朝鮮八道を蹂躙し更に亞細亞大陸を統一せんとすると同時に一面には南洋諸島をも我掌裡に握らんと欲し臺灣島守に書を送りて若し來朝せずんば諸將をして攻伏せしむべし萬物を生長するものは日なり萬物を枯渇するものも亦日なり之を思へと威嚇せしにあらずや惜哉桃山殿中星墜ちて覇魂空しく阿彌陀ヶ峯に眠り桐紋の軍旗復た翻へるに由なかりしと雖も爾來冒險進取の士は屢此島に渡航し呂宋侵略の際の如き鷄籠港は實に其の根據地たりしなり況んや一旦此島を平定せる彼の明末の忠臣鄭

成功は大和民族の血統を有せるものなるに於てをや然れども天運未だ此島を以て帝國版圖の内に置くを許さず殊に維新以後に於ては日清葛藤の一因なりしに皇上の稜威二十七八年戰役に清軍を粉碎し其の結果として今や遂に我有に歸す豐公以下苟も此島に志ありし諸子幸に意を地下に安んじて可なり

艦は信號を交換せんが爲め南岬燈臺に接近し彩旗を揭げて頻りに答信を促がせしが彼れの未だ應せざるに先だち時機既に去りたるを以て已むを得ず之を斷念し更に針路を南方に轉じて十四日の曉天早くも呂宋島の山影を左舷に望み續て同島のボジェードル岬を東微南に十五海里隔てゝ通過せり此島や亦帝國と關係を有するもの三千餘人に及び漸次勢力を增加し來りたるを以て遂に原田孫七郎なる快男子出で三寸の舌鋒を振て豐太閤に說き彼れをして傲慢なる一書を西班牙より備派せる呂宋太守の許に送らしめぬ其畧に曰く予の生まるゝや天下を治む可きの奇瑞あり壯に至り十年を經ざるに日本を統一し今や明國を征せんとす是れ天の授くる所なり而して貴國未だ聘禮を通せず速に匍匐膝行せずんば必ず征伐

を加へん。悔ゆることなかれと。蓋し孫七郎の計畫たる。此書を以て先づ太守を憤怒せしめ。其の敵愾心を挑發するに及び。更に豐公に勸めて。遠征の師を起さしめんとせるにありしなり。然るに呂宋太守は。此無禮なる書辭に對して毫も慍色を示さず。却て辭を卑ふし。數多の珍寶を齎して答使を我邦に派遣したるを以て。孫七郎の雄圖空しく畫餅に歸し。尋で豐公も亦七年兵を朝鮮に勞し。意を南洋に注ぐの餘裕なくして終りしが。恰も是と前後して。泉州の商人魚屋助左衛門なるものあり。性剛强にして冒險を好み。自から百餘人の部下を率ゐ。葉舟に棹して遙に此島に至り。西班牙の守兵と戰ひ。幾多の財寶を捕獲して歸朝したり。又肥前島原の藩士板倉重政は。呂宋征服を圖りて事未だ成らざるに死し。德川家康は是と貿易を開始して我商船二十三雙を往復せしめぬ。所謂御朱印船なるもの是れなり。豐復た盛ならずや。閑說く。頃日同島土着の志士は。其の主權の西班牙より米國に移りたるを機とし。劍戟を把りて。獨立の爲め米兵に抗し。苦戰幾回。今猶ほ幾かに命脈を保ち居れりと。刻下の狀況果して如何。我艦隊此に寄航せざるを以て。其の消息を審かにすることを得ざりしは。頗る遺憾とする所なり。

呂宋島附近より暑氣は時々刻々に增加し來り。十四日の正午には。上甲板に於ても猶ほ八十六度を示し。下甲板の如き。實に熱瓶中に在るの想ひあり。一同は遽に夏服を着し。電氣扇は間斷なく旋轉すれども。流汗淋漓として衣服を透し。隨て更ゆれは隨て潤ひ。人をして殆ど其煩に堪へざらしむ。士官室內從卒を呼んで氷を求むるの聲絕へず。造氷決して小量にあらざるも。猶ほ需用を充たすに足らざるを以て。食卓長は遂に制限を設け。堅く暴飲を禁ずるに至れり。此に於てか青年將校の面上。頗る不平の色あるを見る。

艦は益〻南を指して進みぬ。兵員は日課を逐ふて活潑に働作せり。此間驟雨屢〻襲來し。時々「總員水浴を許す」の令あり。孰れも衣服を脫し嬉々として降雨に沐浴す。復た熱帶圈に於ける一快事と謂ふへし。斯くて事無く太陽の直下を通過し。十七日の午前十一時十五分。北緯十度四十三分。東經百十度四十八分の海上に至りし時。會〻南西微南の冲天に當り。一小物體の輝々として白光を放つものあり。其何たるを辨ずる能はず。因て急に千里鏡を以て之を窺ひしに。怪む可し日光の赫々たるに拘らず。是れなむ一個の游星にして。半月形を成し。光色純白。些の黑點を認めず。暫時にして其形

體を失へり。吉か凶か。抑も何の兆そ。

十九日午前。新嘉坡に遠からぬアナムバ列島の邊に達す。大小の島嶼六十海里の間に散在し。樹木蓊鬱として頗る海客の目を娛ましむ。艦は同處附近に於て羅針の自差修正を行ひ。時を計りて再ひ進行し。二十日黎明より。馬來半島の山影を曉霧模糊の裡に望みしが。午前九時七分。無事英領新嘉坡に投錨せり。即ち横濱を發してより三千八十八海里を航し。時を費すこと十二日と二十二時間。

其二　新嘉坡碇泊並に古倫母に到る

英國の植民政策に巧妙なる。眞に驚嘆するに堪へたり。夫れ馬來半島は。曾て大膽なる我國民が片々たる朱印船に乘して。臺灣呂朱と等しく往來せる處にして。麻剌加。(當時摩陸と稱せり)彼南(當時毘那宇と稱せり)等は其の最も得意とせる貿易場なりき。殊に慓悍死を畏れざるの徒に依て組織せられ。威名東洋を震駭せしめたる八幡賊の餘勢は。延て該半島の侵畧と爲り。白及閃めく所敵兵なきが如く。遂に太泥國王をして。德川幕府に對し其災を免がれんことを哀訴せしむるに至れり。然るに海上權力を保持すへき水軍なかりし當時の我外交は。一旦發展したる是等の雄圖を。漸々衰滅に歸せしめ。遂には世界文明の潮流に逆行して。卑屈なる鎖國政策を執るに至りしが。之に反して。英國は達識なる執權者續出し。歐洲の各强國が互ひに大陸に於て蝸牛角上の爭鬪に熱中し。一勝一敗。彼我共に疲るゝの機に乘じて。一意專心。海軍を整備し。航海を奬勵して。以て植民地の占有を計り。一たひ其目的を達するや。徒らに無益の干涉を試みて。土人の感情を害する等のことなく。又遽に其の所得を本國にのみ吸收せんとせず。或範圍内に於ては大度宏量を示して。頗る放任主義を

取り。然かも確乎不動の方針を持し。利を永遠に期するを以て。其政策は着々功を奏し。其植民地中大なるものゝみにても五十餘箇所の多きに及び。太陽版圖の内に沒せずと誇稱するに至れり。殊に東方面の經營に關しては。ジブラルター。モルタ。錫蘭及印度より馬來半島を麾中に收め。彼南。ウエレスレー州。麻剌加。新嘉坡。ヂンヂン諸島。ゴコス列島及クリスマス島等も亦既に其占有する所たり。就中新嘉坡は。全島の長さ約二十七海里。幅員十四海里。面積二百六平方里にして。一葦帶水を隔てゝ馬來半島の南端と相對し。地理上の位置頗る利便にして。且つ錨地も安全なるを以て。商業日に月に隆盛に赴き。今や海峽植民中屈指の要地たり。而して其市街は。新嘉坡河の南北に跨り。背後には百五十六呎の高地ありて。砲臺其頂上に聳へ。ブラカン、マチ島の砲臺と相待て。全市を防禦せり。海上より眸を放つて市街を觀よ。先づ其雙眸に映ずるは。必ず雲を劈く一大尖塔ならむ。是れ「セント、アンドリユー」と稱する寺院にして。英國の「ネトレー」寺を模範とし。全印度中最も輪奐の美を極めたるものなりと云ふ。右方には大厦高樓櫛比し。其の後方に土人の一大部落あり。氣候は四季温度の差尠なく。概ね七十三度乃至九十度の間を昇降せり。熱帶圏の常として。驟雨屢〻襲來す

るを以て。割合に凌ぎ易く。草木は到る處に繁茂し。港の北岸の如き椰子樹鬱蒼として。數里の間一異木を交へず。風土頗る人體に適し。殊に小兒の如き。發育頗る良好なるが故に。歐人は此地を「パラダイス、オブ、チルドレン」(小兒の樂園といふ意)と稱せり。隨て他國よりの移住民も年々夥しく。其數を增加し。本邦人の如きも。既に七百餘名に及び。支那人に至ては。該半島中英領の部分のみにて。約二十萬を算するに至れり。

埠頭の主要なるものは。「タンヂヨンパガー」及「ケツペル、ハーボア」にして。前者は三區に分かれ。第一を「カーゴー、ワーフ」と稱し。長さ一海里。水深二十五呎に下らず、一時に三十隻の大船を横へ得べし。第二を「シヤス、ワーフ」と呼ひ。長さ三百四十呎。水深二十六呎なり。第三を「イースト、ワーフ」と稱へ。長さ千四百呎。水深二十六呎乃至十八呎なり。後者は長さ三千呎。水深十六呎より二十六呎に至り。許多の橋梁を以て陸岸と連絡を維持す。而して兩埠頭の東端には。船三隻を沈置して防波壁と爲せり。海岸には倉庫を建て列ね。貨物十五萬噸を收容し得べしといふ。尙他に「ボルネオ」埠頭。「ピー、オー」會社埠頭。東洋擴張電線會社埠頭等あり。又五箇の船渠備はり。能く二時間を以て

排水することを得と。貯炭所には常に二十五萬噸の石炭を貯藏しあり。艦船に搭載するには。埠頭に於てするを便なりとすれども。運搬船を用ゐても。猶は一日に二百噸を搭載し得べし。以上を新嘉坡市の概見と爲す。

我艦投錨を終るや。直ちに英國に對して二十一發の禮砲を放てり。間もなく港内在泊の英艦「フェアレス」より訪問使先づ至り。踵て同艦々長及陸上の守備隊參謀來訪し。我司令官との會談頗る親密を極む。既にして陸上砲臺より二十一發の答砲あり。此の外諸所との禮砲交換極めて頻繁なりき。午後。我領事久水三郎氏來艦す。氏は予の舊識なるを以て。司令官室に於て司令官と三人鼎坐して懇談時を久うす。聞く。氏は近日北方より亞非利加内地の縱斷を試みんとすと。壯舉眞に羨む可し。好漢幸に自愛して。幾多の快話を齎せよ。

領事の退艦するや。我司令官は直ちに上陸し。馬車を驅て新嘉坡總督を其邸に訪ふ。司令官上陸の際。英國守備隊一小隊は。埠頭に整列して之を迎へ。大に敬意を表する所ありき。英國が盟邦に對する用意の至深なるを見るべし。

翌二十一日。艦は石炭搭載の爲め。水先案内者に導かれて「ボルチオ」埠頭に繫泊す。支那人。印度人。馬來人等相混じて石炭を艦内に運送し。一回毎に一錢内外の賃銀を受くるを例とす。然れども少しく得れば忽ち去て鴉片を喫し。或は賭博に耽り。囊中缺乏を告ぐるに至り。始めて復た勞働に從事す。不羈自由と言はゞいへ。其不規則なること言語に堪へたり。予は此日非直なりしを以て。先づ故國の妻に宛安着を報ずる一書を認め終り。航海長。水雷長及三番分隊長等と共に市中を巡視せんと欲し。艦を出でゝ一輛の馬車を僦ふ。黑奴馬を馭して駛ること頗る迅速なり。予等は先づ領事館を訪問し。轉じて博物館に至らんとするの途。同僚の一人。藤製の寢椅子を購ひしに。過大にして車内に容るゝ能はず。黑奴予等の窮狀を見。早速之を車蓋の上に緊縛し。得意滿面。馬を馭すること愈急なり。何ぞ知らん。行人皆相顧みて予等を指笑せんとは。之れを横濱出發以來第一回の失策と爲す。然れども騎虎の勢。今更如何ともする能はず。其儘にして博物館より植物園に至れり。予が兩所に於ける所見に據れば。熱帶地方の動植物固より其數に乏しからざるも。特に記すべき程のことなく。反て予等の注意を促せるものは。途上の光景にぞある。支那人は四頭の駿馬に美麗なる馬車を牽かせ。意氣揚々たるものあるかと見れば。人力車夫を彼等の專業と爲し。辮髮

を卷き。裸體のまゝ之に從事するものあり。然れども彼等が當市經濟の原動力たるは殆ど疑ひなき所にして。市内に於ける大厦高樓の大部分は。概ね其の所有なりと云ふ。又眼光烱々顏色漆の如き印度人は。赤布を以て頭を包み。荷車の上に立ち。奇聲を發しつゝ水牛を馭し。馬來人は帽子を阿彌陀に戴きて紳士の從僕たるもの多く。多忙氣に急歩せる日本人。杖を揮て濶歩する英國人等。各樣各色の人種を混ドて。眞に一奇觀を呈せり。

薄暮。一旦歸艦の後。更に我領事の招待に應せんが爲め。他の將校と共に。司令官及艦長に陪して領事の私邸に至る。結構壯大と云ふにわらざれども。瀟洒雅潔にして。能く潔癖なる日本人の特性を表はせり。領事夫妻。書記生等司令官以下を迎へ。夕風涼しき廊下に於て晩餐の饗應あり。本艦よりは其興を添へんが爲め。軍樂隊及講談に巧なる從僕松林福圓を遣したるを以て。樂隊は樹木繁茂せる芝生の上に在りて和洋種々の樂譜を奏し。福圓も亦爽快なる講談を演じ。主客相共に佳境に入れり。予は宴の終るを待ちて。獨り館を出で。後園を徘徊せしが。時は四月の末つ方なるに。主人が本邦より齎せしと覺しき黃菊。白菊。さては紫深き野菊など。今を盛りと咲き亂れ。色も香もある大和の花。來て見よがしと誘るが如き風情いと殊勝しく。風流の何物たるを解せざる身も。何となく懷かしき心地し。黃菊一枝を手折りて胸間に挿みぬ。

空を仰げば。白雲峯の如く天の一方に凝結して。十四日の月は椰子樹梢に懸り。徐に清光を投げて四邊の風景盡く銀色を帶び。名も知れぬ草の葉末に蟲聲咽んで。白露冷なり。皇天何爲れぞ漫に巧を弄し。遠來の旅客をして故鄕の秋を忍ばしめんとはする。

平素自から持すること高く輕々しく他を訪問せずと聞へたるスウッテナム氏は。二十二日の午前。參謀一名を隨へて來艦し。司令官以下各將校之を舷門に迎ふ。彼れは長身白面舉止沈着にして。十分紳士たるの態度を備へ。慇懃に揖禮し。我司令官と最も温かなる握手を爲して退出せり。同夜氏は其官邸に司令官以下の將校。各國領事及守備隊將校等を招待して盛筵を開き。我軍樂隊の奏樂は大に喝采を博したりき。

二十三日早朝より出港準備に忙しく。午前十時五分。我兩艦は共に錨を拔て遙に錫蘭島古倫母を指し。先づ麻剌加海峽に入る。右は馬來半島の陸岸北西に走り。左はス

マトラの島影低く沈みて水色と合し。飛魚躍て艦首を掠むると頻りなり。艦は益〻進みて。廿五日の午後零時廿分。海峽を通過し終り。愈〻印度洋に入る。是より先き。我艦の新嘉坡に在るや。新艦三笠の英國より回航の途偶〻古倫母に在るを聞き。豫め電照して二十六日の朝。クレートココバ島の南二十海里即ち北緯六度二十八分。東經九十三度五十一分の海上に出會せんことを約したるを以て。二十五日午前五時。我兩艦は列を解き。左右に約二十海里を隔てゝ三笠を搜索しつゝ進航すること殆と一時間半。忽ち見る前方の水平線上に一縷の煤煙搖曳し。徐々前進し來るを。幾もなく檣頭見へ。艦體現はれ。今は疑ひもなく帝國一等戰艦三笠なるを知れり。時に天霽れ風死して海面鏡の如く。艦首水を嚙んで長へに白尾を曳き。威容堂々として我れに向て進航し來りぬ。衆皆踴躍して之を遲ちしに。忽ち彼れの砲門一圈の白煙を吐て。轟然たる砲聲。海面の寂寞を破り。先づ我司令官に對して十三發の禮砲を發せり。我艦之に向て答砲を放つこと七發。宛然一場の海戰を現出せるが如し。既にして彼我共に進航を停止し。司令官以下數名の將校は直ちに端艇に乘ゞて彼れを訪問し。贈るに芳醇なる日本酒を以てす。三笠亦我れに端艇を遣はし。透明「ルビー」の如き葡萄酒を贈り。以て返禮と爲す。兩艦の乘員は。互に來往して無事を祝し。快談時の移つるを知らず。已にして進航の期漸く切迫したるを以て。各自其本艦に歸去し。兩艦は將に十時を以て東西に相別れんとす。是際高砂も亦來會せしが。時機已に遲く。遂に三笠を訪問するに及ばざりき。是に於て。三艦の乘員悉く舷側に立ち。互に相見て帽を捧け。手巾を振て。奉賀を三呼す。折しも數連の彩旗。檣上高く海風に飜りて「汝の安全なる航海を祈る」との信號鮮かに讀まれたり。予は走て私室に入り筆を執て其狀を寫し。頃刻にして再び甲板に出つれは彼我既に遠く離隔して。一萬五千噸の巨艦豆よりも小なり。

鳴呼勇ましの有樣や　所は名に負ふ印度洋
波を蹴立て進めるは　大命帶びてはる〴〵と
英吉利國に向ふなる　淺間。高砂二艦とは
人も知るらめ日の本の　擧れかゞやく軍艦旗
揚ぐれは揚ぐる彼方より　同じ御旗は現はれて

歸る三笠に端なくも　めぐりあひより尙靑き
水に木の葉の二つ三つ　互ひに小舟出しつゝ
共に目出たき航海を　祝ふもまこと大君の
御稜威仰げはいと高し　御稜威仰げはいと高し

交際の一方便として舞踏の練習は將校の一部に依て時々試みられぬ而して副長の夜巡見後に於ける後甲板は實に其の舞踏場なりき樂隊五六名は小樂器のみを携へて「朝の木の葉」や「たろがれ時」節も優美に吹初むる音に連れて踏るは誰そ朋々として胡蝶の春風に戯れ飄々として雲雀の大空に舞ふが如きを其の本領と爲すならんも憾むらくは踏手の練磨日尙は淺きが故に二三子を除けば他は未だ遠く妙境に達せず寧ろ柔道の稽古に近くして動もすれは捨身に行かんず風情危し熟〻見渡せば身體肥滿して布袋然たるあり仙骨稜々竹林の七賢然たるあり體軀長きに失して腰〈く〉形を爲せるあり肩張りて慷慨家の姿勢を備へたるあり自身些の心得もなくして揑に指南の位地に立たんとするあり己れ一回も試みしことあらずして妄りに冷評を下すあり黑面白額の武骨漢兩々相擁して旋轉復た旋轉「ワッ」の舞踏佳境に入り樂曲速に急なるに及べは忽ち跌て滑倒し笑聲屢〻四面に起れり借問す何人か最も能く其術を究め以て他日朔を倫敦の交際場裡に爭ふ者ぞ余は今より刮目して之を見んとす

平穩なる天候は吾人をして連日無事の航海を繼續せしめ我兩艦は一秒々々西走せり然れども帝國海軍を代表すへき大責任を負へる艦員は決して閑散なる能はざるなり日曜日に於ける分隊點檢月曜日に於ける合戰準備戰鬪操練端舟軍裝敵艦捕獲火曜日に於ける武器點檢溺者救助操練水曜日に於ける水雷艇防禦操練陸戰隊操練木曜日に於ける諸倉庫點檢總員乘艇操練金曜日に於ける防水操練土曜日に於ける火災操練等は概ね制規通りに施行せられ加之時としては夜間に行はるゝとあり斯の如く晝夜活潑なる働作を以て飽迄も健腕を鍛へつゝありしが二十九日の午後一時始めて錫蘭島のタカラガム嶺を艦首の右方に認め同七時には

ドンドラヘット燈光を同十時二十分にはポイント、デユガレー燈光を翌三十日午前三時四十分にはバーベーン燈光を望見し今や古倫母港は目睫の間に迫り來り

ぬ。ラビニヤ山旅館の白壁。ラールセントオルフェンダン寺院の尖塔。さては紅褐色を帶びたる市街の間に樹立せる信號杆等。漸々眼前に現はれ來れり。艦は港口附近に至り。暫時停止して水先案内者を乘せ。其嚮導に從て防波堤の中間を過ぎ。遂に古倫母港内に入りて舳艫繫泊を爲す。屈指すれば新嘉坡出發以來。時を費すこと六晝夜と二十三時間。航程千六百七十九海里なりき。

其三　古倫母よりポートセッドに到る

「日本人爲商此方へ不參候樣に被仰付可被下候」はずや。當年も日本舟參候間迷惑仕候」とは。慶長年間。葡領印度臥亞の總督ヒメンテーカが我行商の活動に辟易し。書を徳川家康に贈りて渡船禁止を歎願せるものゝ一節にして。吾人は之を一讀する毎に。未だ曾て案を拍て快哉を叫ばずんばあらざるなり。試みに當年の葡人を觀よ。彼れは切りに航海を奬勵し。始めて喜望峰を周りて東洋に抵るの航路を發見し。遂に印度人を威嚇して廣大なる殖民地を占め。前進して馬來半島を自國主權の下に置き更に前進して支那海に出で。東洋方面の海上權力概ね其の掌裡に歸し。其勢恰も旭日昇天の如くなりしに。獨り我邦民のみに向ては。彼れの威力も施すに由なく。臥亞の戍兵を以てして。猶且つ微々たる我行商輩を制壓し能はざりしなり。是れ大和民族の勇悍無比なるを事實の上に證明せるものにして。神洲男兒の意氣寛の如く。四千餘海里の鯨濤何かあらん。外奴の妨害何かあらん。我れは將に我が行かんと欲する處に行き。我が爲さんと欲する所を爲さんのみ。意に滿つれは則ち可。苟も滿足する能はざるときは。腰間血に渴せる三尺の秋水あるあり。一たび鞘を拂て紫電閃

けば鐵石尚は截つへし況や葡兵の骨肉をや此の意氣此の膽力能く外國人をして當時帝國覬覦の念を絶たしめたるものにして彼等行商の功亦た大なりと謂ふべし加之千餘年の昔平城天皇の皇子　高岳親王は畏くも金枝玉葉の御身を以て遠く印度内地を跋渉し賜ひ尋て亦天文以降には大和の了西高砂の德兵衛等屢此地に來往して視察を試みたりき而して今や果して如何現代の我同胞古人に對して遜色なきを得るか由來熱帶の饒地餘利多し冒險の士奮起して往け往て爾が祖先の事蹟を見よ予は公等の爲めに茲に聊か古倫母の一班を紹介すべし

印度に於ける實權は葡人より蘭人に推移り更に英人に轉じて今や其の全部英國々旗の下に風靡するに至れり就中錫蘭島の南西岸に在る古倫母港は歐亞兩洲の中間に位するを以て極めて樞要の地として目せらる然れども此の港や由來荒漠として南西面に印度洋を受け怒濤激浪港内に侵入して決して良錨地と稱すべからざりしに英人が經營慘憺の結果遂に重量十五噸乃至三十噸の巨石を層積して長さ千二百十二呎水面を拔くこと十二呎の一大防波堤を南西海面に築造し今や更に北及北東方面にも三千五百二十呎の防波堤建設に着手し四年後に落成する

の豫定なりと而して港内には浚渫船を備へ絶へず海底を浚渫しつゝあるを以て處に依り三十呎以上の水深を保つといふ港内の設備斯の如くなるを以て如何なる巨船大舶と雖も自由に碇泊するを得べく別に三十二個の繫船浮標を設けて船舶の繫留に便にし又新たに船渠及船臺の施設に着手し前者は本年内後者は五年後に竣功すべし林立せる帆檣上に翻飜たる各國の國旗は如何に通商の旺盛なるかを示し陸岸には九個の棧橋長蛇の如く突出して旅客の上陸を待てり市街は南北に延長して二湖水其間に在り瀛車電車は四方に通じて全島の交通極めて容易なり當市は政廳の所在地なるを以て商業逐年隆盛に赴き現在の人口拾五萬九千に及ぶ市内到る處に瓦斯燈電氣燈水道の設備ありまた圖書館博物館等の設けありて文明の機關一も缺くる所なし殊に十個國語の新聞紙あり其内英字新聞のみにても五種の多數に及べり

西岸には三個所の砲臺巍然として屹立し四千四百の常備兵と相俟て市の保護に任じ陸軍中將之を統帥す石炭會社は都合七個ありて常に十萬噸の石炭を貯藏せり（英炭一噸三十志印度炭一噸二十志）産物には金銀寶石米穀珈琲茶煙草の類あり

然れども天産物に豊富なるの結果却て工業の微々として振はざるを覺ゆ。

我艦隊の投錨するや例に依り英國に對して二十一發の禮砲を發し、砲臺よりも亦同數の答砲あり。間もなく守備隊長陸軍中佐スタンレー、ハムブレー來訪し、又帝國軍艦白雲は英國よりの歸途偶此地に在泊し居たるを以て同艦長も時を移さず司令官を訪問せり。(白雲は翌日新嘉波に向て出發す)是日午後より石炭千二百噸の搭載に着手せしが黒奴の人夫働作緩慢にして事業毫も進渉せず五月二日午前七時に及ひ辛くも結了するを得たり。

カンヂーに行きしかとは古倫母市民の毎に旅客に向て提起する質問なり。蓋しカンヂーは本島の古都にして佛祖の遺跡存在するが故ならむ。予は豫て同地を一見せんと希望せしも途上の汽車頗る不完全にして往々停止することありと聞きしかば躊躇して未だ決する能はざりしに中溝大佐戸祭軍醫長等勸誘切りなるを以て終に同行を諾し一人の黒奴を傭ひて東道の主人と爲し五月一日午前七時數多の同僚と共に先つ電車に乘ってヤラターヤ停車場に向ふ暫時にしてペレー湖邊に出づれば男女數十名の黒奴いと樂し氣に湖中に水浴しつゝあるを見る既にして停車場に到れば高砂艦長以下數名の將校先着しあり乃ち相合して一行十四名汽車の一室を占領し談笑屢窓外に徹す七時半汽車は一聲の鐵笛と共に徐々進行を始む予等悉く車窓を開き眸を放て遠近を望めば風景一として奇ならざるはなく八九哩間は概ね沼池にして佛綠深き紅白の蓮花點々水を染めて涼風脈々清香を送り印度洋の酷熱を一掃し去りて心氣頓に爽然たり車輪は益同轉の度を加へ帶の如き小徑を走ること數哩既にして一轉林中に入れば椰子樹檳榔樹麵包樹ヤック樹等參差として枝を交へ日光爲めに遮ぎられて頗る冷氣を覺ゆ樹間象を曳きて小流に飲ふ童子あれば頭上に種々の果實を載せて奇聲を放つ賤の女あり幼時曾て讀みたる地理書の圖畫を實見するの心地して興味一入深かりしが茂林盡きて羊腸たる小丘に連り見渡す限り蔦桂叢然として猛獸毒蛇其の裡に栖息し往々軌道の附近に出沒して人間を害すといふ抑カンヂー停車場は海面を拔くこと一千七百呎の高處に在り古倫母を距る七十四哩にして三十哩前後より軌道の勾配急に五十哩に至て益其度を增加し汽車は喘ぐが如く沸々黒煙を漲らし螺旋して山頂に上る途上の風景幾たびか變化の妙を極め右は斷崖千仞谷深くして底

ありとも覺へず。中腹の林間より樵夫が燒くか立登る二筋三筋の煙末は遠山の雲霧と合して幽かに聞ゆる鳥聲いとゞ哀れを添ゆ。左は削れるが如き巨巖空に聳へ羅刹の牙を竝べ懸けたる如く樹木痩せて疎らなり。宜なる哉鐵道工事困難にして。當時工夫の斃れしもの其數を知らず。永く鬼哭峠の名を遺して。後人の肌を寒からしむることや。若し汽車にして一歩を誤らば予等も亦其跡を履まんのみ。而かも機關師の不熟練なる屢汽車の進行を停止し。或は汽力の上騰するを待ち。或は後退して軌道を變し。屢吾人をして慄然たらしめしも。倖に事なくして七個所の停車場を通過し。午前十一時半カンヂーに到着せり(翌日行遊せる佐野大尉の一行は。中途に故障ありて空しく十時間を汽車中に費せりとそ)

予等カンヂーに到着するや先つ黒奴の人車を傭ひ「ヴィンス、ホテル」に向ふ道路砥の如く而かも清潔にして鬱蒼たる大樹街衢を挾み。土人樹蔭に晝眠を貪るもの夥し「ホテル」は巍然としてカンヂー湖畔に聳へ室閑にして頗る納涼に適し。午餐の卓上菜肉共に鮮かなり。既にして一行「ホテル」の馬車數台に分乘し。對岸の丘を旋りて遙かに風景を瞰下すれば。茫漠四方を圍みて綠樹市内に連り。其の盡くる所湖水鏡面よりも滑かにして。燃ゆるが如き「ハイビスケス」の花今を盛りと咲亂れ。白堊の古刹と相映して若色の配合美妙を極め。未見者の夢想し能はざる奇觀たり。左方に當り赤蛇の蜿々たる如きは土人の市街にあらずや豆大の黒點此處彼處に蠢動するは象若くは水牛の悠遊するにあらずや更に身邊を顧れば。蕉實や。椰子實や「ジャック、フルート」や。飽迄も熟して甘汁滴るかと疑はれ。咽喉自から音を發して。食慾頓に動く。黒奴之を察し。馬車を停めて一房の蕉實を購ひ。更に進行すること數丁にして。卒然予を顧みて曰く。紳士彼處の小嶼を見よ。最後のカンヂー王が墳墓の在る處にして。古跡の一に數へらるゝものなりとさては錫蘭滅亡の悲劇を留め。後人をして盛衰興亡の常なきを嘆せしむるは彼の墳墓の主なりしよ。歴史を繰返せば二千四百四十五年の昔なり。(釋尊入寂の年に當る)シンハル王始めて錫蘭島に君臨してより。系統連綿として國富み民榮へ。佛法王法兩ながら行はれて。花咲き鳥唄ひ。極樂淨土を目のあたり現出せる如く。人生更に悲哀なるものあるを知らざりしに。西暦千五百五年の事かとよ。端なくも碧眼朱髯の葡人。海の一方より現はれ來て。一たび其の植民地を本島に占領したる以來國内漸く平和を失ひ。百餘年を經たる頃より。彼

等は益跳梁跋扈を恣にし。維摩羅達磨の義兵一たび破れてよりは。葡人の暴狀其極に達せしが。幾もなく彼等は權力を闌人に奪去せられ。再轉して英闌兩國人の嫉視となり。終に英人の勝利に歸して。千八百十五年に及び。亦復た王と英國總督との間に衝突を惹起して。劇烈なる戰端を開始するに至れり。義を重んド恥を知るの黒人は。憤然起て王軍に投ド。干戈を把て英兵に抵抗せしも。大勢の趨く所。復た如何ともする能はず。連戰連敗。勇士多くは戰場の露と消え失せぬ。是に於て勢に乘せる英兵は。進軍の喇叭に連れてカンヂーに侵入し。先づ王宮を包圍し。垂簾を洩るゝ妃嬪の叫喚を砲聲に打消して。猶豫もなく國王を生檎し。三たび揚げたる凱歌と共に。幾千年來の社稷。刹那に亡びて王は獄中に憤死を遂げ。全島悉く英國の所領と爲り了んぬ。嗚呼忠臣盡く陣亡し。妻子殺戮せられて身は外人の囚虜と爲る。盛者必衰は佛祖の敎ゆる所なりと雖も。血あり涙ある者。誰れか生を惜ふべき。想ふて茲に到れば。可憐の王が慘憺たる末路。豈に一掬同情の涙なきを得んや。憐むべし。幾千年來彼れの恩に浴し彼れの粟を食みたる黒人は。既に氣慨を失ふて。今や王を憶ふことの冷かなる。猶ほ路傍の人に對する如く。墓前の香華久しく絶へて。跡吊ふものもなし。水は長へに恨みを浮べて旅客の腸を斷ち。風は空しく悲みを訴へて。坐ろに多情の遊士を泣かしむ。予は今や王の墓畔を過ぎて轉た今昔の感に堪へず。首を垂れて瞑目之を久ふするうち。馬車は何時しか前進して。既に丘を下り。左旋して一古刹の前に在り。黒奴予等を顧みて曰く。是れ有名なる佛寺なり。疾く往て佛牙を拜せよと。抑此地は古王宮の一部にして。歷代の國王佛法歸依の志篤く。庭内に一寺を建立して佛牙を納め。朝夕禮拜せし所なりと云ふ。歩して石門に至れば。青苔斑に生して彫刻半は磨滅し。梵音遙に鉦の音に和して。身の現世に在るを知らず。右方に一寶塔あり。進て内に入れば。裸體に法衣を纏ひ。仙骨稜々として眼光鋭く。描ける羅漢に似たる僧侶數名出てゝ予等を迎へ。六角形の階上に誘導せり。是れ曾て國王休憩の場處にして。今や古經典佛像の類を陳列し。卓上堆く種々の花を盛上けたり。暫時にして同處を去り。石階を登りて奥殿に進めば。此處には善男善女群集して。花を捧げ香を拈り。跪坐合掌。予等外人を見れども更に介意せざるものゝ如し。金色褪せて僅に昔時の名殘を留むる扉を開き。帳を掲ぐれば。中には水晶にて刻める透明水の如き尺餘の佛像安置しあり。是れ暹羅國王の奉納せるものにて靈現殊に灼然なりといふ。壁上を

仰けば地獄變相の畫あり彩色殆と剝脫し其下に二三の老尼躊躇して頻りに哀を乞ふ全體の建築必ずしも宏大にあらず又巧妙にあらざるも粗造の中自から古雅掬すべきものあり然るに何者の沒風流ぞ寺內なる舊國王謁見室を法廷に充て碧眼皆面の判官椅子に倚て罪人を糺問せんとは是れ蓋し土人の信仰心を利用し手を勞せずして伏罪せしめんとの考案なるべけれど之が爲め靈場の神聖を損すること極めて大なりと謂ふべし

寺門を出て右折して進むこと百歩許左方に一大菩提樹あり枝葉蓊として天を蓋ひ恰も靈あるかと疑はる此處や曾て佛祖の乘生を集めて說敎せし靈地にして想へば二千五百年の昔天上天下唯我獨尊と絕叫し人生を透觀して無上菩提を說き終に涅槃に入て大恩敎主と仰がれたる大聖人は前後三回本島に飛錫し此地の木石親しく佛體に觸れたるかと考ふれば妄信深き翁媼にあらざるも一點尊崇の念なき能はず乃ち紀念の爲め菩提樹數葉を採り再び馬車に乘下て停車場に赴き歸途に就く日既に落ちて微雨蕭々獨り幾千の篝火闇黑を照らして滿山爲めに燃にんとするあるのみ是日子はカンヂー停車場に於てボーアの捕虜が彫刻せる象形の紫檀製置物を購ひたり乃ち之に因みて聊か茲に本島に於ける捕虜收容所の概況を記し以て邦人の參考に資せんとす

權利を取るか死に就くか男兒起つへきの秋は來れり愛國の志士須らく奮起して以てボーア人の意氣を示せと斯の如くにして彼等は銳劍を手にして起ち眇たる小邦を以て世界の最大國たる英國に對抗し能く數年を支へて勇氣宇內を震動せしめたるも衆寡敵せず終に敵の壓倒する所と爲りボーア兵の生擒せられしもの數萬に及ひ其中五千は實に錫蘭島裡に在り英國政府は彼等の爲めに本島數個所に收容所を設け之を遇すること極めて厚し予が今茲に記さんとするは我司令官以下の親しく視察せるラガヤ收容所の狀況にして三百二十名の捕虜を七棟の家屋に收容し一日三回の點檢を行ふのみにて任意に起床せしめ柵內の運動同志間の交通信書の往復等總べて寬大なるのみならず特に酒保を置き何等の勞役だも課することなく土地は高燥を撰びて健康に適し寢具は柔軟にして夢安らかに結ばるへし又食事は自國兵士と同一の物を與へ剩へ之に「ヅヤム」及「ミルク」を添加すといふ然れども捕虜中には二十五個國の人種あり彼等の多くは冒險者にあらざ

れば任俠者の類なるが故に動もすれば逃走再舉を企つる者なきを保せず是を以て室外には三重の鐵柵を周らし之に數條の索を張りて電氣を通じ若し逃走せんとする者ありて索を絶てば忽ちに警鐘自鳴する如く裝置し用意頗る周到なり又捕廚中手工あるものには隨意器具の製作を許して賃銀を收得せしむ予の購ひしは即ち這種のものにして頗る珍とすべきなり

我艦の乘員中勤直を以て聞へたる某氏は過度の近視眼にして之れが爲め往々黑白を誤ることあり氏は古倫母監獄の狀況を視察せんと欲し豫め其の所在を確めたる後獨り陸に上り市街を橫斷して郊外に出で夫れかと覺しき一廓に達し昂然門内に入れば此はろも如何に監獄にあらず氏は慌然走て門外に出でしに倖ひ一輛の馬車の人待顏なるあり時既に黃昏速に赴かずんは獄規參觀を許さゞるべきを思ひ倉皇車を麾き馭者台を背にして乘坐し頻りに黑人の馭者を促がして疾驅せしめんとすれども進行遲々として徒歩にだも若かず氏勵聲厲馭者を叱するも彼れ英語を解せざるか意更に通せず是に於て氏始めて眼鏡を拭ひて凝視すれば何ぞ料らむ駿馬と見しは頭に雙角を戴ける水牛ならんとは氏呆然獨り失笑を禁ずる能はず直ちに牛車を下り東奔西走漸くにして監獄に達すれば時刻既に後れて目的を達すること能はざりしと云ふ此の好笑話と一對なるを他の某氏の玉突談と爲す氏は多才多藝の人にして就中玉突の技を得意とし一たび棒を把て球盤に向へば四個の球は離合集散意の如く殆ど生あるものゝ如し氏之を以て私に外人を驚かさんと欲し一人の同僚を伴ひ海岸なる「グランド、オリエンタル、ホテル」に至り得々として球盤に向ひ先つ體度を正し棒を把て球を一擲せしに如何せしか正鵠を誤まり盤面を斜に突て張紗裂くること七八寸氏驚き辭を卑ふして主人に陳謝し償金五十「ルピー」即ち我三十三圓三十三錢三厘餘を徵收せらる主人慰諭して曰く斯の如きは初心者の毎に免かれざる所紳士幸に修業を怠るなくんば遠からず上達すべしと氏苦笑して匆々に逃歸せり

英人シーモンス氏は在古倫母帝國名譽領事たるの故を以て五月二日我司令官を訪問し同夜筵を「グランド、オリエンタル、ホテル」に開きて司令官兩艦長以下を招待す因て淺間より樂隊を派して興を助け大に外人間の好評を博したり

三日兩艦は出港準備を整へ午前十時水先案内に導かれて出港し埃及領なるポー

トセッドを指して亞剌比亞海に向ひ。例の如く毎日諸操練を勵行しつゝ。六日に至りしが。是日。恰も靖國神社大祭日に相當せるを以て兵員は午前九時十五分衣服を更めて上甲板に整列し。「海行かば」の奏樂に連れ。東方を望みて遙拜式を行ひ。尋て進行を停止し。淺間。高砂の兩艦。共に端舟を卸して將に競漕を開催せんとす。此日や。天朗にして海波起らず。最も競漕に妙なり。第一回は兩艦共に獨立して各自の端舟二雙にて行ひ。第二回は則ち聯合競漕にして。兩艦互に一隻宛を出し。各其所屬艦の艦尾を離れ。兩艦を左舷に見て一周し。疾く其舊位置に復するものを以て勝者と定む。既にして準備整頓し。號砲一發。整合旗下ると同時に。奏樂海に響き。拍手喝采一時に起れり。只見る二隻の端舟。艇首水を劈て進行飛ふが如きを。斯くて數番の競漕後。淺間艦上に於て授賞式を行ひ。士卒盡く歡を極む。眞に是れ壯快の遊。到底觀月弄花をのみ事とする都人士輩の夢想し能はざる所なり。

號砲空にとゞろけり　疾しや遲しや諸共に
端舟指揮が聲たかく　「前へ」と掛くる令に連れ

十有餘人の兵士は　いはをの如き兩腕に
撓柄握り一齊に　波を開きて漕出せり
進め進めの樂の音は　艦橋上に吹起り
水を涉りて底深く　眠る勇魚や驚かむ
時は皐月の朝日影　東も西も茫々と
雲に連なる亞剌比亞海　勝を爭ふ日の本の
大丈夫の雄々しさよ　御國の寶外に無し
猶も勵みて汝が守る　軍艦旗をば輝かせ
大君上に御坐すなり　大君上に御坐すなり

八日午後一時。北緯六十一度五分。東經十度十分の位置に於て。英國の保護國たるスエトラ島(東西七十海里。南北十八海里。北岸に白砂の平地ありて。日光を反射し。遠方より目擊することを得)の東端二十海里の處に斜路を採り。航進す。越へて十一日。淺間。高砂は互に其艦尾に標的を浮べて內腸砲射擊を行ひ。夜に入り。更に探海燈を點

して之を續行せり。翌十二日薄暮。左舷前方に亞丁岬角を認め。十三日曉天には。ペリーム島の高燈台を。續てブラザー群島を望み。兩艦は茲に始めて紅海に入りぬ。紅海の海口に在るバベルマンデフ海峽は譯して涙の門とも稱すへく。幾多の口碑を存する舊蹟にして。右に亞剌比亞。左に亞弗利加大陸を控へ。其間迫て僅に十海里に過きず。此より蘇士迄一千二百六海里の間は。即ち名に高き紅海にして。沙漠を經過し來る風は。冷温恒なく。暑氣頗る劇甚にして。海客の最も不快を感する處と聞きしに。今親しく實地に臨むに及び。却て印度洋よりも凌ぎ易きを覺ゆ。人言必ずしも信ずべからずなど噂し合へりしが。翌十四日。太陽直下に近づくに隨ひ。暑氣劇に增加し來り。上甲板の最も涼しき場所に於てすら。九十一度を示し。士官室の如きは實に百度に達せり。加之。海面風死して油を流せる如く。日光反射して彩色眼鏡を用ゐるにあらざれば正視する能はず。海水温度九十一度に及べり。然れども勇敢なる我兵士は毫も避易の色なく。將校の指揮を奉じて熱心操練に從事し。更に苦熱を意とせざるものゝ如し。就中機關兵の如き。百數十度の艦底に在りて四時間の當直に服し。呼吸迫り。流汗淋漓として酷熱膚を爛せんとするも彼等は悠然職務に勵精し。一人の苦痛を訴ふるものなし。斯くて兩艦は。十五日の午後九時頃。亞剌比亞西海岸に有名なるヂッダの港を六十海里隔てゝ通過したり。此港には人類の始祖イーブの墓所と傳ふる長さ九十二呎幅二十二呎の巨碑存し。又東方六十哩には。世界の極熱地にして回々教の開祖マホメットの誕生地と聞へたるメッカの市あり。信徒四方より雲集して四時絶ゆることなく。ヂッダのみにても。年毎に其數五六萬に下らすと云ふ。十七日より頓に冷氣を覺ゆ。北風微吹して夜間露下るかと疑し。翌旦。遙に前程を望めば。兩岸の陸地漸次相迫り其極まる處即ち蘇士灣にして。赤裸々たる禿山其周を圍み。風景一點の趣味を有せず。唯吾人の目を聳たしむるものは。運河の大工事のみ。抑此の運河たる。數千年以前。一たび埃及王に依て着手せられ。爾後一世奈破翁再び之を企畫せしも。共に十分の成功を見る能はず。歐亞の航路久しく兩斷せられ居たりしに。西曆千八百五十四年(安政元年)佛人レセップ氏決然必成を期して此の大工事に着手し。萬難を排して一意事業の遂行を計り。竟に十五の星霜と五億法の資金を費して。八十七海里幅三百二十呎乃至三百三十呎。水深約二十九呎の大運河を開鑿したり。爾來喜望峰は空しく名のみを留めて。行客復た亞弗利加迂回の嘆を發

せす。世界の交通貿易、全く面目を一新するに至れり。

我艦隊は、十九日夜半、蘇士灣に於て運河通過の準備を整へ、水先案内者を乗せ、曉天の頃、運河會社の小蒸氣船に曳かれて運河に入り、一時間五海里の速力を以て徐航せり。抑、該運河には、多數の浚渫船ありて常に河底の浚渫に從事しつゝあるを以て、喫水二十六呎十吋の巨船も安全に通過するを得べしと雖も、兩岸盡く砂礫なるが故に、若し船舶急航し、波浪岸を打ては、忽ち崩潰して河中に陷落す。是故に會社は通航船の速力を五海里に限定し、又兩船相會する時一方を避泊せしむる爲め、運河中に九個所の停船場を設けたり。運河の兩岸は、見渡す限り渺茫たる砂漠にして、唯目に遮ぎるものは、停船場附近に在る僅少の樹木と、遠望鐵橋に似たる浚渫機と、船に隨て河岸を走りつゝ哀を乞ふ土人の小兒と、駱駝に乗れる旅客とのみ。行けども行けども風景に何等の奇變なく、僅に旅情を慰むるに足るものは、運河中に在るバラ、チスマ、グレート、ビッター、スモール、ビッターの四湖水なり。艦隊は、零時三十二分チスマ湖に入り、左岸なるイスメリヤ港に碇泊す。是れポート、セット着の夜に入るを避けんと欲してなり。薄暮、予は司令官に隨ひ、爾他の將校と共に上陸す。徒歩數丁にして一の清流あり。是れぞ運河開鑿の當時、多數の生命と頼めるものにして、始めレセップ氏の工を起すや、最も困難を感ずたるは淡水の供給なりき。是故に遠くナイル河の水流を引き、運河に沿ふて更に淡水の小運河を開き、其兩岸に鹽分を吸收する一種の草を植へ、然る後樹木及野菜の栽培を試みしに、地味元より不良にあらざりしかば、意外の好結果を見るに至れり。運河の途上處々に青色を見るを得るは、即ち右の賜物なりといふ。

市街を過ぎりて土人の村落に至れば、方形矮小の土屋斷續して、其背後に萬里の沙漠を控へ、果しも知らぬ彼方より暮色茫然として至り、漠々たる砂塵の中に弦月眠るが如く、濕氣を帶びたる夕風は、生色なき木葉を弄び、此處彼處に集へる土人の兒女が唄ふ胡歌の聲いと物淋しく、狒々曳く賤夫、驢馬に乗れる老翁、見る物として荒寥ならざるはなし。予等一行は市外を一巡し、歸途埠頭に近き花園を見て歸艦したり。

翌二十日午前三時頃より、出港準備に着手し、前日の如く小蒸氣船に曳かれて再び運河内を進航し、午後二時三十分、河口なるポートセッドに到着、陸岸に繫留す。我艦

隊は運河内に時を費すこと三十餘時間。通航の際商船を停止せしめたること七回なりき。而して古倫母を出てより航程三千五百三十七海里半。航海日數十八日を要したり。(運河通航税は登簿噸數一噸に付九法即ち我三圓四十九錢なるを以て。我淺間は曳船料を合せて約一萬五千圓を支拂ひたるなり。)

其四　ポートセッドよりモルタ嶋に到る

ポートセッドハ埃及領にして亞弗利加の北東端に位し。元と沙漠中の一孤村に過ぎざりしが。蘇士運河の開通と同時に歐亞交通の要路と變じ。且つ來往の船舶に石炭其他の供給を爲すを以て。商業逐年隆盛に赴き。大厦高樓甍(いらか)を竝べて海岸の光景頗る宏壯なりと雖も輻湊せる船舶は概ね石炭搭載の爲めにして。隨て碇泊時間甚だ短く。又一般の物價極めて不廉なるは。同港將來の爲め遺憾なりと謂ふへし。獨り石炭積載法に至ては。其の敏捷なること他に匹儔(ひつちう)を見ず。一時間百噸を積入るゝは。極めて容易の事業なりといふ。

我艦隊の投錨するや。在港の英國軍艦「アンフライトライト」「スカウト」の二艘並に佛國軍艦「ウトレック」及日本郵船會社汽船備後丸は孰れも式の如く我艦隊と訪問の禮を交換す。就中英艦は我れに新着電報を示し。其他種々の便宜を與ふるなど。頗る懇切の意を表せり。艦隊は直ちに石炭の搭載に着手し。數時間にして之を終り。二十一日午前十時。水先案内者を載せて出航す。防波堤の盡頭(はつとう)に石を以て壘(たま)める高臺あり。臺上レセップ氏の銅像を安置す。左手に蘇士の地圖を展(ひら)へ。右手運河を指(ゆびさ)して立

てり。製作巧妙にして。風丰生けるが如し。我艦の乘員悉く甲板に集りて之を仰視す。既にして港外に出で。埃及王國に對して二十一發の禮砲を發射す。是れ港内に於て發砲を禁ずるか故にして。彼れも亦直に海岸砲臺より同數の答砲を發射せり。是日。我艦隊は艦砲射擊を試み。翌二十二日には水雷發射を行はんが爲め。地中海の東南端にして。ポートセッドの沖百三十海里なるアブーカー灣に入れり。抑〻地中海は。長さ二千餘海里最大幅六百餘海里の大面積を有し。古來歐洲列國が海上權力爭奪の大舞臺たりしのみならず。其東岸シリヤには大聖基督の降誕地たるゼルサレムあり。基督の昇天地なるナザレも亦其附近に在り。斯の如く地中海は歷史上極めて重要の關係を有するの地にして。就中予の最も興味を感じたるは。ナイル河口なるアブーカー灣と爲す。此地は曾て大チルソンが奮鬪せる名譽の古戰場にして。予は今親しく其地に臨み。端なくも往事を追懷して萬感禁ずる能はざるものあり。乃ち。左に當年の戰況を畧記し。讀者の一粲を博さんとす。

一世奈破翁。四隣を征服して。勢破竹の如く。歐洲の各邦。概ね彼れの膝下に慴伏したりと雖も。獨り英國のみは。飽迄も對抗して屈せず。有力なる海軍を備へて屢〻彼

れを惱ませるを以て。彼れは西暦千七百九十八年。(寛政十年)埃及を遠征するに當り。努めて英國艦隊の鋭鋒を避けんと欲し。佛國の南岸土倫港に於て運送船三百餘艘に二萬の陸兵を分載し。躬自から之が指揮を掌り。艦隊に護衛を命じて竊に土倫を出發し。敵の不意に出でゝ地中海の要害たるモルタ島を陷れ。同地を根據として更にアブーカー灣に進入し。艦隊を此に留めて亞歷山德黎に上陸す。此時に當り。英國の海將ネルソンハ。地中海艦隊司令長官セントビンセントの爲めに拔擢せられて一艦隊の指揮官と爲り。東馳西走。敵艦隊の所在を索むること一閲月。漸くにして其のアブーカー灣に在るを知り。直ちに進擊の策を決して敵に逼る。時に西暦千七百九十八年七月一日なりき。佛國艦隊は軍艦十八隻。砲數千百九十六門より成り。旌旗空に飜りて威容頗る嫺なり。ネルソン遙に之を望み。莞爾として十五艘の艦隊。千〇六十二門の大砲を指揮し。直ちに砲火を開きて或は敵艦と陸岸との間を航過し。或は敵の二艦隊中に突進し。一離一合。操縱掌を反すが如く。殆ど運用の妙を極めたり。二時間の劇戰後。日既に暮れて天色暗淡たるも。兩軍二千餘門の發する砲火は。閃々閃を破りて海面さながら白晝の如く。砲聲段々乾

坤爲めに震ひ。凄絶又壯絶。會々ネルソンは旗艦「アハンカード」の後甲板に在り。靜かに海圖を閲して戰を督しつゝあるの際。一個の敵彈驀然飛び來て身邊に爆發し碎片額に中りて骨に達し。肉片垂下して左眼を蔽ひ。創痛堪ゆる能はず。醫官驚愕。急に之を治療室に運び。他に先んじて治療を施さんとせしに。ネルソン肯せずして曰く。何爲れぞ彼の好漢を後にする。予は順序の來るを待たんのみと。一軍傳聞して爲めに感奮せざるものなし。ネルソンの治療を終るや。直ちに復た甲板に上りしか。是時敵軍既に大敗して或は沈み或は降り逃れしものは僅々數隻に過きず。勝利の月桂冠は終に英艦隊の掌裡に歸し。奈破翁は全然海上に失敗して。彼れの雄圖爲めに一大頓挫を來たすに至れり。

アブーカーの海戰は實に斯の如くなりき。ネルソン將軍が艦頭に屹立せる雄姿。幾千の佛兵が怨を海底に呑むの慘狀。想へは恍として夢現の如く。既に百四年の往事となれり。當年幾十隻の艦艦が縱横に馳騁したる戰場。今や極めて繁榮の港となりぬ。浮世の變遷豈驚くべきにあらずや。

我艦隊は水雷發射を終りたる後。針路をモルタ島に取て航進す。氣候頗に寒冷を覺

に。夜間黑衣を用うるに至る。(最低溫度七十度)翌日復た艦砲射擊を施行し。二十四日より艦內の塗換を行ひ。斯くて二十七日味爽。モルタ島の附近に達す。此島や地瘦せて草木凋衰し。全島盡く灰色を呈せり。加之。堡壘及人家に至る迄總べて同一色なるを以て目標と爲すべきリカソリップ及セントセルモの兩燈臺さへ發見するに困難せしが漸く接近せるに及び始めて。グランド港の入口を認め。午前十時二十五分港內の浮標に繫留したり。ポートセッドより航程一千百海里。航海日數七日を費せり。

其五　モルタより英國プリマスに到る

英國地中海艦隊は盟邦の遠征艦隊に向て前例なき歡待を行ひたり。始め我艦隊のモルタ港外數十海里の沖合に來るや。先づ無線電信を以て到着の旨を在港の地中海艦隊司令長官フヒッシャー大將に報知せしに彼れは案内の爲め將校を港外に派遣すへしと答へ。間もなく港外二海里の處に達すれば。果して一海軍大尉水雷艇に乘じて出迎し。親しく水先案内の勞を取りてグランド港に導けり。折しも碇泊し居たる地中海艦隊の諸艦は。戰艦。巡洋艦。驅逐艦其他を合して總數四十七隻。孰れも英國海軍の粹を拔きたるものにして帆檣林立許多の旌旗空に飜へるの光景は。一見人をして直ちに世界海上王の勢力を認識せしむ。我艦隊は徐々として港内に進み。英國及フヒッシャー大將に對して定數の禮砲を放ち。軍樂を奏しつゝ地中海艦隊旗艦「レナウン」の側に至り。前後の浮標に繫留す。斯くと見るや。「レナウン」艦長は卒先我司令官を訪問し。應對頗る慇懃なり。尋て我司令官はモルタ總督たる陸軍大將グレンフエル氏及海軍大將フヒッシャー氏を其官邸に往訪せんが爲め。水雷艇に乘して稅關埠頭に上陸せしに。陸軍兵約二小隊埠頭に整列して敬意を表し。又砲臺よりは十三發の禮砲を放ちたり。爾後彼れの海陸將官と我司令官との來往頗る頻繁を極め。交情極めて親密なり。殊に「インプラケーブル」艦長たるルイ、オブ、バッテンブルグ親王は。接待主任として日々本艦に來り。我司令官の爲めに自身斡旋の勞を取り。又グレンフル總督は午餐を。フヒッシャー司令長官は晩餐を饗し。尙艦隊附將校は特に競馬をマル競馬場に催して招待する等僅々半日にして司令官の出艦實に五回に及べり。是と同時に。英國將校は我將校を「モルタ、ユニオン」倶樂部に。其下士卒は我下士卒三百名を「ローヤル、ネーヴル、キヤンチーン」に招待し。又「モルタ、ユニオン」倶樂部員は我士官室士官以上を「ジユニオル、チブ、イサーク」倶樂部員は士官次室士官を。准士官倶樂部員は我准士官を。各其名譽會員に推薦し。更に滯在中は。彼れの旗艦「レナウン」の信號兵二名。毎日午前八時より午後八時迄本艦に出張して。英艦隊との通信を往復するに便ならしめ。優遇歡待殆ど到らざる所なく。從て予等は之が應接に忙殺せられ。寸時休息だも爲すこと能はざりき。

翌二十八日。要塞砲兵官は我司令官を請して砲臺の内部を巡視せしめ。續て「ブレナン」式水雷發射を行ひたり。是際英旗艦より三隻の水雷艇を本艦に送り。士官見學の

用に供したるを以て予は同僚十餘名と共に之に乘じて先つ水雷の發射を見轉ド
て造船所を視察し。我下士三十五名は特に總督の厚意を以て舊王宮參觀を許され
たり。午後陸上に於て英國水兵の葬式あり。因て本艦より海軍少尉田村子爵二十名
の下士卒を率ゐて會葬し。午後四時より五時半迄英艦に傚ひ半旗の吊禮を行へり。
是日。本艦は午前六時半より石炭千噸の積入を行ひ。午後六時半。之を終れり。
翌日。司令官は英艦隊を巡視し。之に續て各將校及下士卒亦數組に分れて各艦を參
觀し。得る所尠なからず。午後予は寸暇を得たるを以て。村井法學士と共に上陸し。市
街各所を巡覽したり。

抑もモルタ島は伊國の南方に位する掌大の群島にして。三個の島嶼より成り。其面
積合して我對馬の二分の一に過ぎず。島内泉流なく。森林なく。地質極めて不良なる
にも拘らず。然かも古來毎に列國の爭點と爲り。之が得喪は直ちに地中海に於ける
勢力の消長に影響する所以のものは。畢竟天然の位置要路に當れると。海岸線屈曲
して佳港良灣に富めるが故とに外ならず。是故に若し同島に關する歴史を繰述せ
んには。當に一冊子を成すに足る可しと雖も。事枝葉に渉るの嫌あるを以て。玆には

單に其大要を說くに止むべし。

此島や。曾て「カーセージ」人の所有たりしが。戰爭の結果一旦羅馬人の手に歸し。更に
「ゴッス」人を經て「サラセン」人に移り。西暦千百九十年頃より三百餘年間は。シヽリー
王の所屬と爲り。又轉ゝて。ゼルサレムの「セントジョン」の武士之を支配して。以て千
七百九十八年に至りしに。曾て奈破翁。英國艦隊の目を掠めて埃及に渡航の際。先づ此
島を占領せしが。幾もなくして佛國艦隊は英將ネルソンの爲めにアブーカー灣内
に於て粉碎せられ。地中海の海上權力愈〻英國艦隊の手に歸したるを以て。モルタに
在る佛兵は。本國との連絡を絶たれ。殆ど孤立の姿と爲りしが。勇猛なる守將ブオー
パは毫も屈するの色なく。手兵を提げて英の大軍に當り。二年の間。能く孤島を佛國
々旗の下に置くを得しも。奈何せん援軍來らず。遂に力盡きて英兵の軍門に降り。後
ち巴里條約に於て永久英國の所領と認めらるゝに至りぬ。爾來英人は孜々として
之が經營に盡瘁し。今や地中海に於ける海上權力の發動點として無比の重鎮を以
て目せらる。港内には各處に浮標を置き。大艦巨舶列を爲して繫泊し。一令の下七十隻
の艦艦は直に戰備を整へて外洋に突進すへく。又陸上には堅壘强堡處々に屹立し

て。幾多の砲煩遙に海面を下瞰し。鐵笛一聲急を呼べば。時を移さず巨彈霰の如く射注せん。其他同處には造船所及船渠あり。病院あり。兵員倶樂部あり。諸需品庫あり。軍港としての設備一も缺くる所なし。又市街は西暦千五百六十六年グランドマスター。ジョンテ、バレッタなるもの、創立に繫り。宏壯なる障壁を以て包圍し。諸處に門あり。遠く之を望めば。嚴然として城塞の如く。街衢非然。大厦高樓櫛比せり。予等は先づ墜道を通過し。大通りを過ぎりて「セント、ジョン」寺院に至る。此寺院は千五百七十八年の建築にして。堂內金色爛燦。壯麗を極め。歐洲に於ける屈指の寺院なりしが。一たび奈破翁の蹂躙に遇ひて寶物を奪掠せられ。一時全く荒廢に歸せしも。爾後英人の本島を領有するに及び。力を盡して之が回復を計り。今や漸く舊觀を呈するに至りしと云ふ。天井は一面に名工の意匠を凝せる宗教畫にして。側壁にも同じく「ゴブラン」織の宗教畫數枚を懸け。一枚の價格實に數十万圓。孰れも古色を帶びて頗る見るに足る。正面には耶蘇の聖像を安置し。其傍に高僧の着席を設け。各種の石を敷詰めて床面滑なること砥の如し。又本堂の左右には。英。佛。西。葡。伊等各國を分ちて。一區毎に尊崇する所の畫像若くは肖像を置けり。既にして予等は同處を辭し。轉じて總

欠

MISSING

美麗なる手提袋八百餘個を提出して曰く。是れ英國貴婦人令嬢の手に成れるもの。今妾をして之を貴艦の將校及下士卒に寄贈せしめ。以て今回來英の紀念たらしめんとす。願くは之を諸員に分配せよ。又倫敦見物の際には。妾親しく先導の勞を執らんと欲し。豫め鐵道局に對して。乘車賃半減の事を交渉じ置けり。尚ほ諸商店にも賣品の割引を承諾せしめたりと。予深く其厚意を謝し。直ちに下士卒一同を甲板に集め。其の大要を傳達せしに。嬢は喜色滿面。予の手を握りて曰く。多謝。貴下を勞することと掛おからず。日常妾は我等の救主なる天帝の大旨を奉じ。博愛を以て身の務とす。若し他に妾を用うる所あらば。隔意なく下命せよ。妾は喜んで微力を致すべしと。夫れより晩餐を共にし。夜に入りて艦を辭せり。後ち我れに贈りし提袋を開けば。中に聖書一冊と花を描ける「カード」あり。其側に附記して曰く。我が救ひは天地を造り給ひし神より來ると。嗚呼彼れの傳道に於ける眞に勉めたりと謂ふべし。我邦の僧侶及信徒諸子。望むらくは彼れに鑑みる所あれ。

戴冠式參列の爲め。特に我　帝室より御差遣相成りたる小松宮彰仁親王殿下には。既に御着英の趣拜承し居たりしが。六月十九日御旅館に夜會を御開催遊ばさるゝ筈にて。予は端なくも陪宴の恩命を蒙りたり。之に先たちて十八日夜には。我公使館に於て「アット。ホーム」の催しあり。之にも招待を受けたるを以て。予は同日海軍少尉田村子爵と共に。午後一時四十八分ノースロード發の汽車に搭して倫敦に向ひ。同七時。バッヂング停車場に着せしに。予等に先だちて入京したる村井。高須の二氏待受け居り。相伴ふて直ちにレッド、クリフ、ガーデン三十三番ダーマー氏方に至れり。同家には中尾艦長。中溝大佐及今泉中佐の諸氏既に止宿し居たるを以て。予等も亦同家を旅舍に充て。早速夜會服に改め。諸氏と馬車に同乘してグラブナル、ガーデンなる我公使館に赴く。先つ接待員に導かれて玄關を入れば。幾個の電燈燦として白晝の如く。樓上階下には數百鉢の盆栽を駢列し。百花時を得顏に咲誇りて。青々たる綠葉と相交はり。滿室香氣馥郁として宛然花園に在るの想あり。幾百の貴女が今日を晴と着飾りたる長裳の美服には。金剛石。紅寶石。眞珠等星の如く輝きて。渾身光を

放つかと疑はる。之に反して紳士は。皆一樣に清楚なる夜會服を着け。一見甲乙を辨じ難き感あるも。中に就て殖民大臣チャンバレン卿の眼光烱々たる外務大臣ラムスダウン侯の才氣面貌に溢れたる。ロバーツ元帥の威容凛乎たる。シーモア海軍大將の擧止沈着なる。一際異彩を放ちて他の注目を惹けり。唯遺憾なりしは。大英國首相ソールズベリー侯の病を以て來會する能はざりし一事なれども。之を除きては殆と倫敦交際社會の名流を網羅し盡したりと云ふ。少焉ありて我　彰仁親王殿下の御臨席あらせらるゝや。今迄の喧囂一時に歌み。衆皆先を爭ひて握手の榮を擔はんと欲し。殿下の御身邊は恰も美人の墻もて築き上げたらんが如し。予は其背後に佇立すること時餘に及び。纔に間を得て御前に進みしに。殿下には畏くも予に握手の榮を賜はりたり。予の御前を退出して隣室に入るや。人あり。輕く予の肩を叩て曰く。長途の航海幸に恙なきを得しやと。顧れば是れなん　殿下隨行員の一人なる砲兵中佐柴五郎氏なりき。予も亦久濶を叙し。少時立談を試みつゝありしが。氏は北京籠城の勇士として其名倫敦の交際場裡に喧傳し居るが故に。此所彼所より中佐を呼ぶの聲絶ゆる間なく。之が應接に遑なき有樣なるを以て。予は匆々に氏の許

を辭し。獨り廊下に出でゝ暫時花間に休息したり。

忽ちにして嚠喨たる音樂は。正面の花園より起れり。予は妙なる樂の音に耳傾け。暫時恍として我れを忘れ居たりしが。不斗予の側に來りて獨語するものあり。曰く。空氣熱して堪難かりしが。此處に逃れて始めて蘇生の感を爲せりと。予聲を知邊に顧れは。獨語の主は年若き邦人の一紳士なり。予乃ち一揖して名刺を示せしに。彼れも亦直ちに之に應下ぬ。此の年少紳士は西本願寺の新門主大谷光瑞師にして。今正に歐洲遊歷の途に在るなり。予は師と卓を圍み。紙煙を薫らしつゝ二三宗教上の談話を試みたる後。再ひ室内に歸れは。來客既に半ば散して。稍〻寂寥の觀を呈せり。是に於て艦長等を促し。相共に馬車に乘じて旅宿に歸り。寢に就く。時に枕頭の時辰儀二點鐘を報するの頃なりき。

翌朝。予は中溝大佐及今泉中佐と共に市中を遊覽せしが。其繁華雜沓なること到底筆舌の能く悉し得べきにあらず。唯世界第一の大都なりとの一言にて足るべし。殊には六十年來絶へてあらざりし戴冠の大典。既に一週日以内に迫り居ることとて主なる市街は種々の裝飾を施し。空を仰けは高く街路を横切りて軒より軒に彩旗

を引き左右幾十萬の窓口には。電燈葡萄の實の如く垂下して。思ひ〳〵に祝賀の文字を現はし。猶は之に寶石を鏤めたるあり。又彩絹を纏へるあり。何れも巧を競ひ。奇を凝らして。互に豪富を誇らんとするものゝ如し。猶は各市街の疆界には。宏大なる奉迎門を建て。金色銀色日光に反射して。目も眩せん許り。五百万の市民は東西に狂奔し。幾十万の旅客は縱横に徘徊し。さなきだに青天を見ること稀なる倫敦の空は。塵煙のうへに塵煙を加へて。四面濛々。予の如きは殆と呼吸の切迫を覺にし程なれば。歩調を速めて。先づバッキンハム宮殿の傍に出で。轉下てハイド公園に至り。夫れより或は乘合馬車に投じ。或は地下鐵道又は管電車(地下鐵道の尙下層にあり。深き處は實に地下七十呎に鋼管を貫き。其内部を軌路と爲せり。昨年より開通し。資本金五千万圓にして二分時毎に發車す。)に乘り。各處を遊覽したる後。博物館に於て晝食を畢し。最後にレヂエント公園を訪ひ。有名なる動物園を一見して歸途に就けり。博物館と云ひ。動物園といひ。孰れも規模宏大にして。少なくとも一日を一個處に費さゞれは。到底十分なる視察を爲すこと能はざるへし。

今宵は殿下の御旅館なる「カリヽッヂ、ホテル」に於て夜會の御催あり。予も亦席末

に列するの榮を得たるを以て。薄暮。衣服を改め。馬車を驅て。艦長及田村少尉と共に參館す。陪宴するもの概ね本邦人にして。肅然一堂の内に參集せり。時に陸軍少將福島安正氏戸を排して入り來りぬ。予は氏の渡英に就て一も聞く所あらざりしに。今目前其人を見。頗る不審に堪へざるなり。進んで握手の禮を施し。先づ其故を問ひしに。氏は五月下旬。遽に　殿下御隨行の命を拜し。即日米國を經て今日着英したるなりと。幾もなく御宴は開かれぬ。卓上には青草と紅花とを以て美麗なる裝飾を施し遙に室を隔てゝ美妙なる奏樂の音聞ゆ。殿下には御機嫌斜ならず。絶へず左右を顧み給ひて。途上の御模樣。御着後の狀況杯種々御物語あり。衆皆美酒に醉ひ。佳肴に飽き。予等の御前を退きしは殆と夜半の頃なりき。

其八　英國滯在の三

吾人が待ちに待ちたる英皇戴冠の大儀式は。愈六月二十六日と確定し。續て二十八日には。陛下親しくポーツマス港に臨御ありて。大觀艦式を行はせらるべしとの。通達ありたるを以て。我艦隊は二十三日午後より。プリマス附近の貴女紳士を招待して茶菓を饗したる後。薄暮。錨を拔き。大霧を冒してポーツマスに向ひ。二十四日午後四時二十二分。豫て指定されたる位置に投錨したり。

幾もなく濃霧全く霽れて碧空拭へるが如く。日光輝々として海波金色を壓み。人をして坐ろに名工の油畫を見るの感あらしむ。四方を見廻せば。眼界盡く艦船ならざるなく。各國の軍艦旗其間に翻飜として。壯觀言ふ許りなし。現場に在る英國及諸外國の軍艦は總計百十二隻。其排列は左の如し。

第一列　驅逐艦五隻內一隻日本驅逐艦朝潮及雜役船舟數隻
第二列　驅逐艦二十八隻及二梔蒸氣船數隻
第三列　二等巡洋艦六隻。水雷砲艦十七隻及雜役船舟數隻
第四列　一等戰艦三隻。二等戰艦七隻。三等戰艦四隻及一等巡洋艦六隻

第五列　一等戰艦七隻。一等巡洋艦四隻。二等巡洋艦七隻。及三等巡洋艦二隻

第六列（外國軍艦）一等戰艦三隻。三等戰艦四隻。一等巡洋艦四隻。二等巡洋艦四隻。

及練習艦一隻

第七列。第八列。第九列。第十列。第十一列は雜役船舟なれとも總て之を畧す。

即ち英國軍艦は一等戰艦十隻。二等戰艦七隻。三等戰艦四隻。一等巡洋艦十隻。二等巡洋艦十三隻。三等巡洋艦二隻。水雷砲艦十七隻及驅逐艦三十二隻にして。然も此數の內には。地中海艦隊及東洋艦隊は一隻も含有し居るざるなり。英國海軍の勢力豈に復た偉大ならずや。更に列國軍艦の參列せるものを擧ぐれば。

日本	三隻（內一隻驅逐艦）
亞爾然丁	一隻
コザーランド	一隻
智利	一隻
那威	一隻
丁抹	一隻
葡萄牙	一隻
佛蘭西	一隻
露西亞	一隻
日耳曼	一隻
西班牙	一隻
希臘	一隻
瑞典	一隻
伊太利	一隻
北米合衆國	一隻

英國海軍大將ホータム氏は六名の將官を率ゐて總指揮官と爲り。將旗を「ロンドン」號に揭揚す。更に外國將官の參會せるものを擧ぐれば左の如し。

日本	伊集院少將
日耳曼	「プリンス、ヘンリー、オブ、プロシヤ」大將
葡萄牙	「ゼ、クロウン、プリンス」大將

瑞典　クリント、バーグ中將
那威　スパール中將
佛蘭西　リチヤード少將
露西亞　カセリニノフ少將
智利　シンプソン少將
伊太利　ミラベロ少將
北米合衆國　クロウニンミルド少將
ニザーランド　イリス少將

斯の如く準備は既に殘りなく整頓したり。百餘の巨艦は威容儼然として互に自國海軍の精鋭を競ふものゝ如く。軍樂の音。喇叭の聲。相混じ。相應じて。自から一種凄壯の響を傳へ。聽く者爲めに肅然たり。嗚呼今や英杜戰爭結了を告げ。清國の騷亂亦鎮靜に歸し。世界各國擧つて太平を謳歌するに似たりと雖も。是れ實に假裝の平和のみ。熟〻其內情を察すれば。列强互に虎視眈々として。竊に爪牙を磨し。機を見て將に爲す所あらんとす。今日一處に會同せるもの明日は砲火の間に相見ゆるなきを保せ

す。之を思へば吾人は實に鴻門の會に臨める心地するなり。然れども我同胞幸に心を安んせよ。我水兵は忠良にして謹嚴なり。精練にして勇敢なり。加之。我れには固有の大和魂の存するあり。面貌の黃色何かあらん。軀幹の短小何かあらん。苟も正義を無視し。暴威を振つて我れに對するものあらば。我れは斷乎として之を膺懲せんのみ。倫敦「タイムズ」か參列の諸外國軍艦を批評し。艦の保存と兵員の熟練とに關し。我れを第一位に置きたるは。寔に故なきにあらざるなり。

戴冠式は愈〻明日に迫りぬ。予等は豫て英國海軍大臣より招待を受け。儀式拜觀の榮を得たるを以て。專ら上陸の準備を爲しつゝあるの際。最も驚駭すべき報道は。英國旗艦の信號に依て發表せられたり。曰く。國王陛下御不例に付。戴冠式及觀艦式共に中止せらるゝと。是より先き陛下には。御不幸にも盲腸炎に罹り給ひしかば。早速に名醫を召し。種々治療に手を盡くされしが。奈何せん萬乘の尊も病魔には勝つ能はずして。遂に腹部切開の大手術を受けさせられ。到底儀式を擧行し給ふと能はざるを以て。已むなく此の悲報を公表するに至りしなり。儀式中止の報や。英國臣民を落膽せしめたるは言ふ迄もなく。盟邦たる我臣民も亦頗る遺憾に堪へざる所なりと雖

も。其後の御經過を拜承するに。至極良好の趣なるを以て。遠からず御快癒の上。豫定通り莊嚴なる大典を擧げさせらるべきは。吾人の信として疑はざる所なり

翌二十六日。本國より　皇太子妃殿下昨日御分娩王男子御降誕あらせらるとの電報あり。艦長は直ちに總員を後甲板に集め。「君か代」の樂を奏し。東方に向て遙拜式を行へり。謹みて思ふに。　皇室の御繁榮は即ち國家の祥瑞にして。申すも畏けれど。上聖上の御滿足。下萬民の歡喜。夫れ幾何ぞ。微臣等萬里の外に在りて。斯の御慶事を拜聞し。衷心の感喜一層切なるものあり。

戴冠式延期せられて人心に頓挫折し。ポーツマスに集合せし諸外國軍艦も。次第に其數を減じて。朝夕起る軍樂の音。今は何となく哀れを添へ。舞踏會や。宴會や。一切慶止せられて。港内の光景轉た寂寞を覺ゆるに至れり。是に於て我艦隊も亦遂に同港を去り。二十八日。テームス河畔なるシアネス港に回航しぬ。

其九　英國滯在の四

英國土にメドウエーと稱する河流あり。サレー州附近に源を發して。ケント州を東北に流れ。幾多の支流を合せてナヤタムに至り。河幅俄に增大し。其末遂にテームス河と合して。海に入る。此河口に在るもの。即ちシアネス港なり。市街は四區に分たれ。砲壘を以て之を保護す。港内に鎮守府。船渠及砲術練習所等あり。鐵路倫敦に通じ。僅々三時間を以て到達するを得べし。我艦隊の入港するや。司令長官マーカム中將は。好意を以て我が爲めに最上の碇泊場を指定し。又同港の官民は。熱心歡迎の意を表して。各種の招待絶ゆる間なし。

七月一日。彰仁親王殿下には。ナヤタム造船所を御訪問遊はさるべしと聞及びたるを以て。予等は親しく　殿下に拜謁して。御告別申上げ。序を以て該造船所を一覽せんと欲し。早朝。司令官に隨從して小蒸船に搭じ。江を溯りて同所に至れり。我司令官の到着するや。所長以下數名の將校棧橋に出でゝ迎接し。直ちに予等を導きて所内を巡覽せしむ。抑ナヤタムはメドウエー河の右岸に在る一小都會にして。古來種々の歷史を有せる土地なりと雖も。其市街は決して繁華なりと云ふを得ず。唯造船

所のみは。規模頗る宏大にして。河に沿ふと四千八百碼。面積五百「エーカー」に上ぼり。八個の船渠を有し。其最大なるものは「ブロック」上の長さ四百十六呎高潮時の深さ三十二呎に達す。其他鑄物工場。鍛冶工場。木工工場等羅列して。見るに足るもの尠からず。英國屈指の造船所なりといふ。予等は一巡の後。司令官及艦長と別れ。一行二十餘名。一艦内に誘はれて午餐の饗を受く。時に英國將校の會するもの亦三十餘名。已にして午餐將に終らんとするや。彼れの先任將校たる一少佐は。滿坐の注意を喚ばんが爲め。木槌を取て卓を打ち。徐ろに起立して。日英兩國　皇帝陛下の萬歳を唱へ。衆皆盃を擧げて之に唱和す。彼れは更に語を改め。日英將來の親睦に就て一場の演説を試み。席に復せり。此の場合。我れも亦彼れに向て一言の挨拶なかるべからず。而して予は先任將校たるの故を以て。衆の推す所となりしか。元來英語に未熟にして。其任にあらざるを自信し。他の同僚を推薦せしも。固辭して應せず。然るに英國將校は。一同拍手して之を促かすと急なるに依り。予は已むを得ず席を起ち。徐ろに日本語を以て述べて曰く。英國將校諸君。予は深く英語に熟せざる爲め。直接に予の意中を開陳し能はざるを遺憾とす。因て日本語を以て御挨拶致すべければ。願くは隣席

に在る同僚より責めて大意なりとも御聽取下されたし。抑英國は。最も名譽の歴史に富める世界の最大海軍國にして。我日本は新進氣鋭の海軍國なり。今や此の兩海軍國。東西呼應して世界の平和を計るに至りしは。實に人道の幸福なるのみならず。復た最も愉快なることと謂ふべし。乍併海軍の技術に關しては。吾人は貴國を以て競爭者と見做し。一歩だも讓らざるの覺悟にて奮勵すべければ。願くは他日事あるの際に於て。之が實効を徵せられんことを望む。終りに臨み。予は一行を代表して今日の厚遇を謝し。併せて諸君の健康を祈る云々。予の饒舌は同僚の意譯と共に滿堂の喝采を博したりしも。予は冷汗淋漓たるを禁ずる能はざりき。午後四時。殿下御着の豫定なるを以て。予等一行は之に先だちて停車場附近なる造船所長の官邸に至り。其御來着を待受けしが。幾もなく　殿下を乘せ參らせたる倫敦ナヤーリングクローニス發の列車は。豫定の如く當停車場に到着したり。重立ちたる奉迎者はノーアー司令長官マーカム海軍中將。チヤタム造船所長ホルランド海軍少將。陸軍總督代理ヅーナン陸軍大佐。(總督は病氣)並にチヤタム市長等にして。孰れも正服を着し。百餘名の砲兵。樂隊を先導として之に隨ひ。又造船所の門には。水兵百餘名。同しく正服に

て整列せり。殿下には御機嫌麗はしく、一々奉迎者に御挨拶あり夫れより造船所長の官邸に於て御少憩の後、造船所構内専用の輕便汽車に召され、周く所内を御巡覽あり。間もなく倫敦へ御歸還の旨仰出されしを以て、予等は所長の門前に整列し、謹みて御告別申上げたるに、惶くも　殿下には微臣を御前に召させられ、今般長途の航海に恙なく着英せると、其辛勞察するに餘りあり、尚此上とも萬事に注意して、益國光を發輝するに努むへし。此場所に在るものは勿論、歸艦の上は一同に然るべく傳達せよとの令旨を賜ふ。予は此の優渥なる令旨を拜聽し、感極まつて涙の下るを禁じ得ざりき。已にして　殿下は馬車にて停車場に向はせられ、直ちに倫敦に向て御出發遊ばされたり。其際、造船所内在泊の英艦は孰れも檣上高く我軍艦旗を掲揚して、二十一發の皇禮砲を發射せり。踵で予等も亦司令官に隨ひ、小蒸氣船に搭じて、シアチスに歸る。時に細雨蕭々面を掠めて冷かなること氷の如し。

十二日、倫敦に於て南阿征討軍の總指揮官たりしキチネル將軍の凱旋式あり、予も亦招待を蒙りしが、公務多端の爲め、之に應ずること能はず。然れども將軍が豪快なる性質は、予の欣慕措く能はざる所にして、聞く所に據れば、彼れ曾て少壯なりし頃、

一貴女に結婚を求めしに、彼れの魁偉なる容貌と、傲岸なる態度とは、婦女子の歡心を買ふに由なく、遂に明々地に謝絶の辱を受くるに至れり。然るに數年を出でずして、彼れの勇名軍隊の間に轟き、戰へば勝ち、攻むれば取り、勳功隆々として旭日昇天の勢と爲りたるを以て、先きの貴女は、大に先非を悔ひ、更に彼れに向て求婚せしが、彼れは單に否の一語を以て之を却け、爾來婦女を視ること蛇蝎の如く、苟も婦人の出席する宴會とし云へば、何如なる場合と雖も、斷乎として同席を肯せず。往年スーダン遠征より凱旋の際の如き、幾多の貴婦人、彼れを迎へ、爭ふて其手にせる花束を與へんとせしに、彼れは貴婦人を一睨せるのみにて、毫も意に關せざるものゝ如く、偶一十歳許りなる一少女の捧げしものゝみ一たび手に觸れしも、これさへ直ちに投棄せりといふ。是に於てか彼れは婦人の怨府と呼ばるゝに至りしが、是れ必ずしも失戀の爲めにあらず。彼れをして斯の如き行爲に出でしめたるは、他に一大刺戟の存するものあるなり。蓋し英國陸軍には、近時漸く華奢の風流行し、青年將校は何れも外貌の裝飾に焦思して、婦女子の歡心を得ることにのみ努め、少尉にして年俸以外に、數千金を費す者あるに至れり。要するにキチネル將軍が極端なる排婦主義に出

でしは。畢竟右の惡弊を一掃して。質實扑直は軍人の本領たることを知らしめんと欲したるが故なるべし。且つ彼れは亦剛愎を以て名あり。數年前。參謀長として南阿に出軍中。一日歐洲より派遣の見學將校。相伴ふて彼れを訪問せしことあり。其際。彼れは偶一の訓令を起草しつゝありしが。やがて一章を書き終りたる後。傲然椅子に倚りたるまゝ。見學將校を顧みて曰く。公等遠路の來會。果して何の期する所かある。幸に此のキチネルの戰術を視察研究せば。後來大に益する所あらんと。言ひ終りて復た筆を執り。稿を續けて傍ら人なきが如く。見學將校をして啞然言ふ所を知らざらしめしといふ。彼れのロバート元帥に代りて南阿征討軍に總督と爲るや。奇謀百出殆ど神の如く。さしも頑強なりし杜兵を屈伏せしめ其の殊勳に依り。特に子爵を授けられ。陸軍大將に陞任せられ。英國の陸軍彼れが爲めに重し。嗚呼復た男兒の快事ならずや。抑英國社會の風習として。苟も紳士たるべきものは。婦人の歡心を得るに努めざれば。其資格なしと迄極端に流るゝ通弊中に立ち一種の見識を持して彼の粹士の徒を冷殺し。苟も媚を巾幗に賣らず。花顏を賴みて異性に誇る交際界の女王と雖も。彼れの前には厘毛の價値だもなく。寧ろ百方苦慮して彼れが一瞥の榮を

得んと切望するに至らしめしは。眞に一世の硬骨軍人の好模範と稱すべきなり。

キチネル將軍の凱旋式に際し。最も人目を惹きしは。我水兵の一隊が儀式を參觀したること是れなり。而して此機會と便宜を我兵員に得せしめしは彼のマクレン嬢の勞を多しとす。是より先き我兵員の倫敦に赴かんとするや。嬢は百方奔走して汽車賃を半額とし。又特に我兵員の爲めに休息所を定め。市中見物の際には我兵員を數隊に分ち一隊約二百名宛を率ゐ六十の老軀を以て親しく其先登に立ちて各處を遍歷し。時刻を計りて凱旋式を參觀せしめ。且つチャンバレン卿に說き。勅許を得てテームス河上に在る離宮「ウインツル、カッスル」をも拜觀するを得せしめ。加之。嬢は我兵員に贈るに土產を以てし。能く我兵員をして一日五志(我二圓五十錢許)の小額を以て。十分なる倫敦見物を爲さしめたり。彼れが幹旋の懇切なる元より多少宗教上の意味を含蓄すべしと雖も。一點同情の熱火胸裡に燃ゆるもの無くんば焉んぞ能く斯の如くなるを得んや。我水兵等須らく深謝して可なり

シアネスの碇泊は。殆ど一個月に彌りしを以て。吾人は此間に於て種々の出來事に遭遇したり。夜會。舞踏會さては園遊會の招待は。須臾も絕ゆる間なく。甚しき時は一日

の内衣服を改むること五回に及び終に我將校をして交際の勞は艦務の勞に勝るとの數倍なりと呼ばしむるに至れり又我下士卒も市民若くは地方の富豪より或は汽車を以て或は馬車を以て數哩乃至數十哩の遠地に迎へられ厚く鄭重なる接應を受けたり或時は我將校倫敦其他知名の土地に見學旅行を試みたることあり或時は日英兩國の水兵シアネス練兵場に大親睦會を開き彼我千餘人の壯漢互に手を携へて日本酒を酌み何れも片語交りに彼れは「君か代」我れは「神誰王」の國歌を謳ひて好意の交換を試みたることあり或時は松方伯爵渡邊子爵岩崎男爵福島陸軍少將井上海軍少將(良智)及英國海軍大臣其他諸將官の來艦に接したることあり又或時は艦内に英國の貴女紳士數百名を招待して盛大なる宴會を開き我水兵の手に成れる菊牡丹藤菖蒲等の造花を贈り擊劍劍舞柔道手品手踊を演して非常なる喝采を博したることあり更に予一身の經過を叙すれは或時はグリーンウィッチなる海軍大學校天文臺博物館に遊び就中ネルソン將軍が肉體の遺物たる金色の頭髮と血痕斑々たる戰死當時の着衣とを見て無限の感慨に擊たれたることあり或時は日英兩國紳士の協同組織に係る日本協會に於て催ふしたる倫敦植物園の園遊會に臨み曾て予が海軍大學校に在りし頃親しく薫陶を受けたるイングルス將軍に邂逅し其意外に老ひたるを見て懷舊の情禁ずる能はざりしことあり或時は英國唯一の名優サア、ヘンリー、アービンの演劇を觀て入神の技に感服したることあり或時は倫敦市中に化物屋敷の名隱れなき某家に投宿して東洋の好奇に傲ひたることあり又或時は司令官に隨行して我公使館の夜會に臨み林公使より英國朝野政治家の月旦を聞き非常に興味を覺えたることあり シアネス滯在の一個月は斯る出來事の間に夢の如く過ぎ去りしが皇帝陛下の御不豫も最早御本復ありて遠からず大典を擧行せらるべしと聞にければ我艦隊は此の間を利用し白耳義國マントワープ港に暫時滯在することに決し七月二十六日午前三時シヤネス港を抜錨せり

其十　アントワープ碇泊

白耳義國第一の港と聞こえたるアントワープは、同國の西海岸なるシエルドの上流約六十海里に在り。鐵路四方に通じ。比隣との交通頗る便利にして。白耳義一國は、言ふも更なり。遠く日耳曼南部の通商をも支配するを以て。商業日に月に隆盛に赴き。今や人口三十五萬五千に上ぼり。歐洲屈指の大港たるに至れり。河岸に沿ふて長さ二十三海里に渉れる埠頭を設け。各所に倉庫。起重機。船渠「ベースン」等あり。商港としての設備一も缺くる所なく。滔々たる大河を上下する船舶は。舳艫相接して來往織るが如く。其の盛況全く豫想の外に在り。我郵船會社が歐洲線を當港に延長したるは。寔に故ありといふべし。市街は圍むに壘壁を以てし。要害の嚴なること殿洲中他に多く類を見ず。復た好個の重鎭たり。加之。街衢清潔にして。大厦高樓軒を聯ね。就中名に響きたるノートルダムの高塔は。巍然として雲表に聳へ。結構頗る壯麗なり。此高塔は西暦千三百五十二年を以て工を起し。爾來八十餘星霜を經て始めて落成を告けたる大建築なりしが。中ごろ一旦祝融の災に罹り。全く當初の偉觀を損したるを以て。國民擧つて之を痛惜し。遂に再び修理に着手して。今や漸く舊觀を復するに

至れりといふ。其他陸軍造兵廠、動物園等も規模頗る宏大にして。外人の目を驚かすに足れり。

七月二十六日の曉天英國シアネス港を出發したる我艦隊は。潮流矢よりも急なる英海峽を横斷し。一夜を蘭領フラッシング港に明かして。翌二十七日午前三時。同處を拔錨し。或は艦内の防水扉を鎖し。或は舷外に吊せる端艇を内に收め。或は舳艫に大鋼索を備ふるなど。種々の警戒を施し。斯くて水路案内者の嚮導に從ひつゝシエルド河を遡航して。アントワープ港に向ふ。兩岸の風景明美にして。さながら一幅の畫圖に對するが如し。歷史を案ずるに。此地曾て「ノーマン」族の侵掠を受け。全市破壞の慘禍を招きたることあり。又宗教上の爭鬪よりして。千餘の生靈毒刃に殞れしことあり。今にして當年の事を回想すれば。恍として夢幻の如く。獨り山河の舊に依て千古の觀を保つあるのみ。萬里遠征の客。偶〻來て其跡を過ぐ。何爲れぞ一片懷古の情なきを得んや。況んや歐洲の天地を席捲して群雄を膝下に慴服せしめたる奈破翁が。最後の運命を賭したるウオーターローの戰場も。亦此の國内に在るに於てをや。予は獨り艦頭に立ちて浮世の定めなきを覩じつゝありしが。是時。軍樂隊は響も高く

勇壯なる進軍の譜を吹奏し出せり。忽ち見る。彩旗を以て飾れる歡迎船の此方を指して進航し來たるを。アントワープは既に眼前に在り。自國の軍樂隊は陸岸に整列して「君が代」を吹奏し。市民は棧橋上に堵を築きて。一齊に歡呼せり。已にして禮砲の交換終るや。淺間は埠頭に繫留し。高砂は河中に錨を投じぬ。

是より先き。我艦隊アントワープ回航の議を決するや。白國外務大臣は。陸軍指揮官たる陸軍中將ニニット氏に向て。特に我艦隊を歡迎すべき旨訓令し。又宮內大臣は。國王陸下の特旨を以て。直接同中將に爲し得る限りの優遇を與ふべしと命令したり。是故にニニット中將は。知事其他の有司と議を凝らし。陸軍少將マスカート氏を接待委員長として。諸般の手筈を定め。優遇歡待至らざる隈なく。歡迎の度。遙に英國を凌ぐの勢にして。知事指揮官及市內の富豪は。爭ふて我司令官以下を饗應し。又陸岸には。常に美麗なる馬車十數輛を準備して。我一行の使用に供し。其の上陸の際の如き。特に一隊の騎兵を出だして。我れの前後を警蹕せしめ。市民通路の左右に群集して。或は帽を擧げ。或は手巾を振り。以て親愛の意を表せり。二十八日。王命あり。我司令官及將校に謁を賜ふと。折しも陸下には。國都ブラッセルを出でゝ西海岸の勝地

なるナスステントの離宮に御滯在中なるを以て。司令官以下兩艦の將校十九名は。早速正服を着け。馬車を驅て停車場に赴き。御料の汽車に乘じてナスステントに向ふ。列車の裝飾。善盡し。美盡し。到底禿筆の能く形容し悉す所にあらず。途中二時間を費してナスステントに著すれば。此處には宮內官數名出迎し居りて。予等と馬車を同うし。一行を導きて先つ市中を巡覽せしめ。然る後。離宮に到る。抑ナスステントは。英海峽の東岸に位置を占め。氣候溫和。風景絕佳にして。漫遊の外客四方より雲集し。海岸に櫛比せる旅館。料理店には。四時客の絕ゆる間なく。歐洲の大磯とも謂つへき勝地なりといふ。殊に離宮の在る處は。頗る眺望に富み。見下す沙濱には。乙女子か裳揭けて貝拾ふ趣も深く。寄せては返す浦波は。有るか無きかの音を傳へて。長生殿の私語を偸ばしむ。やがて司令官以下將校一同は。加藤公使及英國より出張せる玉利大佐と共に。宮中深く進み行きしに。皇族なる一貴婦人を始め。總理大臣。宮內大臣。侍從長の面々。出てゝ予等一行を一室に迎引し。互に握手の禮を行ふ。待つほど半時許にして出御の報知あり。是に於て予等は。官等の順序に據り。一列に起立して。肅然形を正し居りしに。國王陸下には。右側の閾を排して靜かに入來し給へり。御身幹六尺ゆたかにして。

皓顔隆準雪白の長髯を垂れ譬へばラフエルか描ける神仙の畫面を拔け出でたらんが如く燕尾服に我菊花大綬章を佩ばせ給ひ美形の擧れ高き某内親王殿下に扶けられつゝ先づ司令官の面前に歩を移され いと鄭寧なる御挨拶あり 續て司令官の紹介にて諸將校と一々握手せられ英語又は佛語もて種々の御下問あり 間もなく別室に於て一同に鄭重なる御宴を賜ふ 宴中陛下には絶にず種々の御物語ありいと打解けて見參らせしが 軈て宴の終らんとする頃徐ろに御席を起たせ給ひ「今回日本 天皇陛下が最新壯大なる淺間高砂の二艦を我アントワープに回航せしめられたるは朕の深謝する所にして朕は日本 天皇陛下が斯の如く豪邁沈毅なる將軍と有爲活潑なる少壯將校とを有せらるゝ幸福を羨望すると同時に勇名世界に轟ける日本武士と親しく一堂に會して談話するの名譽を欣ぶものなり且つ今回の事を好機として後來兩國か益親交を重ねんことを切望して止まず云々」との勅語あり 續て別殿に於て内親王殿下と共に殆と二時間に渉れる御談話ありしは實に空前の異例なりといふ已にして予等は御前を拜辭し再び汽車に搭じて夜半の頃本艦に歸着せり

是日アントワープに於て我兵員は白國第七聯隊の招待を受け兩艦三百名の下士卒軍樂隊を先頭として隊伍整々彼れの兵營に赴けり 聯隊の兵員は門内に整列して歡迎の意を表し夫れより彼我互に手を携へて散歩を試み 尋て畫餐を共にし和氣靄然歡を盡して退出せしが 市民は我兵員の規律森嚴にして苟も禮を失はざるを見 東洋亦た斯の如きの文明國ありやと歎賞し 貴婦人の組織せる或團體の如き特に造花を寄贈して敬意を表したりといふ

我艦の繫留せる棧橋は晝夜の別なく見物人の山を爲し 爲めに十數名の巡査出張して雜沓を制するに至りしが 夜に入り高砂は滿艦電氣飾火を爲し 淺間は探海燈を照らしたる爲め一層混雜の度を增し 全市さながら祭禮の如く 或は煙火を揚げ或は音樂を奏し 近鄕より來觀するもの幾百千なるを知らず 偶我領事は市民の輩望者に限り艦内縱覽の切符を出だせしに 二日間にして來觀者の數三萬餘人に達し 就中二十九日の如き艦長室と言はず士官室と言はず殆ど縱覽人を以て滿たされ 立錐の餘地だも殘さゞる盛況なりしかば 予は獨り寢室に退き 靜かに讀書に耽りつゝありしに 偶戸外に人の囁く聲あり 何事ならんと顧みれは身裝も卑しから

ざる夫妻の外人物珍らし氣に室内を窺ひつゝある傍に、そが愛兒にやあらむ、六歳許りなる小兒の水兵服着たるが停み居たり、予は熟々小兒の容貌を眺むるに瑠璃を點せる兩眼は凛として張あるが中に得も言はれぬ愛嬌を湛へ、頬肉豐かに色冴にて、さながら吉野紙に緋櫻を包みたらん如く、口許能く緊りて、他迄も無邪氣なる立姿、彼の天使なるものにも似たらんかし、予はあまりの愛らしさに覺えず手を擧げて「善き兒よ、來れ、珍らしき物進せん」と言ひつゝ、彼れを麾げば、彼れは更に臆する色もなく、直に予の側に進み來り、姿勢を正し、紅葉の如き手を擧げて、敬禮を施しぬ、予は莞爾として幾たびか彼れの肩を撫し、本邦より齎せる武者繪數葉を與へしに、彼れは元よりろが母親迄もいと嬉氣に謝辭を繰返しつゝやがて上甲板へと立去れり、予は此の可隣なる小兒を見るにつけ、坐ろに想を我愛兒の上に及ぼすことを禁ず得ざりき。

「れせん泣かすな」とは、德川の鬼と呼ばれし本多作左が戰場より妻に與へし書信の一節にして、子を懷ふ勇士の眞情、言外に溢れ、之を讀む者、誰れか一掬同情の感なからんや、苟且にも妻子に冷酷なるを日本武士の本領と誤解する勿れ、古への武士が、忠義の爲めに恩愛の情を棄てゝ顧みざるは畢竟名分を重んじ妻子に後累を遺さゞらんが爲めにして、寧ろ彼等を切愛する所以のみ、武士道の妙味實に此點に存す、管仲曰はずや、子を殺して君に喰はしむるは人情に非ず、近づくべからずと、蓋し至言なり、苟も妻子に向て冷酷なるの無情漢何爲れぞ眞誠の忠臣義士として武士道を全うすることを得んや。

予に二人の愛兒あり、長女武は四歳、長男長隆は三歳、共に頗る健全にして廻はらぬ舌に父よと慕ふ愛らしさ、此頃着せし妻の書信に據れば、武子は日毎畑に出でゝ、予が平素嗜める野菜を摘み、父樣に差上る御歸りは今日か明日かと待詫び、長隆は毎朝、予の寫眞に向ひ、父樣アタマ(淺間)でドンドン(倫敦)御土産は何と獨語き居れりと、嗚呼帝都を出でゝ既に五閲月、東西相距る一萬餘里、舷頭劒を振つて兵士に號令せる後、肱を枕の假寐にも屢夢に入るは二兒が上のみ、今や端なく可憐なる洋人の小兒を見て萬感交胸に充ち、獨り茫然として頭を搖ぐれば、孔上に飾れる二兒の寫眞、嫣然微笑を含みて呼べば應へん風情なり。

三十日、我艦隊は陸軍指揮官、知事、市長其他重立ちたる貴女紳士を淺間に招待して

宴會を開き。餘興として角力手踊を演ず。例に依り。來賓に造花を贈りて。告別の意を表せり。斯くて三十一日午前。本艦及高砂は。纜を解ゐてポーツマスに向ひ。出航す。海岸には。數萬の市民群集して。別を惜み。或は聲を揚げ。手巾を振るものあり。或は艦に沿ふて海岸を走るものあり。已にして彼我奏樂の音。漸々相遠かり。何時しかアントワープの影は見にすなりぬ。午後。我艦隊はシエルド河口を出で。轉じてチスチントル離宮の沖約五海里の處に至り。白耳義國王陛下に對して二十一發の禮砲を放ち。夫れより徐々英海峽を通過して。八月一日ポーツマスに投錨したり。予はアントワープ回航の結果を見て。平時に於ける軍艦の效力眞に至大なるとを感ぜずんばあらず。抑アントワープはシエルド河の遡航困難なる爲め。軍艦の入港甚だ稀れにして是迄來泊せる軍艦のうち。其の最大なるものにても。僅に二千餘噸の閃艦に過ぎざりしを以て。市民は。淺間。高砂の如き新式精鋭なる大艦に接し。大に目を峙てたるのみならず。彼等のうちには。全く日本海軍の眞相を識らずして。動もすれば左留の邦人に向ひ。貴國にも軍艦ありや。水兵ありやなど。暗に輕侮の意を示せる者さへ尠なからざりし程なれば。其の驚愕殊更に甚しく。頓に日本を激賞し。兒童走卒の末に至る迄。擧つて日本人を敬重するに至りしは。是れ實に平和の戰爭に於ける一大勝利とも謂つべきなり。軍艦を以て不生產的と做す者は。請ふ今後白耳義人の我に對する感情と。商業上の關係とに注目せよ。恐らくは思ひ半に過ぐるものあらむ。尙ほ茲に當時彼地の有力なる新聞紙か掲載したる紀事二三を摘譯して。讀者の一粲に供すべし。「マタン」は七月廿八日の紙上に記して曰く。

國王陛下より招待を受けたる日本軍艦二隻の昨朝(七月二十七日)入港するや。忽ちにして棧橋上には市民群集し。人々相語て曰く。今日迄入港せる軍艦は。總て木艦なりしが。今回の日本軍艦ころ。眞に堅牢完美にして。驚くべき魔力を有する浮城なり。而して伊集院司令官及艦長は。艦橋上に立ち。爾他の將校は。諸所に在りて職務を執れり。彼等は。一般に日本人の特色として短軀なりと雖も。暗褐色の制服は。能く彼等の躰軀に適合し。姿勢端嚴にして。威風凛然たり。午後には軍艦の參觀者非常の多數に上ぼりしか。彼等は。孰れも大なる利益を得たるならん。何となれば日本軍艦は。最も新式にして。諸機械。兵器等も亦最新最良のものなればなり。例へば淺間。高砂二艦の間に殆と絶にす交換せらるゝ通信に。無線電信機の如き進

歩したる器械を用うるを見ても其他を推知するに足るべし。

同紙は翌二十九日の紙上に於て亦復た日本の政治上に於ける位地と題して論じて曰く。

日本は今や絶東に於ける政治上の一大勢力たり。英國か清國の現狀を維持せんが爲め同盟條約を締結するに毫も躊躇することなかりしは眞に吾人に現在の日本の位地を說明せるものと謂ふへし。日本は强固なる陸軍と雄大なる海軍とを有し就中海軍の如き一切の戰鬪機關悉く完備せるのみならす兵器、軍器等は最新式のものにして一言以て之を蓋へは日本艦隊は皆壯麗なる軍艦のみにて成れるなり現に吾人か見て以て驚歎措く能はさる淺間高砂の二艦も實に其中の一部にあらずや。

更に轉ずて商工業の實狀を見るに二者共に能く進歩發達し東部亞細亞に於ける諸市場は到る處日本製品の陳列せらるゝを見るべく今や駸々として一大工業國たらんとしつゝあり。思ふに日本人は歐洲諸國よりの輸入を防止し更に歩を進めて歐人と西洋市場に於て一大競爭を試みんとするの企望あるものゝ如

し。

同日復た他の新紙〔メトロポール〕は府知事の催ふせる宴會及艦内の狀況等に就て記載して曰く。

伊集院少將は府知事の招待に應せし際席上に於て左の如く演說せられたり。

府知事閣下及コヂエル夫人並に來會の紳士貴婦人諸君吾人は諸君の誠實なる御招待に向て深く感謝するものなり吾人は海運の設備完全し且つ美麗にして清潔なる貴市を訪問したるの名譽を喜ふと同時に貴國人の今般の歡待は吾人か未た曾て他に於て遭遇したること無き鄭重のものなることを言明するに躊躇せず吾人が此の次第を吾　天皇陛下に奏聞し得るは極めて光榮とする所なり今回我軍艦の回航に由り今後益兩國民の關係を親密ならしむることは吾人の最も切望する所にして既に兩國間の貿易は過去五年間に於て長足の進歩を爲し我日本郵船會社が當アントワープ港を以て歐洲最終の寄港地と定めたるに徵するも奈何に兩國民が密接の關係を有するかを證明するに足るべく加之ならず今回我兵員に對して貴國の與へられたる好意は更に貴國人の日本に對

する親交の程度を事實の上に表證せるものにして、吾人は深く之を肝銘し、茲に謹みて國王陛下の萬歳を禱り奉り、幷に諸君の健康を祝するものなり。

日本軍艦の參觀人は雲霞の如くにして、皆其構造の堅牢なることを賞賛するのみならず、口々に其清潔なるを感歎せり。甲板上に於ける水兵は、孰れも懇切に參觀者を案内し、夜に入りて高砂は、艦體の諸所に數千の電燈を點せしかは、光芒空に輝き、水に映して、美觀得も言はれず、夜更くるに迄も海岸一帶に人の山を築き、頗る雜沓を極めたり、之を要するに日本人は元氣滿々たる國民にして、常に孜々として、軍事上商業上の發達に盡瘁し、今回二軍艦の來訪も、一は我れに對して親密の意を表せんが爲め、二は敬意を表せんが爲め、三は自國商業上の利益を增進せんが爲めに外ならず、今や歐洲に於ける外客接待所たらんと期圖しつゝある我アントワープ市民は、須らく彼れの好意に酬ゆる所なかるへからず云々。

是等の賛辭は果して何に因て得たる。嗚呼果して何に因て得たる。

其十一　「ヴヰクトリー」號觀覽

ポーツマス港に遊べる旅客は、其灣奥に當り、大將旗を揭げたる三檣高舷の「ライン」型一巨艦の泛ふを見るへし。是れ即ち世界の歴史に赫々たる光彩を放てる千古の豪傑ネルソンが、五尺の肉塊を國家に捧けて無比の强敵を挫き、以て英國を泰山よりも安からしめたる最後の旗艦「ヴヰクトリー」號なりとす。「ヴヰクトリー」の名は、内外古今を問はず、苟も職を海軍に奉するものゝ腦裡に印象し、彼等の齊しく敬重する所にして、四時觀覽者其跡を絶たずといふ。予も亦豫て一覽の賞望を有したるを以て、偶此地に來りたるを機とし、二三の同僚と共に艦長に陪して此の名譽なる老大艦を訪ふ。已にして舷門に達すれば、案内の任を帶べる下士數名あり、其内の一人、直に予等を導きて先づ上甲板を巡覽せしむ。大砲の配置、艦内の設備、總べてネルソンが戰死當時の現狀を保存し、一見人をして肅然形を正さしむるに足る。上甲板後部の中央に、金屬にて造れる方五寸許りの標牌を付したる個所あり。是れ實にネルソンが敵の狙擊を受けて倒れし所なり。更に歩を移して下甲板に至れば、薄暗き倉庫内なる一室の壁間に、一枚の鐵板を懸吊し、之に「ネルソンの最期」なる一句を題せり。

さては將軍が負傷の後移されて治療を加へやがて敵の大敗を聞きつゝ靜かに瞑目したる場所は此處なりしよ予等を案内したる下士は謹嚴なる態度を以て徐ろに說出して曰く「紳士請ふ熟視せよ我ネルソン將軍は彼處に横はりて氣息淹々將に瞑せんとするに臨み吾れ本分を盡せり之を上帝に多謝す吾れ今本分を盡せり是に由て上帝を讃美すとの一言を遺して逝けり實に彼れの死や光榮なり名譽なり英國は永く彼れの精忠を忘却せざるべく赫々たる功名千載に輝きて死せども猶ほ生けるかごとし斯の如きの偉人復た何處にかある蓋し大英國を擧けて唯一人を發見するのみと彼れの話頭は更に轉して當年の戰況に及びしが熱心の氣眉宇の間に現はれ一語は一語より切に一句は一句より急なり偶予の側に妙齡の一婦人あり彼れの說明を謹聽して感に堪にざるものゝ如く終に手巾を以て花顏を掩ひ歔欷之を久しうするに至る此一事に依て徵するもネルソンの事蹟と「ヴサクトリー」號の保存とが奈何に著大の感化を英國民に與ふるかを推知するに足るへし去て士官室に到れば此處にはネルソン將軍が一代の戰爭を描ける密畫數十面を掲げ別に紀念として其の復寫せるものを參觀者に鬻げり因て予は「ヴサクトリー」號及チルソンの寫眞を聽ひ一行と共に瀛艇に搭じて歸途に就く予は屢にグリーンウィッチ博物館に於てチルソン將軍の遺髮と血痕斑々たる軍服とを實見し今復た親しく「ヴサクトリー」號を訪ひ端なくも此の稀世の海將が名譽の戰死を遂げたる當時の光景に想到して感慨の念禁ずる能はず乃ち茲にトラフハルガーの海戰を摘記して讀者の一粲に供せんとす。

見よ待ちに待ちたる佛西兩國の聯合艦隊は滿帆風を孕みて威容堂々水平線上に現はれたり多年覇を爭ふて相下らざりし英と佛とは勝敗を此の一戰に賭して最後の運命を決せんとす練りに練り鍛へに鍛へて天下無雙と自信せる英國海軍が驚天動地の大奮戰を試むへき時機は來れり。

是より先き歐洲大陸の大半を馬蹄に蹂躙して竟に大皇帝の位に登れる絶世の怪傑奈破翁は獨り英國が强大なる海軍を頼みて己れに抗するを憤り種々の奇計を回らして之を屈服せんと企てしも海上の戰鬪常に失敗に歸して未だ佛國の軍艦旗をテームス河上に翻へすこと能はず「我れに六時間の英海峽の海上權力を得せしめよ英國を粉齏して當に世界の帝王たるべし」との一語は必すし

も彼れが得意の壯語にあらずして、寧ろ煩悶の極に發せる叫聲なりき。されど「不能」の言辭を嚴禁せる彼れの大野心は、打擊を受くる毎に愈劇增し來り、終に畢生の力を盡して、十五万の勇兵、二千三百隻の船舶を準備し、先つ艦隊を四方に派遣して、英國艦隊を他方に誘ひ、其虛に乘じて一躍海峽を越へ以て意の儘に英國を蹂躙せんと企てたり。是時に當り、一國の安危を雙肩に擔ひて立てる英艦隊の提督ネルソンは、不幸にして身體健全ならざりしも、勇氣更に消磨せず、佛艦隊の出港を聞き、莞爾として曰く、佛帝縱しや鬼神なりとも、一海里の外に出づるを許さずと。直に敵艦隊を追ふてジブラルター附近に至り、海門を扼して敵の來たるを待てり。佛西聯合艦隊の提督ブエルナブ、之を聞て憤激一番決戰を期して西國ケーヂス灣を出航し、斯くて兩艦隊端なくもトラフハルガー岬の近海に於て出會したり。

時は西暦千八百〇五年十月二十一日、天霽れ波騷がず、西北西の風微吹して、最も帆走に適す。佛西聯合艦隊は、三十三隻の「ライン」艦、五隻の「フレガット」艦、二隻の「ブリグ」艦より成り、風力を右に受け、北に向て蜿々長蛇の如く進航するの狀、頗ぶる

壯觀を極めたり。ネルソンは旗艦「ヴサクトリー」號の甲板に立ち、遙に敵艦隊の動靜を注目しつゝありしが、やがて「ライン」艦二十七隻、「フレガット」艦四隻を督し、殆と風を背後に受けて二列縱陣を制り、副提督コリングウードをして右方の一隊を指揮せしめ、躬から左方の一隊を率ゐ、兩々相應じて敵陣の中央を突貫せんとし、艦首浪を蹴て進航矢よりも急なり、斯くて兩艦隊は、刻一刻に其距離を短縮し來り、一大慘劇の開演既に數分の內に迫りて殺氣自から四邊に充滿す。ネルソン從容として先づ艦室に退き、正裝を着け、肅然跪て天を拜して曰く、「予が尊崇する上帝よ、願くは我英國に赫々たる大勝を授けて、全歐洲の民を塗炭の苦境より救はしめよ、願くは我將卒をして一人も勝利の光榮を汚すべき怯弱の擧動なからしめよ、願くは戰捷後我軍の事を處する、一に仁慈を以てせしめよ」ネルソンの生命は固より上帝に獻せり、望むらくは微忠を憐みて應護を垂れ給へと、祈禱終りて再び甲板に出づれば、敵艦隊既に眼前に迫り、英軍の意氣將に天を衝かんとす。ネルソン遽に信號兵を顧み、一令を下すや、忽ち數連の彩旗、檣頭高く海風に吹かれて、千載不朽の金言は現はれたり。曰く、英國は各自が其本分の職を盡すを期すと、

全軍之を望んで一齊に喝采し、海上爲めに震撼す。ネルソン微笑を含み、艦長に告けて曰く、予は今や準備に於て些の遺憾なし。餘は一に神意と我執る所の正義とに依頼するのみ。いでや潔く奮戰して、勝敗を一擧に決すべしと。是に於て開戰の命を全軍に傳へ、旗艦「ヴヰクトリー」は一隊の先鋒と爲て猛進したり。是時疾く副提督の旗艦「ロヤル、サブエリン」は、敵の大艦「サンダアンナ」に肉薄し、全砲齊發、一戰にして之れを破れり。副提督意氣軒昂、艦長に云て曰く、我敬愛するネルソンは必ず予が奮戰を賞讃せん。慨らくは之れを聞かざるとをと。ネルソン復た遙に此狀を見て、艦長の背を叩いて曰く、副提督か勇戰の狀を見よ。猛烈獅子の如く、叱咤風生す。眞に一世の快男兒なりと。交情骨肉よりも深く、聞くもの爲めに涙下る。既にして旗艦「ヴヰクトリー」は、遙に敵の艦隊「ブーゼントル」を目掛け、巧に風帆を操縱しつゝ其彈着距離内に挺進したり。「ヴヰクトリー」の突進するを見るや、左右に在りし幾隻の敵艦、悉く之を目標として一齊に發砲し、飛彈縱横に交叉し、海面忽ち硝煙の鎖す所と爲り、砲聲天地を震撼して、萬雷の一時に轟くが如し。英兵死するもの五十餘人、艦體亦大破損を被れり。然れども大に堪へて大に擊つてふネルソ

ンの戰術は、是等の猛擊に對して猶ほ一發だも應酬するを許さず。十五分時を經て、敵の旗艦に接着するに及び、始めて一聲、鋭く發射の喇叭を吹かしめぬ。是に於て滿艦の勇士、先つ敵の砲手を塵殺せんが爲め、彼れの舷窓に向て小銃五百の一齊射擊を試みたり。佛兵此勢ひに辟易して、稍〻發砲を躊躇するや、「ヴヰクトリー」の艦長は機乘すへしと做し、滿面朱を漲ぎ、劍を擧げて一喝號令を下すと齊しく、三彈を重塡せる左舷數十の大砲、一時に轟發して、見る〳〵敵の大砲二十門は微塵に碎け、四百の兵士前後左右に殪れて、骨肉四方に粉飛し、一艦殆と用を爲さゝるに至れり。續て「ヴヰクトリー」は右舷砲を以て他の敵艦「レヴータブル」號に迫り、終に之と衝突して大破に歸せしめ、更に左舷砲を以て他の二敵艦を攻擊す。此の一刹那、戰鬪正に激甚の極に達し、四隻の巨艦は互に密着しつゝ風に隨ふて巴紋の如く旋轉し、彼我共に檣折れ、帆裂け、人死し、砲摧けて、海軍史上未曾有の一大慘狀を現出したり。折しもネルソンは「ヴヰクトリー」號の後甲板に在り、金光燦爛たる軍服に數個の勳章を佩び、劍を杖にして戰況を熟視しつゝありしが、やがて傍に來れる艦長と共に、俄に忙はしく甲板を往復して、兵士を督勵す。時に敵艦の檣樓

上に射擊の名手あり。銃を取て提督を狙擊し。其左肩を貫洞す。左右提督の倒るゝ
を見て。大に驚き急に扶けて治療室に移せり。ネルソン艦長を顧みて曰く。敵奴我
れを狙擊して銃丸脊髓を洞貫す。恐らくは復た起つべからずと。然れども兵氣の
俄に沮喪せんことを慮り。手巾を出たして面と勳章とを蔽ひ。人をして其の提督た
ることを悟らさらしむ。既にして敵兵最後の勇を鼓し。檣桁を「ヴサクトリー」の舷
上に架して襲擊隊を圍入せしめたるも。英兵奮鬪して盡く之を擊攘せしかば。彼
れ終に力盡きて降を請ふに至りぬ。加之ならず。爾他の英艦も亦皆奮戰して敵に
當り。佛西の軍艦十數隻を捕獲したり。是際。治療室に在りしチルソンは。創を忘れ
て切りに戰狀を憂慮し。終に艦長を招見して問ふて曰く。我艦隊中敵に降りて英
國の旗章を汚辱せしものなきかと。艦長答へて曰く。閣下請ふ意を安んせよ。決し
て斯の如き事なしと。ネルソン首肯して更に曰く。予の命終る瞬時に迫れりと。艦
長胸塞りて涙潸々。久しく坐に在るに堪へず。退て復た甲板に趣き。一時間を經て
再び病室を訪ひしに是時ネルソンの傷痛益加はり。辛ふして上帝に感謝の意を
表し得るのみ。左右提督の耳邊に呼んで曰く。戰ひ畢れり。我軍全勝なりと。チルソ

ンは之を聽き。嫣然微笑を含んで終に瞑す。

嗚呼大チルソン死して遺體は倫敦セントポールの塋域に埋葬せられたりと雖も。
其の忠魂と遺範とは。永く英國海軍將士の精神に印象して。死せず。英國軍艦旗をし
て益光彩を世界の海上に赫灼たらしむ。倫敦トラファルガー街頭に屹立せる彼れ
の銅像は。英姿颯爽。惰夫をも起たしむへく。今尚ほ大將旗を揚くる「ヴサクトリー」號
は。志氣を千載の下に皷舞すべし。毎歲紀念日には彩花を以て艦内を裝飾し。彼の「英
國は各自か其本分の職を盡すを期す」との名譽なる旗信を掲揚すといふ。

其十二　戴冠式

一旦延期と爲りし戴冠式も皇帝陛下の御恢復と共に愈八月九日擧行のことと定まりたるを以て予は此盛典を拜觀せんが爲め八日の午前倫敦行の列車に搭してホーツマスを出發したり各地方の旅客雲霞の如く集まりて車中の混雜名狀すべからず既にしてチエリング、クロース停車場に着せしに此處の混雜はまた一層甚しきものありしも由來沈着を以て誇る英人のことて雜沓のうち自から規律ありて割合に困難を感せざりき予は豫て何れの旅館にも空室なきことを聞及ひ居たれば先づ馬車を雇ふて日本人の定宿と聞にたるグラセスター、クアレースのワルトン夫人方に至りしに便乘の陸軍將校及高砂の將校等既に全室を占領して復た一室を餘さず已を得す予及アントワープより便乘し來れる文部省留學生柴崎雪次郎氏の兩名は西川步兵少佐の寢室に同居を請ひ辛ふして露宿の厄を免るゝを得たり是に於て勇氣頓に回復し早速旅裝を改めて一同と食堂に會し關機關長滿坐を見回はして發言すらく予等既に洋食に飽けり因て今夕は主婦に依賴して米飯を炊がせ牛肉の燒鍋を啖ひ以て消磨せんとしつゝある大和魂を養ふては如何同意

の諸君須らく右手を擧ぐべしと言未た終らざるに贊成の聲四方より起り忽ち全會一致を以て右の動議を可決したり間もなく全權大使の重任を負へる機關長及軍醫長が主婦との談判も圓滑に結了し予等の要求首尾能く成立したるを以て速に箸を製造するものあり醬油を周旋するものあり一切の準備整頓してやがて箸を取れば飯粒半熟にして硬きと礫を嚙むが如しされど一人の不平を訴ふるものなく いづれも洋袴をくつろげ眼を据へて此處を先途と競食するさま是れをや靈勇ともいふならん傍に在りし下婢は予等を凝視してたゞ呆然たるのみ。

明くれば今日は愈戴冠式の當日となりぬ平常曇りがちなる天候も今日の大典を祝せんとや心地好く晴れ渡りて處々の寺院より撞き出だす鐘の音は鏘々として嚴肅なる響を傳へ瑞氣都門に滿々たり是日予等は特に英國海軍省の建設せる騎兵聯隊内の棧敷に於て拜觀すべき旨の通達ありければ朝來正裝して宿處を出で地下鐵道に搭して指定の場所に赴けり市街の裝飾は一旦の延期に依て幾分か省畧せられたりと雖も有繋に大英國皇帝陛下が一生一度の大典として大路小路の別なく隙間なく五色の彩旗を懸け聯ね各處の綠門には數万の美花を挿み更に飾る

に金銀、珠玉、綾羅、錦繡を以てし、燦爛旭光に映じて、目も眩せん許りなり。「バッキンハム」宮城より「ウエストミンスター」寺院迄の大道には、今日を晴れと着飾りたる貴女紳士、我れ先きにと馳せ參じて、其數幾千万なるを知らず。地下鐵道、汽車の昇降場は、絶にず人波打て容易に近づくべくもあらざりしが、驛員及巡査の特別なる斡旋に依り、予等は辛ふじて目的の棧敷に到達するを得たり。

大典の式場は「ウエストミンスター」寺院にして、宮城御出門は午前十時三十分と聞に、御道筋の兩側は海陸數萬の儀仗兵隙間なく整列して、今や遲しと待受けたり。間もなく時鐘は十時三十分を報せり。遙か宮城の方に當りて、俄に歡聲の起れるは、先驅の既に現はれしにやあらむ。群衆の動搖は漸々此方に波及し來り、無數の拜觀者が帽を擧げ、手巾を打振りつゝある裡に、行列は徐々として進行し始めぬ。最先には近衛騎兵の喇叭手數十騎、銀甲を着し、赤毛を垂れたる桃實形の銀冑を戴き、喇叭を手にして四騎宛轡を並べ、いと緩やかに打たせたり。續て宮中直轄の軍樂隊、同しく馬上に樂器を擁して、調子を取りつゝ進み行く後には、種類に因りて列を區別せる數隊の騎兵、赤服にして熊皮の帽子戴けるもの、黑服銀甲にして長く黑毛を垂れたる帽子を戴けるもの、皆孰れも逞しき駒に華美なる鞍を置き、姿勢正しく乘出でたるさまは、繪に在る希臘古代の武士を見る心地せり。躍て馬車の行列と爲り、第一車には、アドルフ、フリドリヒ、チフ、メクレンバルグ、ストレリヤ公以下二人、第二車にはエンドロー、チフ、グリース親王以下四人、第三車にはモーライス、チヅ、バッテンバルグ親王以下五人、第四車にはアルバニー公夫人以下四人、第五車にはルイス、チーガスタ、チフ、スクレスウイグ、ホルステン妃以下四人、第六車にはヴサクトリヤ、ハトリシヤ妃以下四人、第七車にはスパータ公夫人以下四人、孰れも二頭の駿馬に牽かせたり。第八車は青毛の駿足六頭にて曳かしめ、丁抹皇太子、三人の皇族と共に打乘られ、之に續きて更に近衛騎兵の一隊進み、夫れより威爾斯皇太子の行列に移り、最初の二馬車には宮內高等官及宮女あり、第三車は即ち皇太子及妃兩殿下の御召馬車にして、群衆の敬禮を受けさせられつゝ、徐々と過き給ひぬ。斯くて其次きに現はれたる一列ころ、是れなむ萬人か待ちに待ちたる皇帝陛下の鹵簿なりける。先驅は近衛騎兵にして、一入華美に裝ひ、肅々と打たせ行く後に續きて、第一車にはアクランド、ホード男以下四人、第二車には陛下の秘書官ノーリイス侯以下四人、第三車には

チャンバーレン侯以下四人。第四車にはナヤーチル子以下四人。夫れより名譽の海陸軍將校數十名。孰れも馬上にて續きたり。就中觀者の注目を惹きしは陸軍大將キチネル海軍大將シーモアー陸軍少將アルフレッドの三將軍か轡を駢べし一列にして。殊にキチネル將軍が例に依て傲然肩を張り體を反らして左右より起る喝采に目も呉れざるに反し較々離れて馬を進むるロバーツ元帥が鶴髪童顔愛嬌を湛へて一々慇懃に答禮を施す有樣。兩々相對して頗る奇觀なりき。次きは印度貴族の一隊にして。是れ亦四騎宛一列と爲り。孰れも長身肥滿にして。顏色漆の如く。黃巾を以て頭を包めるあり。白絹を額に纏へるあり。思ひ〳〵の彩袍に金絲の刺繍を施せる寬服を着け。大刀を横へて肥馬に跨り。悠々と打たせ行く風采は。四邊を拂ふて異彩を放ち。群衆皆口々に「名譽なる印度貴族よ」「立派なる風采よ」と稱讃し。拍手の音暫時は鳴りも止まさりき。其他各殖民地の總督及武官等。孰れも任處に從て服制を異にし。金裝銀飾燦然として。眞に天下の一大美觀を極めたり。驚破や大不列頓國皇帝、皇后兩陛下の鳳輦は來れり。其形恰も我邦の神輿に四輪を添へたるが如く。全部金色にして。雪白の駿馬八頭。何れも瓔珞を懸け。盛裝を凝して之を曳き。輦中には兩陛下純白の式服を着し。龍顏微笑を含み給ひて。絶にず群衆に御會釋あり。兩側の儀仗兵は一齊に銃を捧げ。直立正視して動かざると石像の如く。何處ともなく「神護王」の唱歌起りて。幾十萬の群衆盡く森嚴の氣に打たれ。感極りて涙を垂るゝものあるに至れり。嗚呼嚮には皇帝陛下御不豫の爲め。空前の大盛典も一時延期の已むを得ざるに至り。英國の臣民擧つて眉を顰め失望落膽限りなかりしに。陛下の御病患も左程のことなく。今日計らず此の壯嚴なる儀列を拜觀することを得。英人の狂喜するは固より其所にして。予等外臣も亦滿腔の熱血を捧けて陛下の萬歲を三唱し。英國の幸運を祝せずんばあらざるなり。鳳輦の後には猶ほ貴紳を載せたる幾臺の馬車絡繹として從ひ。順次進みて「ウエストミンスター」寺院に到着し。斯くて兩陛下には「カンターベリー」の大僧正より王冠を受けさせられ。儀式滯りなく終りて宮城に還御あらせられたるは。午後三時の頃なりき。

儀列の通過し終るや。予等は直に棧敷を降り。歸路に就きしが。途中到る處。肩摩轂擊。其混雜名狀すべからず。然れども予等同盟國人たるの故を以て。英國將校は特に好意を表し。儀仗兵整列の場所と雖も隨意に列内を通行せしめ。又紳士貴女は「親愛な

る日本將校よ」と呼んで手巾を振り、花束を投げ、甚しきは予等の肩を叩て祝聲を揚け、人毎に通路を開きたれば、予等は苦もなく歩を進むるを得たり。薄暮、歸館して夕食を喫し、終日の疲勞を慰せんが爲め、一睡の夢を貪りたる後、再び市中の夜景を一見せんと欲し、仕度も匆々に旅宿を立出でしが、街上の雜沓亦も甚間に劣らず、軒を並へし大厦高樓、孰れも電氣飾花を施し、多きは數万、少きも數千に下らざる球燈を聯ね、劇場にては鹵簿及式場の活動寫眞を示し、煙火を揚げ、音樂を奏し、舞踏を試み、道行く男女は聲を揃へて國歌を唄ひ、滿都忽ち天國に化したるかと疑はる夫れも道理や、今日の盛典を拜觀せんが爲めに、一日間數千金乃至數百金を投じて、僅に一窓口を借入れたる者も尠なからざりし程にて、旅客の四方より入込みたる者幾十萬、市内は豪奢の競爭場裏と爲り、ハイド公園附近の如き、夜を徹して雜沓を極めたりといふ。

本日の戴冠式に、公使館附武官以外の外國將校にして式場に參列したるものは、實に我司令官の一行ありしのみ、亦以て英國政府が奈何に我れに對して深厚なる同情を有するかを知るに足らん。

其十三　大觀艦式並英國出發

始め我艦隊のアントワープよりポーツマスに回航するや、八月一日、洋中に於て端なくも海上保養の爲めに御出遊ありし皇帝陛下の御召艦に邂逅し、式の如く二十一發の皇禮砲を放ち、登舷禮式を行ひて三回の祝聲を揚げしに、御召艦は近く我右舷を通過し去り、我れは直にポーツマスに投錨したり。越へて四日、我司令官は御召艦に伺候し、親しく兩陛下より謁見を賜はりしが、承る所に據れば、其際、陛下には海軍元帥の軍服を召され、皇后陛下も御同席にて、我司令官に向はせられ、「今日は英國皇帝と日本司令官との會見にあらずして、同盟國の二將官が互に胸襟を開きて懇話するの席なれば、萬事打寛ぎて決して隔意あるべからず」と詔らせ給ひ、特に席を賜はりて種々の御物語あり。然も其謁見中は室内に一人の侍臣だもあらざりしといふ。翌日、御召艦はポーツマスを出港するに當り、再び我艦隊の近傍を通過せしかば、我艦隊は例に依て定式の禮砲を放ち、登舷禮式を行ひて祝聲を揚げしが、其際、御召艦には前回よりも一層近く本艦の右舷を進航せしを以て、予等は明かに兩陛下の玉躰を拜觀するを得たり。

大觀艦式は八月十六日と確定せしも、猶ほ十數日の餘日あるを以て、未だ一艦の當港に入泊したるものあらざりしが、七日に至り、英國海峽艦隊十七隻は東方より、又留守、巡洋兩艦隊十二隻は西方より、孰れも單縱陣を制りて、入港し、旋轉して半速と爲り、旗艦の一令の下に二十九隻の大艦一齊投錨を行ひ、然も其熟練なる、一隻として豫定の位置を誤りたるものなく、間隔宜きを得て序列整然たりしは、吾人の感歎措く能はざる所なり、戴冠式の當日、即ち九日には、在港の各艦盡く滿艦飾を施し、正午、皇禮砲を放ち、夜に入りては、電氣飾火及色光探海燈を點したり。

我艦隊は、當港在泊中、例の如く市長其他より頻々招待を受け、乘員一同繁忙のうちに日を送りて、今日しも愈〻觀艦式の當日となりぬ、空を仰けは碧天拭ふが如く、風波收まり、百餘隻の艦艇數列に別れて、其碇泊區域數海里に渉れり、己にして午前八時を報すると同時に、各艦一齊に滿艦飾を施したるを以て、數萬の彩旗水に映して海面錦を漂はすかと疑はれ、汽船に搭して海上を往來する無數の見物人は、此狀を見て、拍手喝采、暫時は鳴りも止まざりき、昨を放ちて碇泊位置を見渡せは、第一列は、驅逐艦三十二隻、第二列は一等巡洋艦三隻、二等巡洋艦一隻、三等巡洋艦二隻、水雷砲艦十五隻、「スループ」及「ブリグ」七隻、第三列は一等戰艦八隻、一等巡洋艦四隻、二等巡洋艦七隻、二等戰艦一隻、第四列は一等戰艦二隻、一等巡洋艦三隻、二等巡洋艦四隻、三等巡洋艦二隻にして、更に之を艦種に依て區別すれは、

一等戰艦	十七隻
二等戰艦	三隻
一等巡洋艦	拾隻
二等巡洋艦	拾二隻
三等巡洋艦	四隻
水雷砲艦	拾五隻
驅逐艦	三十二隻
「スループ」及「ブリグ」	七隻
合計	百隻

之に第五列なる我淺間、高砂及伊艦一隻、葡艦一隻を加ふれは、實に百四隻の多數にして、海軍大將ホータム氏、二中將、三少將及一代將を率ゐ「ロヤル、ソベレイン」號に乘

坐して之が總指揮に任ず午後二時御召艦は五隻の小艦を前後に隨へて艦隊碇泊地より程遠からぬカウスの錨地を發し帝旗を檣頭に翻へしつゝ徐々として進航し來れり御召艦の來着せるを見るやロンドン號は檣上高く一連の信號旗を揚げしが諸艦之を見ると齊しく登舷禮式を行ひ神護王の英國々歌を吹奏し尋て一齊に二十一發の皇禮砲を放ちたり其響轟々として百雷の落つるが如く雲霧湧き電光閃きて壯絶壁ふるにものあし斯くて御召艦は先づ第二列第三列の間を西より東に通過し轉して第四第五兩列間を東より西に進み更に第三第四兩列間を西より東に還航し終に第五列の外方を旋りて列中に入り其西端に投錨したり御召艦通過の際我艦隊は他艦と同しく奉拜を三唱し各將校は正服を着け一同後甲板に整列して最敬禮を行ひぬ斯の如くして是日の閲艦式は了れり

古來の傳說に據れば激しく空砲を發したる後には必ず大雨來るとゝれかあらぬか閲艦式の終る間もなく今迄晴れ渡り居たる一天驟に掻曇りて午後八時の頃より大雨沛然として至り電光閃々闇を射て迅雷屢天に轟きいとゞ物凄しき天候とはなりぬされど今宵は電氣飾火を催ふすべき豫約あるを以て降雨の少しく收まるを待ち先つ御召艦より打揚げし一發の火箭を合圖に百餘隻の軍艦一齊に電氣飾火を點したり我淺間一艦の點火數のみにても實に二千餘個に達したる程なれば其全數は殆と十萬の上に出つへく數里の海面輝々として滿天の星辰一度に落下せる如く遠きものは金沙を黑板に散せるに似たり加之ならず陸上に於ても亦絶間なく諸處に煙花を打揚げたるを以て一府の壯觀を極め歡呼の聲拍手の音奏樂の響相混合して耳を聾せん許り實に此の瞬間こそ英國の黃金時代とや言ふへき忽焉として滿目の飾火消に忽焉として彩光探海燈は點せられぬ磨墨流がす雨雲を劈て紅や紫や黃や青や綠や色さま〳〵の大電光或は直射して天に冲し或は横さまに海を射り或は合し或は離れ乾坤盡く錦に包まれたるかと疑はれ美觀名狀すへからす沙翁の艶筆巢林子の美文を以てするも到底實況の百分一たも描出すると難かるべし已にして午後十一時半に至り各艦更に二十一發の皇禮砲を發射し十二時を以て全く式を了りたり是日林公使澁澤男爵後藤臺灣民政局長官以下五十餘名の本邦人並に日本協會幹事長デオシー氏造船家ヤロー氏等の英國紳士及貴婦人二十餘名は我淺間に於て此盛典を拜觀したり

越へて十八日には、大艦隊運動擧行の筈にて、其豫定に據れば、先づ御召艦出て、港外に停まるや、海峽留守、巡洋の三艦隊は、二列縱陣を制り、全速力を以て御召艦の左右側を急航し、外方に旋回して更に之に近づき、各艦艦首を內方に向け、兩列交互に入違ひて、全く其位置を換へ、再ひ御召艦の左右側を過きて、復た內方に旋回し、三たび其側を通過して、皇禮砲、登舷禮式及祝聲三唱を行ひ、又外國軍艦は先任艦の指導に從ひ、御召艦の後方に至りて假泊し、英艦隊の運動終ると共に、拔錨して、御召艦の側を航過し、同下く皇禮砲、祝聲三唱を行ひて、全く今回の觀艦式を終るに在り、然るに夜來の風雨尙未だ收まらず、波濤澎湃、海面濛々として、到底活潑なる運動を試むる能はず、是故に英艦隊は、單に二列縱陣にて、一回御召艦の左右側を急航し、最敬禮を行ふのみに止めたり、既にして豫定の時刻至るや、三十餘隻の艦艇は、一齊に拔錨して間隔を縮め、十二海里の速力を以て、猛雨を衝き、巨浪を蹴て、急航せり、其狀極めて、壯快にして、深く陛下の御心に協ひしと見に、即坐に御賞讃の信號あり、英艦隊の運動終るや、我艦隊は先任將官の坐乘せる伊國軍艦の航跡を追ふて出港せしか、伊艦は錨具に故障ありと覺しく、進行甚だ遲々たるを以て、我司令官は期を失はんこ

とを恐れ、斷然伊艦に代り、淺間、高砂及葡艦を指導して前進し、やがて御召艦に近づきて最敬禮を施せしに、御召艦より「皇帝は貴艦の觀艦式に列せるの勞を謝し、安全なる歸航を冀ふ」との信號あり、我れは更に英艦及葡艦に對して「告別」との信號を揭げしに、彼れより「良き航海を祈る」と答信し、茲に我艦隊は諸艦と別れて、愛蘭のコーク港に向ひ出發したり。

ポーツマスを辭したる我艦隊は、先づ愛蘭の南岸なるコーク港に回航して、乘員一同折しも開會中なる博覽會を一見し、更に英蘭に皈りて、其西岸に在る世界屈指の石炭輸出地たるカーヂフ港に投錨す、前者は頗る風景に富み、英國の松島とも稱すべきキカニーの勝地亦其附近に在り、爲桂に鎖されたる古城や、連寄する清池や、處々に散在して、風流の士遙々此處に杖を曳けとも、英蘭に比して人民生活の度著しく低く、人種亦稍相異なるを覺にたり、其港は四周に高丘あるを以て、大概の風波は凌くに足るへきも、人工を加ふると掛く、然も潮流頗る急なるか故に、決して完全の錨地と云ふべからす、其博覽會亦見るに足らさるなり、後者は石炭の名所にして、炭船の出入每歲一萬隻に達し、加ふるに製鐵所ありて、盛に鋼鈑を製造し、其他尙は數

個所の船渠さへ備はりて。市民頗る富有なりと雖も。惜むらくは船渠に通する一條の航路の外。海底概ね淺きに過きて。船舶陸岸に接近する能はず。加之ならず。潮流急にして潮竹差三丈に及ふが故に。自國の軍艦すら來泊すると稀れなりといふ。是等の事情よりして市民の我艦隊を遇すること一層懇切を極め。或は園遊會を催ふし幾百の貴女盛裝して我一行を歡迎するあり。或は我兵員を酒樓に請して手厚き饗應を爲すあり。殊に司令官上陸の際の如き騎馬の警官十數名其前後を警衛し。市民通路の兩側に埒を造りて。其内に見物するなど。宛然我維新前に於ける諸侯の通行を偲はしめぬ。斯くて八月二十七日に至り。司令官は汽車に搭して倫敦に赴き。海軍省を始め我公使館其他を歴訪して。九月一日發途の旨を告け。併せて滞英中の厚待を謝し。二十九日を以て本艦に歸着せり。是に於て我艦隊は石炭其他の需品を積入れて航海準備を整へ。發するに先たち。紳士貴女數百名を艦内に招待して告別の宴を張り。終に九月一日午前五時。錨を拔てカーヂフを出港し。茲に始めて歸朝の途に上りぬ。屈指すれは六月十日プリマス到着以來。日を重ぬること八十三なりき。

予等大命を帶び。遥々英國に渡來して空前の盛典に列するの榮を得。傍ら幾たびか社會の各方面を視察し。又屢〻知名の士に接して。親しく其言動を見聞し。心に得る所尠なからず。倫敦の繁華や。工藝の發達や。海軍の整頓や。孰れか吾人の豫想せる所のみ未だ深く奇とするに足るざるはなしと雖も。畢竟是等は吾人の注意を惹かざるなり。予か英國に就て感歎措く能はざるものは自から他に存す。曰く。國民の忠實心。曰く。國民の公德心。即ち是れなり。請ふ予をして少しく之を說しめよ。

「吾人は吾人の義務を忘れず。將軍願くは心を安んせよ」とは。是れウオートルローの激戰の際。一英兵がウエリントンに答へし言辭なり。此一語や。言簡なりと雖も。餘蘊なく英人の特性を發揮せるものにして。英國の生命繫りて此一語に在りと謂ふへし。彼等既に義務を忘れず。故に其職を見る頗る忠實なり。彼等の職務を執るや。一意專心勵精して他を顧みず。飽迄も研究し。飽迄も錬磨し。遂に他の會得すへからざる妙所を發見して。以て無上の名譽。唯一の快樂と傲す。彼等は決して僭越なる野心を抱きて。妄りに不平を唱へ。或は他人の業務に干渉して。喧々囂々。社會の秩序を紊るが如きことなし。予等の始めて英國に到着せし頃は。南阿戰爭辛ふゝて終結を告げたるの際なりしが。英人は幾年の久しき毎週約三千萬圓宛の鉅費を消耗し。幾多の

壯丁を異域の鬼と化せしめたるにも拘らず軍職に在るものゝ外付て戰爭を口にする者だもなく商人は商を勵み技工は工を勉め農夫は農を怠らず各人各個盡く其職に勵精して泰然自若たる所有繫は大國民の襟度轉た欽慕に堪へざるものあり彼の一家をさへ修め得ざるに妄りに憂國者を標榜して突飛なる慷慨悲憤を爲すが如きの輩は英國に於て之を見ると甚だ稀れなり彼等は輙く怒らず輕々しく喜ばず沈着にして自信の念厚しされば日英同盟の如きに對しても表面上の所謂御祭騷ぎをこそなさゞれ官民擧つて誠意誠心を以て我れを遇するの狀如何にも奥床しく我國民たるもの深く彼れに鑑みる所なくんばあらざるなり

英人は亦頗る公德心に富めり是れ蓋し宗教上の制裁と家庭の嚴格なるとの致す所にして苟も紳士の作法に違反するの行爲ある者は忽ちに他の擯斥を受くること恰も我封建時代の武士道の如く從て思想甚た高潔にして自から其獨を慎むの風あり聞說く曾て陛下御不豫の爲め戴冠式の延期となりたる當夜バッキンハムより數哩を隔てし或教會堂に於て二千の聽衆の面前に立ち熱血を濺て大演說を試みたる一老媼ありしことを其演說に曰く「今日大典の延期と爲りしは是れ畢竟

上帝の我英國民に警戒を下されたるものにあらずして何ぞや今や我英國は世界に雄飛し尨大なる殖民地を有して幾多の異人種を統御し居るも是れ果して人類を幸福ならしむるの目的に出でしか世界の文明を進めんが爲めに出でしか若し夫れ自國の利益のみに着眼して他國を併呑せしとならば其行爲や上神意に背き下人類に寸益なきものなり古來奈何なる大國と雖も斯の如くにして亡びざるものあることなし冀くは諸殖民地の異人種に與ふるに英人同等の權利と自由とを以てせよ人は欺くへし神は欺くべからず英人さるもの今日の神慮に鑑み須らく猛省する所あれ」と嗚呼何ぞ其思想の高尚にして論旨の正大なるや然も聽衆中には學者あり富豪あり官吏あり政客あり孰れも眞理の聲として肅然之を謹聽したりといふ予は信ず英人にして這般の公德心と忠實心とを喪失せざる限り英國は永遠に今日の威勢を失墜せざることを我國民願くは此同盟國人の長所を採るに努めよ

其十四　歸航の一

九月一日英國カーヂフ港を出發せる我艦隊は日々諸操練を行ひつゝ五日午前葡萄牙の首都里斯本府に投錨せり。航程八百六十一海里にして四日と六時間を費ぬ。

里斯本は葡國の西岸なるテーガス河口より約七海里の上流北岸に在り。丘陵に沿ふて市街を建設したるを以て平坦の個處少なく。家屋は概ね不規則なる坂路を挾みて駢列せり。目下の人口は三十萬なりといふ。此地や。三百餘年以前(我天正年間)我大友宗麟、大村純忠、有馬義純等諸侯の使節。相前後して羅馬法王聘問の爲め。遠く喜望峯を迂回し。約三個年を費して始めて上陸したる處なり。案ずるに。日本に渡來せる最初の歐洲人は。實に葡萄牙人にして。鳥銃を傳へたるも亦彼れなりとす。(天文十年即ち西暦千五百四十一年)嗚呼往て世界の海上權力を一手に掌握し。東洋の商權を左右せし彼れも盛衰の理を免るゝこと能はず。何時か榮華の夢覺めて國運日に衰へ。今や人民に活氣乏しく。市内の光景亦何となく物哀れなり。

碇泊は中一日なりき。予は西川歩兵少佐と相携へて市街を巡覽し。行く〳〵海岸に至りて一大樹下に息ひ。仰きて王城を瞻俯して港内を臨み。當年の歴史を談して轉た今昔の感に堪にず。更に起て徘徊時を久しうせしが。偶司令官及兩艦長正服を着して馬車を驅り。馳せて予等の側を過ぐるに遇ふ。蓋し國王陛下に謁見せるの歸途なり。乃ち其後に尾して海岸に至り。水雷艇に搭して歸艦せり。

我艦隊は九月七日を以て里斯本を出發し。進航すること八十餘海里にして。去る六月六日。水葬に附せる二等機關兵金田福之丞の靈を吊祭せんが爲め。兩艦單横陣と爲り。暫時機關の運轉を停止して。吊魂祭を行ひ。夫れより前進して。翌八日トラフハルガーの古戰場附近を通過し。左轉して針路をジブラルター海峽に取り。正午到達して防波堤外に投錨す。

予は前章に於て既にジブラルターに就て多少の文字を臚列せしが。今復た茲に之を再説する所あらんとす。

海峽の北端。港灣の東側。一個の半島ありて海中に突出す。是れ即ちジブラルターの要害にして。數丁の中立地を隔てゝ西班牙の本土と相對し。南北二海里四分の一。東西四分の三海里。海面を拔くこと千三百九十六呎。一言を以て形容すれば。全島一巨

巖より成れりとも言ふへく、東北側は斷崖峨々として削れるが如く、北西側は較々緩なる傾斜を爲し、英國の政廳は此の崖下に在り、數千の守備兵、二万の市民、亦此處に居住し、街路廣からざるも、極めて清潔なり、然れとも地質磽确にして、滿地砂礫なるを以て、泉源なく、井水なし、是故に諸處に貯水池を造り、之に頼て樹木の培養を圖り、今や山腰一帶矮樹の青々たるを見る、灣に向て三個の防波堤あり、又南端の内方に、目下三個の船渠を建造し居れり、其他諸般の設備整頓して、眞に地中海の一重鎭たるに背かず、宜なり、曾て佛西聯合軍が、四年の攻擊を以てして終に拔くを得ざりしことや、予は一日兩艦の副長と共に上陸して、先つ建造中の船渠を一見し、更に馬車を雇ひ、中立地帶を越へて西班牙領に入り、闘牛場其他を遊覽して英領に歸來せしが、予は今兩者を比較して、其差異天地霄壤も只ならざるを發見し、一國强弱の岐るゝ所以、決して偶然にあらざることを感したり、試に八百米突に渉れる中立地帶の兩端に在る哨兵を見よ、英領に在るものは規律嚴肅にして、番哨は常に銃を肩にし、絶にす一定の場所を徘徊しつゝ、予等を見れは直に敬禮を行ふに引換へ、西班牙の番兵は銃を拾てゝ喫煙するあり、婦女に戯るゝあり、假睡するあり、予等を見るも元より一人の敬禮を表するものなし、加之ならず、彼等は英兵の萬事に寛大なるに反し、偶哨線を通過して其領内に入らんとする者あれは、嚴しく誰何して衣嚢中迄も搜索せずんば止まず、其擧作如何にも暴慢にして、寧ろ憫笑に堪にざるものあり、道路は修繕屆かずして、凹凸多く、家屋亦皆不潔にして、一種の臭氣鼻を打ち、不快云ふべからず、之に反して、英領は街路坦々砥の如く、樹木處々に繁茂して、家屋亦頗る美麗なり、嗚呼僅に一帶地を隔てゝ文野の兩面を見る、復た一個の奇觀なりと云ふへし、已にして予等一行は馬車を下り、英國の一下士に導かれて、山上なる砲臺に向ふ、市街の盡くる處に一大巖山あり、之を穿ちて隧道を通し、長さ十丁許り、登るに從ひ路益急にして、岐路四方に別れ、處々に砲門を鑿開して、其數幾百なるを知らず、或は灣に臨み、或は陸方面に向ひ、一高一低、さながら蜂の巣の如し、更に砲門より下瞰すれは、懸崖百丈、急下して鳥も翔りがたく、中立地帶の邊、半島瓢の如く括れて、道行く人馬、豆よりも小なり、予等は一巡の後、隧道を出て、歸途、トラフハルガーの海戰に於て戰死せる英兵數百の墓を弔し、薄暮、本艦に歸着したり、

シブラルターの碇泊も中一日にして、十日の午後五時、我艦隊は錨を拔て伊太利の

ネープルス港に向ひ。途中地中海上に總端舟を卸して水兵の健腕を試み。又水雷發射を施行して。海若を驚かし。其他火災操練や。合戰準備や。內臟砲射擊や。種々の操練を行ひつゝ。九月十五日ネープルスに到着したり。此の航程九百八十九海里にして四日と二十時間を費しぬ。

ネープルス港は伊太利の西岸に在り。東北東に向て灣入すること十七海里。港內廣濶にして海底深く。如何なる大船と雖も直に陸岸に接近することを得へし。然れども南西風强吹する時は。狂浪怒濤灣內に侵入して。往々船泊に危害を加ふることあり。之を同港の一缺點と爲す。曾て。ポンペー全市を埋沒せしめたるヴエスビアス活火山は港の東側に聳立して。山頂今尙絕ヒす煙を吐き。其山麓には樹木蓊鬱たる間に白堊の家屋隱見して。風光頗る佳なり。市街は北東岸に在りて現住五十餘萬人。海岸には大厦高樓軒を並へ。港內には大船巨舶錨を沈め。實に伊國唯一の大市場たるに愧ちず。又此地に諸官衙及造船所。造兵廠あり。其他離宮。公園。博物館。寺院等見るに足るべきもの。尠なからず。港內には數條の防波堤突出し。「セントヴヰンセンゾー」堤は東方に走ること千二百碼。「カヴサリニヤ」堤は南方に突出づること七百二十碼にして。其終端更に二岐に分かれ。一は西微北の方位に二百九十碼延長し。他は南方に二百六十碼曲出して。「セントヴヰンセンゾー」堤と相對し。中間の港口約六百碼なり。

當港の氣候は。九月より十二月迄の間溫和にして。恰も本邦の春季の如く。二三兩月間は東風吹荒みて寒冷を覺ゆ。氣溫四十度以下に降ることあり。又七八月は酷暑の期にして。八十度以上に達すといふ。

我艦隊は防波提外に投錨し。禮砲及訪問の交換例に依て例の如し。當時偶〻露國海軍少將クリーゲル氏「モノマーク」號に坐乘し。小艦二隻を率ゐて在港し居たるを以て。我司令官は時を移さず。露將を往訪し。彼れも亦直に答禮の爲め本艦に來れり。

九月十七日は。今を去る八年前我聯合艦隊か。淸國北洋艦隊と黃海に奮鬪して。大捷を得。大局の勝敗を決したるの當日にして。吾人の長く忘るべからざる紀念日たり。我艦隊は此の好紀念日を祝さんが爲め。同日を以て端舟競漕其他の餘興を擧行するに決せしかば。其前日兩艦共に練習の爲め端舟を卸し。艇員を撰拔して。港內を漕き回らしめぬ。當日は最後に兩艦の士官競漕を催ふすへき豫定なるを以て。子も亦練習の爲め自から舵手と爲り。中少尉の靑年將校六名を撓手とし。夕食後艦長艇に

乘し。ヴエスビヤス山の麓を指して漕ぎ出せり。

「ネープルスを見ざれば死すとも瞑せず」とは、歐洲人の常に口にする所にして、彼等は實にネープルスを以て歐洲第一の勝地を傲し、就中仲秋三五の夜を以て絶景中の絶景と稱せり。恰も好し、今宵は其日に相當し、殊に滿天拭ふが如く、復た一片の雲影だも留めず。遙に東方を仰けば、四千二百六呎のヴエスビヤス山は裳を長く海上に曳きて、一抹の淡靄、山の中腹に搖曳し、縷の如き噴煙、山頂より立昇りて、黑龍天に躍るかと疑はる。更に西方を顧みれば、落暉は遙峯の一角に餘光を留めて、半天紫紅を流し、其反映中に夢の如く立てる丘上の古城は羅馬全盛時代の名殘を示して、坐ろに游士の感慨を促さしむ。少焉ありて團々たる玉兎、ヴエスビヤス山の一角より現はれ、穏かに清光を投けて、遠近の景物悉く銀色を帶び、瑠璃の如き海面遙に空に接して、滿目玲瓏、波靜かに、風死して、金龍跳らず、遠く款乃の聲する邊、漁火點々將に水を燒かんとす。予は生來未だ曾て今宵の如き壯快の舟遊を試みたるとあらず、塲處は名に負ふネープルスの海上、舟中の人は皆是れ未來の將軍を以て自任する血氣の青年將校なり。赤壁の舟遊何かあらん、只予に蘇子の文章なきを憾むのみ。

翌十七日早朝、總員軍服を着して分隊點檢の位置に整列するや、艦長は肅然として黃海戰勝後聯合艦隊司令長官に賜はりたる勅語並に平和克復の際陸海軍に賜はりたる勅語を奉讀し終りて「君か代」を吹奏し、奉賀を三呼して式を卒う。續て靖國神社の遙拜式を擧行したり。是より先き、本艦の横濱を發するや、予は艦長より毎日曜日に下士卒を集めて精神教育の講話を爲すべきの命を受け、爾來絶にす之れを試みつゝありしか、今日は黃海々戰の紀念日なるを以て同海戰に關する講話を演せんと欲し、遙拜式の終ると同時に兵員の龜鑑と爲すに足るべき二三の逸話を演述したり。生來訥辯なる予の元より聽者の感情を動かすべくもあらねど實境に臨める予自身は却て當時の光景目前に彷彿として感慨胸に溢れ、坐ろに涙の落つるを禁ず得ざりき。臆ひ起せば、既に八年の昔となりぬ。時は明治二十七年九月十七日、日清兩國艦隊の間に演ぜられたる海戰は、如何に激烈にして壯快を極めしよ。火彈怒號して海波沸騰し、鮮血迸る處、潮水爲めに紅を漂はせり。此際是時我幾千の兵士は旭日旗の下に奮鬪し、從容として一命を我　大君に捧げたりき。旅艦松島の一兵士は、殆ど其誰れなるやを解し得ざる迄に全身火傷を負ひ、氣息奄々たるにも拘らず、

深く司令長官の安否を憂慮し、左右に問ふて其恙なきを知るに及び、一聲萬歳を叫んで瞑目したるにあらずや、橋立の廣重兵曹は、半面を敵彈に碎かれつゝも、尚自若として其職を續け、交代者の到るを待て始めて斃れゝるにあらずや、嗚呼斯の如きの勇兵士、世界萬邦復何れの處にかある、鬼神若し知るあらば、又正に其壯烈に泣くへし、烏兎匆々、今や世人の此海戰に對する觀念、年と共に薄らぎ行きしも、試に一考せよ、日清戰爭は黄海々戰に依て大局定まり、一轉して帝國の大飛躍と爲り、日英同盟と爲り、延て今回の艦隊派遣となりたるものにして、是れ皆戰死者が鮮血の賜ものにあらずや、諸子豈くは安んして地下に瞑せよ、聖壽愈萬々歳にして海軍益、整備せり、一朝緩急あらば、滿艦の兵士、必ずや諸士に傚ふて我軍艦旗を汚すもの一人もあらざるべし、諸子決して世人の健忘を悲しむこと勿れ、諸子の芳名は振天府の御記帳に留まりて、長く　至尊の叡覽を辱ふすべきなり

午後は豫定の遊戯に移り、端舟競漕、角力、擊劍、柔道等、兩艦の兵士、交々優劣を爭ひて、薄暮に至り、夕食後、更に演劇を開始したり、見渡せば後甲板上「ビスケット」の函を並べ、其上に板を敷きて舞臺と爲し、花道より大道具、小道具に至る迄悉く整頓し、旗を

以て引幕に換へ、正面に淺間座と題せる額面を掲げあり、外題は何ぞ、曰く、忠臣藏、曰く、天神記、曰く、鎌倉三代記、演ト去り演ト來て床の淨瑠璃亦頗る巧みに、時としては勘平か熊の如き毛脛を露はし、時姫が古木の如き兩腕を出だすなどの滑稽、寧ろ愛嬌を添へて、喝采湧く許りなりき、幕間の餘興として、手品、足藝等を演せるが中に、最も喝采を得たるを、幕僚筆記某の劍舞と爲す、彼れは柔道の稽古着に小倉袴を着け、鉢卷を爲し、大刀を横へて、徐々場の中央に進み、先つ兩腕を拱き、天を仰て一聲高く、「將星夜墮湊川隈」と、枕山詩伯が一世の傑作小楠公を吟し出せしが、漸く進みて「楠氏子あり勇比なし」の一句に至るや、一刀忽ち鞘を拔けて、金蛇坐上に閃き、高く打ち、低く拂ひ、右に開き、左に飛ひ、電光及に映して、晃々たる光輝、人目を射る、詩句は今極感に入れり、「百四十人」齊しく節に殉し、誠忠凛々、天日を貫く」と、吟者は刀を捨て、膝を折て、左手背を打ち、右手を擧げて天を指差せしが、彼れの聲は頗へ、眼中異樣に耀き、悲壯の氣、聽者の骨に徹して、滿坐寂然、一人の聲あるものなし、彼れは再び起て吟聲朗々、終に「嗚呼公の死や眞に惜むへし」と結ひ、一揖して場を下れり、斯くて餘興全部を演了せしは、時鐘の夜半を報する頃なりき。

翌日。予は艦長に陪して水雷艇に乘し。ヴエスビヤス山麓を旋りて。進むこと約五海里。やがてポンペーの海岸に達して。全市埋沒の跡を吊ふ。抑ポンペーは。今を去る千八百二十三年の昔。即ち我景行天皇の九年。ヴエスビヤス山の大噴火に依り。全市土灰中に埋沒せるものにして。二百餘年前始めて之が發掘に着手し。今や漸く其半面を露出するに至りしが。引續き目下尙數百の人夫盛に發掘に從事し居れり。今其發掘の跡を見るに。人類其他犬猫等の動物は言ふ迄もなく。麭包。菓子の類に至る迄。依然舊形を存せるまゝに化石し。殊に人類に至ては。一見慘鼻に堪にざるものあり。例へば兩手にて面を掩へるもの。愛兒を抱けるもの。或は姙婦あり。或は稚兒あり。或者は寢臺上に倒れ。或者は廊下に俯し。其狀千差萬別にして。奈何に當時の噴火が猛烈にして且つ急激なりしかを推想せしむ。其他宏大なる大理石の彫刻物や。壯麗なる家屋や。孰れも精巧を極めさるはなく。就中二千餘人の多衆を容るゝに足る大劇場の如き。建築裝飾兩ながら巧妙にして。當時に於ける人智の發達眞に驚駭の外なく。歷史家の好資料と謂ふへきなり。

二十日。予は副長と共にネープルス市に上陸し。博物館。公園。水族館等を歷覽す。有繁に美術國たるの名に背かず。何れも趣味に富み。殊に博物館に陳列しある古畫。彫刻物の如きは。世界美術家の垂涎措かさる所なりといふ。然れとも市内乞丐兒及無賴漢多く。英國を游歷し來りたる予等は。其煩に堪にすして頗る不快の感を生じたりき。

我艦隊の碇泊は殆ど八日間に及びぬ。此間司令官は幕僚及兩艦長を隨へ。羅馬を經て伊國の北部なるチユリン市の離宮に赴き。皇帝陛下に謁見したり。承はる所に據れば。其際陛下には。司令官一行を御引見後。親しく輕車を取し給ひ。唯我司令官一人のみに御陪乘仰付られ。尙兩艦長。大山公使等は他の馬車にて隨行し。宮城内の深林及池畔に御案内あり。車中。司令官に向て。種々の御下問ありしといふ。又艦内に留まりたる予等は。日々市内の紳士貴女と交際し。或は艦内に來れる行商より名物の油畫を購ひ。或は市内を散策して。美術繪葉書を蒐集し。或は古代の建築物及城趾を訪ひなどして。二十三日に至りしが。我艦隊は終に此日を以てチープルスを辭し。ポートセッドに向て出發したり。

其十五　歸航の二

伊國チープルス港を出發せる我艦隊は例の如く日々諸繰練を行ひつゝ千百七十七海里を航して三十日埃及領なるポートセットに着せしが折しも此地方一帶虎疫頗る猖獗にして海羅府の如き多き時は一日數千の新患者を出だすと聞きしゆへ一切艦員の上陸を禁じ直に石炭を搭載して翌十月一日拔錨蘇士運河を過ぎて紅海に入り此處にて水雷發射演習を試み百度内外の酷熱を忍びつゝ諸繰練を積行し同八日紅海を出で千四百四十六海里を航して翌九日亞丁に到着し航海中死去せし高砂の兵員を葬り又故海軍大尉林譲作氏の墓を吊し石炭を積入れたる後十日拔錨航程二千百四十八海里にして十九日古倫母に到着し復た千六百七十七海里の航程を經て二十八日新嘉坡に寄泊し更に八百七十三海里を過きて十一月二日暹羅灣の北奥なる湄南河口四海里の沖に投錨せり。

暹羅國が帝國と交通を開始せしは遠く我慶長年間に在り當時我邦の執政者たりし家康は盛に海外との貿易を奬勵し南洋諸邦及西洋各國に交渉して商船の往來を圖り遂に暹羅國王に對し「今より以後貴邦鄙國と毎歳貿易商舟の往來あるに於

ては兩國和平人民和熟遠方も比隣の如く厚盟を修むへき也」との信書を送り以て修交を求むるに至りしか是より先き我邦に於ては豊臣家の黨與關ヶ原及大坂の戰敗以來德川氏の下風に立つを屑とせず一族を擧けて海外に逃れたるもの多く暹羅國のみにても移住者數百に達して純然たる一個の日本町を成し朱印船の往復するもの二十六艘の多きに達したり加之ならず駿州の奇傑山田長政此國の兵亂を平げて殊勳を建て遂に國王の女婿と爲りて國政に參與するに至り爲めに彼我の修交愈親密の度を加へしが幾もなく長政は奸臣の爲めに横死を遂げ其子ナイン義兵を起して屢大敵と奮鬪し力竭きて他邦に奔るに及ひ暹人漸く我居留民を疎外し終に我寛永十年邦民に退去の令を下せるのみならず暹羅灣に軍船を艤して邦民を要擊せんと試みたり然れとも勇敢なる我居留民は毫も狼狽せず相顧みて曰く日本の武名を汚す勿れと直に決戰を開きて敵の船隊を擊破し悠々同國を退去したり然るに之と前後して德川幕府は遽に從來の政策を一變し鎖國方針を採るに至りしかば敢て彼れの罪を問はんとせず兩國の交通茲に一旦中絶するに至りしが維新の後再ひ國交を修め以て今日に至れるなり。

現今の首府たる盤谷は百四十年前の創建に繫り湄南河に跨りて河口より約二十五海里の處に位置す。其東岸は障壁を以て市街を圍み內に王宮及諸官衙あり市街には電氣鐵道四通して往來頗る便なり。目下の人口は約三十五萬に達し本邦人の在留するもの八十餘名なりと云ふ。今其地勢を調査するに廣袤は東西約五百英里南北千英里にして國內山岳少く沃野千里に連り湄南河中央を貫きて其流域最も豐饒なり。氣候は三四月の交より十月迄を雨期と爲し十一月より二月迄を乾燥期と爲す。氣溫は八十五度より百度の間を昇降し五月を以て酷暑の季と爲せり。盤谷附近の三四州は王化普及すと雖も緬甸に接する西北部及安南に接する部分は總へて其地方に於ける酋長の權內に在るものゝ如し。全國の人口は九百萬にして陸軍は近衛一聯隊歩兵八聯隊砲兵一聯隊及騎兵一聯隊より成り。又海軍は大小軍艦都合二十二艘を有すれども其最大なるものを以てして尙且つ排水量三千噸に過きず。概ね千噸に滿たざる小艦のみなりといふ。

我艦隊の湄南河口沖に投錨するや。暹羅國砲艦一艘直に我公使館員及暹羅國海軍將校を載せて本艦の側に來り。尋て是等の歡迎者は續々艦內に詰掛けしが偶〻艦員は明三日天長節奉祝の準備に忙殺せられ居るの際なるを以て頗る混雜を極めたり。明くれは三日。淺間。高砂の兩艦は滿艦飾を施し。次て遙拜式を行ひて聖壽を奉祝したる後。我司令官及艦長の一行は。我公使館に於て開催する夜會に出席の爲め湄南河口に上陸。直に汽車に投して盤谷に赴きたり。予は水雷長其他の將校と共に暹羅政府より差遣したる小蒸汽船に搭し。軍樂隊をして喇叭たる音樂を吹奏せしめつゝ。湄南河を溯りぬ。行く〳〵兩岸を展望すれは。熱帶の草木鬱蒼として。寺院の尖塔。赭色の堂宇。其間に隱見し。風光頗る佳なり。盤谷に近づけば。商家孰れも河岸に沿ひ。水に臨みて櫛比し。市人皆小舟に棹して彼方此方に行通ふさま。さながら伊國ヴェニスの面影あり。予等は途中五時間を費して。午後二時頃。盤谷府に到着し。佛人の旅館に投して。少憩の後。やがて予と水雷長と四名の少尉とは。馬車を雇ひて府內隨一の靈場なる「ワッ、サケ」に參謁す。寺主大僧正タンマ、ターナー、サニリヤ師直に出てゝ予等一行を迎へ。正殿に導きて接待懇切を極む。寺內に我智恩院の派遣留學生概旭乘師あり。予等の爲に通辯の勞を取り。告げて曰く。大僧正は我艦隊の寄港を聞て喜ぶこと限りなし。日本と暹羅とは共に佛教國なれば。親しむべき因緣ありとて。切

に貴官等の來訪を遲ち居たり。當國にては僧侶の權威驚くべき程にて。從て大僧正の如き高官は。皇族にあらざれば之を與へさるの例なるに。タンマ師ハ布衣より起りて此高官に陞れり。是れ實に異數にして。亦以て師の如何に尊信せらるゝかを知るべく。國王迄も禮を厚くして師事し居れりと。予咳一咳して曰く。由來佛教國は衰運に傾けるもの多く。終に歐人をして。亡國の宗教にあらざるかを疑はしめたる程なりしが獨り我日本は佛教信徒の最も多きに拘らず。國威隆々として旭日の如く。今や遙に英國と同盟を訂し。以て東洋の平和を圖るに至りしは。實に佛教の爲めに人意を强うせしむるものにあらずや。迦羅も亦我れと同しく佛教の獨立國なり。予は貴國將來の隆運を冀望し。併せて大僧正の好機を待ちて一度我邦に飛錫し。具さに宗教を視察せられんことを望むと。タンマ師欣然として。貴下の言頗る善しと答へ。種々の饗應あり。夫れより又佛牙の舍利を示し。更に親しく寺内各所を案内す。先づ螺旋して正面の石階を登れは。上は佛骨を安置せる聖堂にして。内に數千體の佛像あり。大僧正徐ろに香木を以て刻めるものと。金屬を以て鑄造せるものと。二體の佛像を手にして曰く。是れ頗る由緒あるものなり。貴下に贈りて。以て今日の紀念と爲さんと。更に數體の佛像を出して。諸將校に分贈し。轉して他の堂宇に至り。復た古代の佛畫一幅を予に贈りしが。水雷長の盆栽を樂しむの狀あるを察し。珍奇なる閑二鉢を贈れり。予等は厚く謝辭を述へ。明後日來艦せんことを請ひ。別を告げて寺院を出で。再ひ馬車を驅て。王宮及王宮内の寺院を巡覽す。先つ正面より宮殿を望めば。屋根の兩端針の如く尖りて。斜に天を指し。五色に塗れる外壁には。處々に。金箔燦然として輝き。結構總へて印度風を模して頗る奇觀なり。正面には四方に巨象の彫刻物を配し。屋上に小鳥亂飛して。滿目佛教趣味を帶ぶ。寺院は猶一層の美觀にして。壁に地獄極樂の密畫を描き。廻廊及殿堂は宮殿と同しく五色の上に金色を塗れり。予等一巡の後王宮を辭して旅館に歸り。直に寢室に入る。炎暑燒くか如く。無數の壁虎枕邊に奇聲を發して。睡眠を妨くると夥し。

五日。タンマ大僧正は。約の如く二人の徒弟と。概氏とを從へて來艦し。復もや諸將校に數體の佛像を贈れり。予と水雷長は。相識の故を以て主として之が接待に任し。先つ師を士官室に誘ひ。茶菓を供せしに。午後には全く飲食せずとて辭退したるを以て。直に師を導きて艦内各所を巡覽せしむ。師は極めて滿足に堪にざるものゝ如く。

左右を顧みて種々質問する所あり。是日、予は本邦より齎せる蒔繪煙草函、扇、寫眞等を師に贈り、以て前日の答禮と爲しぬ。黄昏の頃、師は本艦を辭し、小蒸汽船に搭して盤谷府に歸れり。

是より先き、司令官及艦長の一行は、三日、公使館の夜會に列し、五日には、暹國外務大臣と特別汽車に同乘してバンパイの離宮に趣き、同所に於て國王陛下に謁見し、優渥なる勅語を賜はりたる後、一同御陪食の榮を得、又艦長以下十數名の將校は、海軍大臣の催ふせる晩餐會に列して、盛なる饗應を受け、其際、同國士官の武術的遊戯を一覽したりといふ。

翌六日、曾て此地に於て病沒せし故橋立乘組熊谷兵曹の追悼祭を催ふせり。是日、又司令官は稻垣公使夫妻、政尾法律顧問官夫妻其他重立ちたる居留民及暹羅政府の接待委員等を艦内に招待して、午餐を饗し、右の終ると共に、直に出港の豫定なりしも、都合ありて翌七日に延期し、同日早朝、終に暹羅灣を拔錨し、千七百七十海里の航程を經て、十五日、香港に至り、更に復た三百二十八海里を航して、二十日、厦門に投錨し、此處にて帝國軍艦千早と會合のうへ、二十二日、横須賀に向ひ厦門を出港せり。我

艦隊は臺灣の南端附近に於て千早と別れ、更に針路を紀州潮岬に取りて前進せしが、二十七日午後三時、同處に接近したるを以て、先つ望樓に向ひ、明二十八日正午横須賀入港の旨を海軍大臣及横須賀鎮守府司令長官に電報すべしと命し、斯くて二十八日午前十時、兩艦進んで將に東京灣に入らんとす。

人世快心の事多しと雖も、長途の航海を了りて、始めて故國に歸着せる時より愉快なるはなし。這般の消息は到底實驗せざる者の夢想し能はざる所にして、況んや今回の如き身に重任を負ひ、二萬餘里の鵬程を回航して、恙なく故國に歸着せる場合に於てをや。夫れは偖置き、我艦隊と降雨とは宿世如何なる因緣ありてや、雨中を以て横濱を出發し、雨中を以て觀艦式に列したるさへあるに、今復た雨中を以て横須賀港に入らんとす。天公何ぞ奇を、弄するの甚しき。今や我艦隊は濛々たる雨中を衝きて東京灣口に進航し、總員雨衣を着して悉く上甲板に在り、既にして觀音崎附近に達すれば、數十隻の端舟二列に別れ、一齊に撓を立てゝ我艦隊を觀迎し、司令官に向て敬禮を表したり。忽ちにして横須賀丸の船上奏樂の聲起りぬ。是と同時に、我艦も亦進軍の樂を奏し、大軍艦旗を翻へしつゝ徐航して軍港内に入る。十數隻の汽艇は

四方より我れを目指して進航し來り、在泊の諸艦は齊しく登舷禮式を行へり。已にして我艦隊の繫留すると同時に、山本海軍大臣、伊東軍令部長、井上鎮守府司令長官上村練習艦隊司令官、伊東常備艦隊司令官及在泊各艦長等相前後して來艦し、大臣は司令官室に於て淺間、高砂兩艦の士官を會同のうへ、今回の派遣は、實に我國威を中外に宣揚せるものにして、諸將校は益〻勉勵して、此の名譽を永遠に保持し、以て國家に貢献することを期せざるべからずと訓示せられ、踵で東宮武官は、令旨を奉して來艦したり。越へて十二月二十四日、宮中に於て兩艦の上長官以上に御陪食仰付られ、爾他の將校には、二十六、二十七の兩日を以て、芝離宮に於て立食を賜ひ、茲に遣英艦隊の任務全く結了するに至れり。則ち厦門より横須賀迄の航程は千五百四十四海里、航海日數六日を費したるものにして、更に四月七日横濱拔錨以來の經過を回想すれば、我艦隊は日を閲すること二百三十五日、二萬六千二百六十九海里を航過したるなり。

遣英艦隊の歌

頃は卯月の始めとて
さくらの花や錦なす
大命帶びて船出せる
二艘の艦隊勇ましく
一萬餘里の途遠く
波亞剌比亞の海とても
御國に盡す赤心の
身のゆく蘇士譽れぞと
ジブラルタルの要害を
トラフハルガーは此處かとよ
英佛必死の海戰に
盡す忠義を待つなりと
大チルソンの勳功と
それは入る日を知らぬ國
大和心と咲き匂ふ
都を後にはるゝと
淺間につゞく高砂の
指して行衛はブリタニヤ
先づ支那海に印度洋
なぞ恐るべき武夫が
あつき紅海疾く過ぎて
さとる思ひや地中海
めぐれば豫て聞及ぶ
九十餘年の其昔
英吉利國は諸人の
高く掲けし旗の文字
共に千歲も耀かん
われは元より日の本の

因縁や深きプリマウス
シヤチス過きて白耳義の
再びかへるポーツマス
冠いたゞく御式濟み
さしもに廣き港さへ
百艘あまりの軍艦
神は王をば護るてふ
鳴雷凌ぐ祝砲の
許多の旗の其中に
外國人も見よや見よ
大一沾の砦に翻へし
名譽のぬしは是れぞかし
立てしコーリにカーヂフを
またも萬のリスボンや

ポーツマウスの舟繋り
アントワープをめぐり見つ
葉月の始め彼の君の
觀艦式の日となれば
見渡す限り連なれる
喇叭にまじる音樂の
國歌の響き絶間なく
煙りのうちに微見ゆる
目立つは旭日の大御旗
彼の黄海の戰爭や
世界無雙と言はれたる
いざや任務も了へぬれば
名殘となしてかへるさの
チーブル灣の夕景色

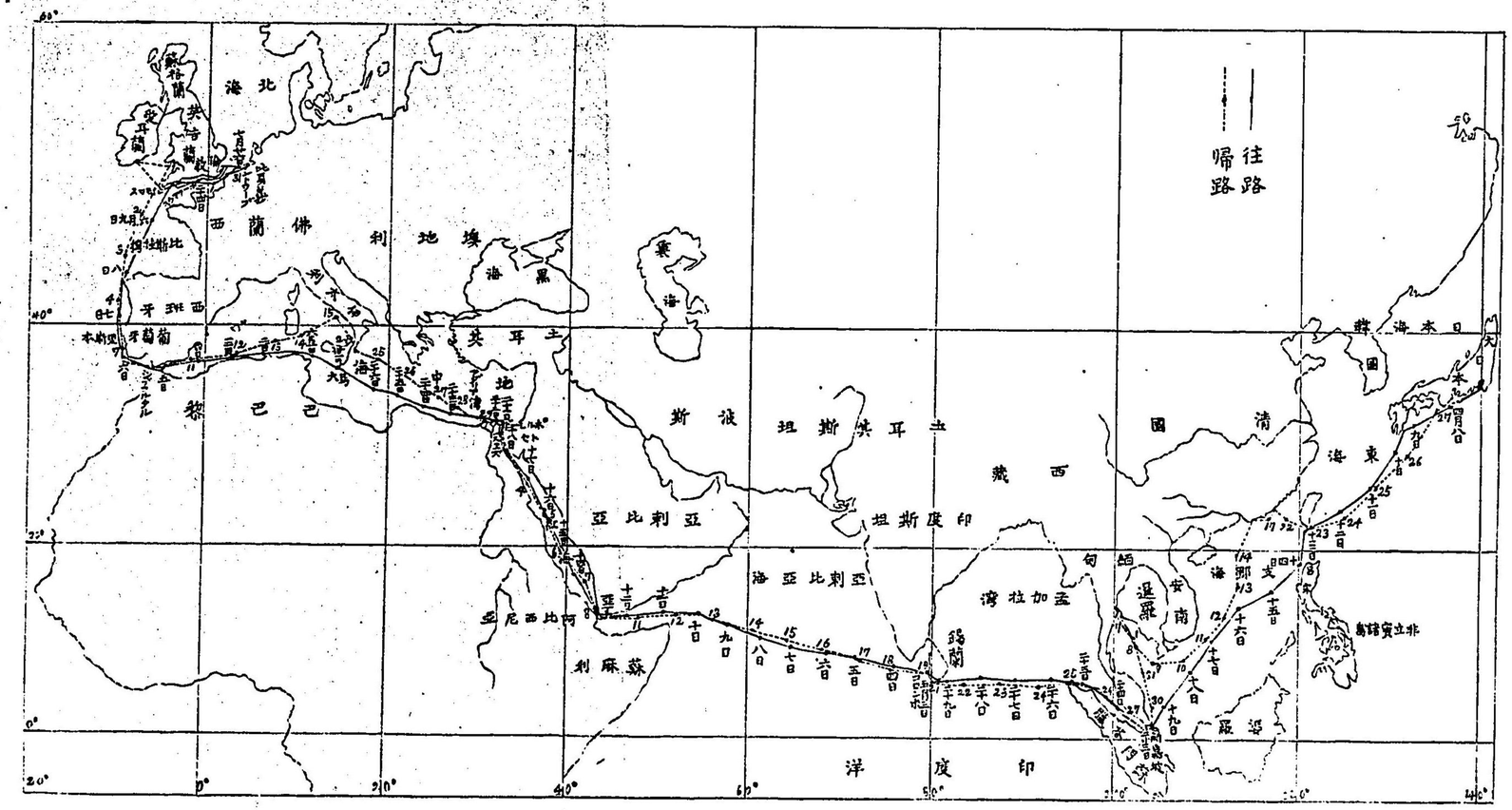
羅馬のむかしを偲べとや
秋も最中のコロンボを
新嘉坡をあとになし
長き海路の恙なく
稜威は高し富士が嶺の
その白雪と諸共に
今日の名譽を汚すなよ

哀れを添ゆる月影の
過ぎてマレーの果ときく
遥羅、香港に厦門島
着くもひとへに大君の
先づ見に初むる灘の上
今日の名譽を汚すなよ

戴冠式參列

渡英日錄

終


往路
帰路
北海
西伯利亜
地中海
黒海
カスピ海
ペルシア
ペルシア湾
印度洋
日本海
東海
清国
朝鮮
ポルトガル
西班牙
亜剌比亞
亜剌比亞海
印度
ボンベイ
カルカッタ
ラングーン
安南
暹羅
香港
上海
長崎
横浜
神戸
大阪
東京
函館
ウラジオストック
ペテルブルグ
モスクワ
ベルリン
ロンドン
パリ
ローマ
ナポリ
ジブラルタル
リスボン
ポルトガル
ケープタウン
ケープ
ジブチ
アデン
ポートサイド
スエズ
カイロ
アレクサンドリア
ハイファ
ベイルート
イスタンブール
ブカレスト
ウィーン
ミュンヘン
ケルン
ハンブルク
ストックホルム
ヘルシンキ
ペテルブルグ
ニューヨーク
ボストン
シカゴ
サンフランシスコ
ホノルル
横浜
神戸
長崎
上海
香港
ラングーン
カルカッタ
ボンベイ
アデン
ポートサイド
ジブチ
ケープタウン
リスボン
ジブラルタル
ナポリ
ローマ
パリ
ロンドン
ベルリン
モスクワ
ペテルブルグ
ヘルシンキ
ストックホルム
ハンブルク
ケルン
ミュンヘン
ウィーン
ブカレスト
イスタンブール
ベイルート
ハイファ
アレクサンドリア
カイロ
スエズ
ポートサイド
ジブチ
アデン
ボンベイ
カルカッタ
ラングーン
香港
上海
長崎
神戸
横浜
東京
大阪
ホノルル
サンフランシスコ
シカゴ
ボストン
ニューヨーク
ウラジオストック
函館
ペテルブルグ
モスクワ
ベルリン
ロンドン
パリ
ローマ
ナポリ
ジブラルタル
リスボン
ポルトガル
ケープタウン
ケープ
ジブチ
アデン
ポートサイド
スエズ
カイロ
アレクサンドリア
ハイファ
ベイルート
イスタンブール
ブカレスト
ウィーン
ミュンヘン
ケルン
ハンブルク
ストックホルム
ヘルシンキ
ペテルブルグ
ニューヨーク
ボストン
シカゴ
サンフランシスコ
ホノルル
横浜
神戸
長崎
上海
香港
ラングーン
カルカッタ
ボンベイ
アデン
ポートサイド
ジブチ
ケープタウン
リスボン
ジブラルタル
ナポリ
ローマ
パリ
ロンドン
ベルリン
モスクワ
ペテルブルグ
ヘルシンキ
ストックホルム
ハンブルク
ケルン
ミュンヘン
ウィーン
ブカレスト
イスタンブール
ベイルート
ハイファ
アレクサンドリア
カイロ
スエズ
ポートサイド
ジブチ
アデン
ボンベイ
カルカッタ
ラングーン
香港
上海
長崎
神戸
横浜
東京
大阪
ホノルル
サンフランシスコ
シカゴ
ボストン
ニューヨーク
ウラジオストック
函館

附錄第一表

遣英艦隊旗艦淺間

表ノ種類　汽走略表

地名／項目	發着ノ日時	航海時數	航程
横須賀	四月五日午前九時五分		
横濱	同　五日午後四時廿二分 同　七日午後一時	D h 〇、七、二〇 m	二六
シンガポール	同　廿日午前九時七分 同　廿三日午前十時五分	二、二一、二二	三〇八八、五
古倫母	同　卅日午前九時三十分 五月三日午前十時三十分	六、二三、二五	一六七九、五
ポートセット	同　廿日午後二時廿九分 同　廿一日午前十時二十五分	一五、一四、三九	三六五五、二
馬留太	同　廿七日午前十時二十五分 同　卅一日午前十時十分	五、一九、五六	一二一四、〇
プリマウス	六月十日午前七時四十五分 同　廿三日午後八時	九、一九、一四	二一五九、七五
ポーツマウス	同　廿四日午後四時二十分 同　廿七日午後五時三十分	〇、一六、二六	一四八七、五
シヤネス	同　廿八日午後四時二十八分 七月廿六日午前三時二十五分	〇、一九、一七	一五九、七五
安士府	同　廿七日午前八時十分 同　卅一日午前九時一分	〇、一六、二四	一六〇、五
ポーツマウス	八月一日午後六時三十八分 同　十八日午後一時	一、一、三八	二四四、二五
ジブラルター	同　二十日午後六時四分 同　廿四日午前七時三十五分	一、一三、四四	三八八、五
リスボン	同　廿五日午前九時 九月一日午前五時十分	一、二、一五	二〇二、〇
ネーブルス	同　五日午前十一時廿四分 同　七日午前五時三十八分	四、六、一七	八六〇、七五
ポートセット	同　八日午前十一時四十六分 同　十日午後四時五十七分	一、五、九	二九七、〇
亞丁	同　十五日午後二時十五分 同　廿三日午後五時	四、一六、五四	九八九、五
古倫母	同　卅日午前六時三十分 十月一日午前五時四十分	六、八、一三	一一七七、七五
シンガポール	同　九日午前八時廿六分 同　十日午後四時五十八分	六、一五、四五	一四四六、七五
磐谷	同　十九日午後〇時五十三分 同　廿一日午前七時〇五分	八、一七、五七	二一四八、二五
香港	十月廿八日午前八時廿五分 同　廿一日午後五時十三分	六、二二、〇八	一六七七、〇
厦門	十一月二日午前六時十五分 同　七日午前七時五十五分	三、一二、四四	八七三、二五
横須賀	同　十五日午前七時四十二分 同　十八日午後四時二十五分	七、一九、五五	一七七〇、二五
合計	同　二十日午前七時四十二分 同　廿二日午前七時〇四分	一、一五、〇	三二八〇、〇
	同　廿八日午後〇時十五分	六、四、一一	一五四四、二五
		一一五、七、五三	二六二六九、四五

明治卅六年三月二十日印刷
明治卅六年四月　日發行

發行兼編輯者　東京市麹町區土手三番町廿一番地　高橋靜虎
印刷者　東京市麹町區下六番町十七番地　松澤玒三
印刷所　東京市麹町區下六番町十七番地　同勞舍　電話番町三六九番
發行所　東京市麹町區土手三番町廿一番地　軍事教育會　電話番町一二五七番
發賣所　東京市麹町區上六番町四十番地　軍事教育會販賣部

不許複製

陸軍歩兵少佐橋周太氏著

經驗餘錄（既刊）

定價金四拾錢
郵稅金四錢

（目次）
第一章 熟成○銃砲火ノ進歩ト教練○各個教練○中隊教練○大隊教練○射撃教育○地物利用○隠蔽○器械体操○野外教練○夜間教育○銃砲火ノ進歩ト駆歩●第二章 徳政○烟火○糧食ト兵卒○無烟火藥ト欠乏○無烟火藥ト隊地○森林○内ノ運動隊形○森林○内ノ運搬○三草●戦闘○將校ノ德義○中隊長ノ教育●第三章 戦闘○兵卒普通學ノ教育●第四章 第一老婆心○第二老婆心

英皇戴冠式參列渡英日錄

定價金四拾錢
郵稅金六錢

子爵小笠原長生氏著

右は子爵の日々の所感出來事を流暢の筆を以て書かれたるものなり興味甚だ多く英國の參遇法及英人の我に對する意向等知るを得べし

應用射撃

定價金貳拾五錢
郵稅金六錢

陸軍歩兵少佐 和田音五郎氏著

去十日發行

緒論
第一章 各種隊形の利害
横隊々形○側面隊形○縦隊々形○各種姿勢
すの隊形○間隔を有する隊形○砲火兵に對
及備隊の隊形○散兵線の利害○効力
形に關する利害の結論○二列及四列隊形○各種隊
第二章 射撃成績上地形の影響及其用法
射撃上地形の標準線の
照準線の上方に傾斜したる地形○傾斜地に對する射
下方に傾斜したる地形○傾斜地に對する射撃
第三章 射撃の種類及其用法
一齊射撃と各個射撃の利害○射撃綱令の規
定○射撃軍紀
第四章 射撃指揮
火線を指揮する各級指揮官の任務○射撃の
指揮の修正及照準點の撰
定○三十年式歩兵銃の溫度及風力に關する
射撃の修正法○射距離の修正量○風力
修正用略法○渾用照尺○目標の選擇及其分
配
第五章 攻撃及防禦に於ける射撃
攻撃戰鬪に於ける歩兵射撃○後方部隊に仍り前進する線の援助○射撃開始の時まで
進する前進火○換し後行の安全○前進ふ
質施隊の前進○運動間の射撃○防禦に於ける
○援射○進出○射撃○戰術との連繫
射撃○道路○射撃○騎兵及砲兵に對する射撃
騎六○騎兵に對する射撃○砲兵に對する射撃○歩
砲効力の比較
附錄
戰鬪的各種目標に對する三十年式歩兵銃の
効力表
各個戰鬪射撃効力表
散開隊次に於ける各種隊形に對する部隊射
撃の効力表
各種の縱隊及騎兵に對する効力表
照尺誤差の爲めに生ずる効力減耗の公算表

陸軍砲兵中佐柴五郎氏口述

北京籠城（附圖三面添）

定價金四十錢　郵稅金六錢

本書は當時北京公使館附武官たりし柴中佐が北清役の起因より說き起して身親しく苦境に在りて目睹耳聞したる事は素より自己の施設したる防禦の計畫實施を講述せられたるものなり之を見る時は身は忽ち北京の人と成りて耳に四方の喊聲怒號を聞き目に劍電彈雨を見るが如きの感あり殊に其熱の下度夜の防戰を見るに至りては血涙肉躍る思わらしめ密使を出すの苦心機食の欠乏を見るに至りては感極つて涙次ぐもの多し一に足らざる以て防戰の施設不完全なるを嘆ずるものあり嗚呼北京の內容は家屋に據て防戰したるのみ且つ子孫に垂教するの價千古に特筆すべきものにして晉人は常餘光榮の保證として之を記臆に刻み且つ子孫に垂教するの務ありと云ふ可べし

○本會ハ國家思想ヲ發揮センメ軍事思想ヲ掃起セシメント欲スル目的ヲ以テ左ノ如キ畫ハがきヲ發行スル事ト爲セリ

武士道端書

之を分ちて四組とす一組は八枚にして四組參數拾貳枚なり但し順宜を計り一組以上需要に應ず定價壹組に付中金拾錢下金五錢郵稅は四組迄金貳錢

定價金四拾錢　郵稅金貳錢
下定價金貳拾錢　郵稅同上

第一集八勤王（奉する圖。楠山陽外史を賛み政記を著はすの圖。高山彦九郎宮城を拜するの圖。月照薩海に沈み浮ふる圖。重藤謙吉の圖。信長密旨を清廣復命の圖。）

第二集八武鑑（川家康の圖。元寇河野通有奮鬪の圖。村上義光錦旗を奉ふの圖。南地氏筑後守如意輪堂の圖。木多平八郎芳吉に跟隨の圖。谷村出介使命を全ふする圖。）

第三集八武德（忠君の圖。果敢の圖。禮式の圖。馬戰の圖。親切の圖。節儉の圖。沈着の圖。剛毅の圖。）

第四集八軍人（歩兵復喰の圖。璃兵斥候の圖。砲兵砲擊の圖。工兵架橋の圖。機關兵機關手入の圖。水兵砲擊の圖。火兵發火の圖。輜重兵駄馬を引くの圖。）

大戰學理再版豫約募集

右は獨逸現行の軍制戰略戰術の基源にして深遠なる學理を平易の文字を以て親切丁寧に解釋せられたるものなり其眞價に至ては世間に定評あるあり

目下六冊發行

大戰學理購讀規定

一全部を分ちて八卷と爲し概れ毎月一冊宛發行の豫定なり但し出來期日は其時々軍事新報紙上に廣告すべし一冊實費を平均金拾錢宛とし郵稅は平均一冊約金八錢宛とす最初に限り二冊分即ち金壹十六錢宛納むるも妨りなし又若し遠送費金部に於て六錢以內の過不足を生するも決算を行はず

一本書は凡て前納にして會友に限り購讀することを得但軍事新報讀者は特に會員と見做すべし

一豫約者にして書籍出來後二ヶ月以內に代金御送納なき者は出版部數多からざるを以て品切を出すも本會其責に任せず途中に廢讀せらるゝ時は一冊分は沒收とす

獨逸歩兵中佐エルフオンブリーセン氏著
陸軍歩兵大尉野澤悌吾氏譯

歩兵戰鬪展開

定價金三十錢　郵稅金六錢

此書固と「歩兵中隊、大隊、聯隊及旅團の戰鬪展開」題一と名け諸種の狀況を想定して問題を設くること百餘而して一々之れが答解を掲げて施行の方法を示し數十の圖を加へて讀者の了解に便し且つ簡より繁に移り特に歩兵の最大單位たる旅團の展開を詳述し以て歩兵操典第二部の應用を指導するに供し初級將校の好伴侶たるを得へし學者若し此書を研究し更に之れを野外に移して其活用を講ずれば得る所必ず多大なるべし此書既に操典の應用を目的とす從て其命令の一部は蓋し戰略上の取るへき正面幅を命じたるの形跡なきは勿論防禦及び攻擊に方て各部隊に陷るの通弊を矯んと欲する著者の微意に出てたるが如し戰鬪不知不識正面過廣とならざる迄に各部隊に陷るの通弊を矯んと欲する著者の微意に出てたるが

陸軍歩兵少佐橘周太氏著

第三版訂正 歩兵夜間教育

目次

緒論

第一 射撃法、射撃の教育

第二 視力の養成、視力の教育

第三 聽取の教育

第四 部隊行進の教育

第五 不整地行進、不整地行進の教育

第六 火点の測知及點火法、方位の測知及點火法の教育

第七 射撃の教育

第八 射撃術、銃剣術の教育

第九 銃剣術の教育

第十 工作の教育

第十一 部隊の射撃の教育

第十二 部隊の運動、部隊運動の教育

第十三 部隊の工作、部隊工作の教育

第十四 部隊の突撃、部隊突撃の教育

第十五 歩哨、歩哨の教育

第十六 斥候、斥候の教育

第十七 夜行軍、夜行軍の教育

第十八 警戒及捜索、警戒捜索方法の教育

第十九 前哨、前哨の教育

第二十 夜戦、夜戦の教育

結論 夜戦に関する一般の注意

定價金十錢 郵税金二錢

露國諸兵戰鬪法

本書は露國騎兵操典並に二三の著書を參照し編纂せるものにして分つて歩騎砲兵及輜兵隊合の四部とし尚巻尾に夜間戰鬪の部を添附せり抑も本書の目的は主として露國騎兵戰鬪法の概略を紹介せんとするにあり故に其細部に關する事項は勉めて之を省略し殊に速射砲に關しては不明の点少からざるを以て本書の体裁を欠くの感なきにあらず後日を待て訂正補遺する所あらんとす讀者之を諒せよ

S生

第一編 歩兵の部

第一章 徒則 露國騎兵戰鬪法目次

第二章 攻撃之部

第一 攻撃動作○第二 行進序列より戰鬪の前進○第九 隊の前進○第十 隊の使用○第十一 突撃○第十二 突撃効果○第十三 包圍及其防禦

第三章 防禦之部

第四 攻撃に關する特別なる場合

第一 防禦動作○第二 陣地の撰定及其占領○第三 防禦に於ける射撃及逆襲○第四 退却

第四章 特別動作之部

第一 騎兵露撃の防禦○第二 我砲兵に對する歩兵の位置及義務○第三 敵の砲兵に向てする突撃○第四 夜間の動作○第五 戰鬪間に於けゝ弾薬補充法

附錄

第一 露國歩兵銃の性能

第二 軍用工具並戰鬪工作○第三 騎兵の部

第一章 徒則

第二章 編制

第三章 行進速度

第四章 乘馬戰鬪

第一 騎兵の隊形○第二 騎隊の隊形○第三 中隊の隊形○第四 戰鬪隊形○第五 襲撃○第六 陣地の撰定○第四 退却

第五章 徒歩戰鬪

第一 下馬○第二 戰鬪間に於ける彈薬補充法

附錄

第一 輜重○第二 下馬

第三編 野戰砲兵の部

第一章 野戰砲兵材料

第一 火砲○第二 彈薬○第三 射撃能力

第二章 各種砲の縦隊

第四 野戰砲兵の編制

第一 一般の概要○第二 中隊の編制

第三章 操砲の概要

第一 砲手の區分○第二 砲手の定位

第四章 中隊の區分

第一 中隊の區分○第二 中隊の基本隊形

第五章 大隊の區分及び基本隊形

第一 大隊の基本隊形○第二 大隊の駐屯の適用並に刀の距離

第六章 戰鬪

第七章 一般の原則○第二 陣地の撰定並に進入○第三 射撃○第四 攻撃並に防禦○第五 騎兵の動作○第七 人馬彈薬及び材料の補充

第八章 射撃法の概要

第一 不動目標に對する射撃○第二 進動目標に對する射撃○第三 移動目標に對する射撃○第四 特別の場合に於ける射撃

附錄

第一 輜重○第二 彈薬縦列○第三 戰時砲兵隊食分配表○第四 砲兵隊工具數

第四編 騎兵極運合の部

第一章 集合隊形

第二章 戰鬪隊形

第一 歩兵及騎兵○第二 騎兵及騎砲兵

第三編 野戰砲兵の部 騎兵隊工具表

第三章 戰闘隊次の運動
附録 夜間戰闘
第一章 總則
第二章 攻撃動作
第一 總則○第二 戰闘隊次○第三 砲兵の使用○第四 騎兵の使用○第五 各隊長の任務 其一 ヶ隊長○其二 下級隊長
第六 戰闘命令○第七 前進及攻撃
第三章 防禦動作
第一 準備○第二 射撃○第三 陣地占領

全上製定價金參十錢 郵税金六錢

第二版 斷機慨録 定價並製金二十錢 郵税金四錢

目次

第一編 獨立(一名自主論)
第一章 青年の本領
其一 血性活潑
其二 甲 眞勇○乙 守勇
獨立自尊○其三 強身健體○其四
識見○其五 恥心 廉心○其六 背
第二章 青年の心識
其一 修養 鍛身○其二 跋涉○其三 讀書
其甲 史學○乙 文學
其四 修養の要
第三章 立志
其一 抱負○其二 砥礪○其三 自任 其四 研究○其五 立志の礎
第四章 成功
其一 決心○其二 沈進○其三 戰勝○其四 自信○其五 熱心○其六 成功の要訣
第五章 偉人
其一 偉人とは何者か○其二 偉人の心性
其三 偉人の境遇○其四 偉人倣ふべきか

第二編 反省(一名他主論)
第一章 今日
其一 今日の社會○其二 今日の教育○其三 今日の道念○其四 今日を如何せん
第二章 昔日
其一 昔日の武士○其二 昔日の教育○其三 昔日の道念○其四 昔日を如何となす
第三章 修養
其一 修養の初徑
其二 甲 讀書○乙 靜思○丙 誠意○丁 愼○戊 恭敬○癸 實行
其三 修養の近道○其三 修養能の爲か
第四章 悟道
其二 道德
第五章 社會道德
其一 汎博道德○其二 個人道德○其三 國家道德○其四 ○其五 我道德
第六章 偉人と道德の基準如何

陸軍騎兵大尉國光促氏著

馬術教程(本日發行)

定價金拾五錢 郵税金四錢

(目次) 總論●第一編 馬學○甲 外貌 一、馬種 二、本邦馬匹 三、馬匹ノ構造及諸機能 四、外貌 五、馬體區分及名稱 六、毛色 七、別徵及損徵 八、年齡及齒 九、步法 一〇、本邦軍馬步長表 一一、悍威持久力及體質 一二、乘馬ニ適スル馬体ノ發育 乙 衛生 一、大氣及氣象 二、皮膚ノ衛生 三、飼養 四、厩舍及寢藁 五、疾病○丙 雜録 一、名稱 二、馬體ノ法 三、馬裝抜衣○第二編 馬術

●第一章 水物教練○第一 通則 騎坐及乘馬ノ姿勢 三種ノ扶助 一、騎坐ノ扶助 二、脚ノ扶助 三、韁ノ扶助○扶助ノ一致 一、銜ヲ受ケシムル法 二、收縮 三、前進及步度ノ増加 四、步度ノ減却駐立及退却 五、内方姿勢 六、回轉及斜乘○步調 馬場○第二 隊行演習 馬ヲ索ク法 馬場内ノ整列 飛乘及飛下、飛下リ飛乘 柔軟體操○第三 鐙ヲ用ヒザル演習 蹄跡行進 斜手前變換 隊列 步度ノ増加、速步ノ伸暢及短縮 又方姿勢輪乘 各乘及半信地旋回 退却 横步 斜步○第四 鐙ヲ用フル演習、鐙ヲ踏ム法、乘馬下馬、各個乘、障碍飛越●第二章 大勒教練、大勒ノ發法、大勒韁及小勒韁ノ用法

軍事新報

毎土曜日發行

一冊定價金三錢◎郵税五厘◎一ヶ年分豫約八拾貳錢前納者には表紙を附る

軍事新報は軍事上に於ける唯一の週報雜誌なり
軍事新報は記事確實所説穩實にして又適切なり
軍事新報は軍事界の小天地にして又指導者なり
軍事新報は軍事上の疑問に對する耳答辯者なり
軍事新報は軍事界に於ける唯一の耳教育者なり

大和魂(三日十五日發)

公共の利益を目的として學校團体又は郷黨の子弟等へ寄附の分は郵税を免ず目下十九冊發行第一號より再版出來取揃あり

大和魂の目的

大和魂發行の重もなる目的は日に益々東洋の風雲急調なるに際し却て國家元氣の消沈せんとするものあるを憂ひ大に我國特有の精神を發揮擴張して以て健全なる國民と健全なる軍人とを養成せんと欲するに在るなり

大和魂の資料

全國將校團長は精神教育の資料を交換せんが爲めに又全國聯隊區司令官は在郷軍人をして軍人精神を保存せしめ且國民をして尚武思想を興起せしめんが爲めに記事を寄贈せらるゝに因り材料豐富にして記事精確なり

大和魂購讀

本誌の購讀は凡て前金とす切手(切手の種類は五拾錢より大ならざるを要す)代用は一割増なり◎本誌の發行は一ヶ月一回にして定價金參錢郵税金五厘とす軍人(但し將校を除く)小學校生徒及婦女子は郵税を免除す

伊東大將寺内中將序 付少將小笠原子爵校閲
伊崎大佐 横井 編修校訂
軍事教育界理事陸軍歩兵中尉高橋靜虎編纂

第六版 軍人讀本 卷ノ一

定價金拾貳錢 郵税金四錢